

筑波大学博士（言語学） 学位請求論文

とりたて詞の統語と意味から見る  
日本語否定極性表現の研究

井戸 美里

2016 年度

# 目次

<b>序章 研究の背景と目的</b> .....	<b>1</b>
0.1 本研究の背景と目的—否定極性表現ととりたて詞— .....	1
0.2 対象となる現象.....	4
0.3 本論文の構成.....	5
<b>第1章 先行研究と問題の所在</b> .....	<b>9</b>
1.1 本稿の理論的背景と先行研究の概観.....	9
1.2 否定極性表現の構造と認可 .....	14
1.2.1 GB理論におけるシカとwh-モの分析 .....	14
1.2.2 ミニマリスト・プログラムにおけるシカとwh-モの分析 .....	17
1.2.3 先行研究の問題点 .....	19
1.3 とりたて詞としての否定極性表現.....	22
1.3.1 とりたて詞とは.....	22
1.3.1.1 とりたて詞の意味的特徴.....	22
1.3.1.2 とりたて詞の統語的特徴.....	24
1.3.2 とりたて詞の統語的階層と否定極性 .....	27
1.3.3 先行研究の問題点.....	30
1.4 本稿の立場.....	32
1.4.1 本稿の目的.....	32
1.4.2 本稿のアプローチ—係助詞・副助詞の違い— .....	33
1.5 第1章のまとめ .....	39
<b>第2章 否定的特立を表すとりたて詞     ナドにおける肯否の対立</b> .....	<b>41</b>
2.1 はじめに.....	41
2.1.1 本章の目的.....	41
2.1.2 対象となるデータ .....	42
2.1.3 本章の構成.....	44
2.2 先行研究.....	44

2.2.1	ナドの意味的特徴.....	44
2.2.2	ナドの統語的特徴.....	46
2.3	現象の観察.....	47
2.3.1	名詞性の違い—格助詞、コピュラの承接順序—.....	48
2.3.1.1	格助詞の後接.....	48
2.3.1.2	コピュラの後接.....	49
2.3.2	焦点の拡張.....	50
2.3.2.1	目的語からの拡張.....	52
2.3.2.2	主語からの拡張.....	53
2.3.3	サエの後接.....	55
2.3.4	ここまでのまとめ.....	56
2.4	更なる裏付け.....	57
2.5	第2章のまとめ.....	59

### **第3章 意外を表すとりたて詞マデにおける肯否の対立.....60**

3.1	はじめに.....	60
3.2	先行研究.....	62
3.2.1	マデと否定のスコープ.....	62
3.2.2	問題の所在.....	64
3.3	現象の観察.....	67
3.3.1	格助詞の後接とハの後接.....	67
3.3.2	疑問文化の可否.....	69
3.3.3	提案.....	70
3.4	第3章のまとめと課題.....	71

### **第4章 肯否の対立における「とりたて詞+ハ」と 他のとりたて詞への拡張.....72**

4.1	はじめに.....	72
4.2	先行研究.....	73
4.3	二つのナド、二つのマデ.....	75
4.4	ハの後接と否定極性.....	77
4.4.1	ナド、マデとハの後接.....	77

4.4.2	ダケとハの後接.....	78
4.4.3	更なる裏付け—シカの成立—.....	80
4.5	他のとりたて詞への拡張.....	82
4.5.1	評価を表すとりたて詞—ナンカ、トカ、ナンゾ (ナンザ)、ナンテ—.....	83
4.5.2	意外を表すとりたて詞—モ、サエ—.....	86
4.6	第4章のまとめと課題.....	87
4.6.1	まとめ.....	87
4.6.2	課題—とりたて詞の個別の特徴について—.....	88

## 第5章 否定極性表現と非否定極性表現の対立 —定性効果から見たダケ、シカの前提集合—.....91

5.1	はじめに.....	91
5.2	先行研究.....	92
5.3	ダケとシカの前提集合.....	95
5.4	定性効果とダケ・シカ.....	96
5.4.1	所有文、絶対存在文のガ格名詞句の特徴.....	96
5.4.2	現象の観察.....	98
5.4.3	否定すべき他の要素が存在しない文脈.....	102
5.5	他のとりたて詞表現への拡張.....	103
5.6	第5章のまとめと課題.....	104

## 第6章 否定極性表現の2種 —シカとwh-モの比較を中心に—.....106

6.1	はじめに.....	106
6.2	先行研究.....	108
6.2.1	シカと誰モの統語構造.....	108
6.2.2	NPIとNCI.....	110
6.2.3	問題の所在.....	111
6.3	現象の観察.....	111
6.4	提案.....	114
6.5	1-モ vs. 2-トハ・マデ B (マデハ).....	116
6.6	第6章のまとめと課題.....	120

<b>終章  まとめと展望 .....</b>	<b>122</b>
-------------------------	------------

参考文献.....	130
-----------	-----

既発表論文、口頭発表との関係.....	137
---------------------	-----

# 序章 研究の背景と目的

## 0.1 本研究の背景と目的—否定極性表現ととりたて詞—

本研究は、現代日本語の否定極性表現を、とりたて詞の統語的・意味的観点から分析することを目的とする。否定極性表現とは、統語的に否定と一致する必要のある（否定辞との共起が必須の）表現のことを指す。代表的には、英語の *any* や日本語のシカ、wh-モ（何モなど）が挙げられる。

- (1) John didn't say anything. /\*John said anything.
- (2) 公園には 太郎シカ／誰モ やって {来なかった／\*来た}。

生成文法の理論的なアプローチでは、人間言語の普遍性を明らかにすることを目的とし、このような否定極性現象を一致 (Agree) という普遍的な統語的操作の一種によって説明してきた。一致は、一方の要素が一方の要素の生起を可能にするという点で、認可 (Licensing) とも捉えられる。否定極性表現は、理論的には英語の *any* の認可条件を中心に、意味的・統語的に多くの先行研究の蓄積がある (Klima 1964、Jackendoff 1972、Ladusaw 1979/1980、Pollock 1989 他)。日本語についても、英語の *any* との比較対照を中心に複数の提案がなされている (Kato 1985、Aoyagi & Ishii 1994、Watanabe 2004、渡辺 2005、片岡 2006、Kuno 2007、西岡 2007 他)。しかし、いずれも英語との比較を中心に否定極性表現の統語的な認可の方策を探ることや、否定辞の統語的位置を明らかにするということが目的としており、シカや wh-モに関する個別の現象の分析にとどまっている。否定極性表現の体系およびその日本語における位置づけについては十分に議論されていないのが現状である。

一方で、もちろん英語と日本語では異なった現象もあり、一口に否定極性表現といってもかなりの多様性がある (Kato 1985、工藤 2000 他)。特に日本語の否定極性表現は、その一部が「とりたて詞」という語群に属しているという特徴を持っている。前述のシ

カや wh-モノモは、いずれもとりたて詞として分析される。とりたて詞とは、山田 (1936) に代表される国文法で「係助詞」「副助詞」とされた語群の一部を一定の統語的・意味的特徴から再カテゴライズしたものである (奥津 1974、沼田 1986、沼田 2009 他)。(3) の、ダケ、モ、ハ、バカリ等の要素が該当する。

(3) 太郎は うなぎ {ダケ／モ／ハ／バカリ} 食べた。

特に、沼田 (1986) 以降、多くの先行研究がとりたて詞の個別の特徴や体系がどのようになっているかを明らかにする試みを続けてきた (野田 1995、佐野 2001、茂木 2004、青柳 2006、澤田 2007、宮地 2007 等)。しかし、先行研究での否定極性を持つとりたて詞の扱いは、とりたて詞の中に体系的に位置づけられるというよりは、個別の特殊な性質として特記されるにとどまっている。ところが実際の現象を見てみると、日本語の否定極性表現はとりたて詞を伴ったものが一つのグループをなしていることが分かる。

- (4) a. 公園には、太郎シカ {来なかった／\*来た}。  
b. パーティでは、何モ／一つモ {食べなかった／\*食べた}。  
c. 店に客は、二人とハ {来なかった／\*来た}。  
d. 学校には、危険人物ナド (ハ) {いなかった／\*いた}。  
e. 子どもの喧嘩で、警察マデ (ハ) {来なかった／\*来た}。

つまり、否定極性表現ととりたて詞の包含関係を図示すると図 1 のようになる。網掛け部には、シカや wh-モの他、(4)で挙げたとりたて詞群が属する。

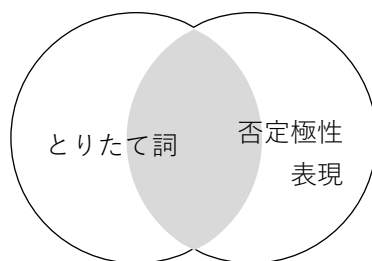


図 1：とりたて詞と否定極性表現の包含関係

ここまでの内容をまとめると、否定極性表現研究においてもとりたて詞研究においても、「日本語としての否定極性表現の特徴はどのようなものか」「日本語の中で否定極性表現はどのような体系をなしているのか」ということは論じられてこなかったということになる。

以上のような背景を受け、本研究では、日本語の否定極性表現の体系性を明らかにする取り組みの一環として、否定極性表現をとりたて詞の統語と意味から分析することを試みる。金水 (2002) や長谷川 (2007) は、日本語はとりたて詞のような話者の判断を表示する要素が顕著に発達している言語であることを指摘している。そのことを踏まえると、とりたて詞から日本語の否定極性表現にアプローチすることは、その特徴を明らかにするのに有効な手段であると考えられる。言い換えるならば本研究の試みは、否定極性表現の一部をとりたて詞の性質によって分解していく作業とも言える。

否定極性表現をとりたて詞の観点から分析することの利点は他にもある。とりたて詞には、否定極性を持つものと持たないものがある。よって、とりたて詞としての性質を持つ否定極性表現は、否定極性を持たないとりたて詞と比較することができるのである。この観点もまた、否定極性表現だけを見ては分析できなかった点である。また、本研究はとりたて詞の体系性を論じることは目的ではないが、とりたて詞と否定極性との関連を明らかにすることは、とりたて詞の多様性を体系的に切り取る新たな観点を提供することにもなる。

本論文は、以上のような背景から、大きく二つの論点にそって日本語の否定極性表現の体系性を論じていく。

- (5) a. 日本語の否定極性表現の体系性を明らかにする試みの一環として
  - i. とりたて詞における否定極性の有無を整理する。
  - ii. 否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞を比較し、否定極性表現の特徴を明らかにする。
- b. (5a)で明らかになった否定極性表現の特徴を前提として
  - i. 否定極性表現の意味的な特徴を明らかにする。
  - ii. 否定極性表現の統語的な多様性を明らかにする。

次節で詳述するが、本稿は(5a)と(5b)に対応して、緩やかな2部構成をとっている。まず前半では、(5a)を中心的に扱う。先行研究では、否定極性として扱われてこなかったとりたて詞の中には、否定極性を持つものとして扱った方が合理的な現象がいくつか見ら



れることを指摘する。そして、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞を比較し、そこにはどのような違いや対応関係があるのかを明らかにする。特に本研究では、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞は、「ハの後接」という統語的な操作を介して対応関係にあることを指摘する。

後半では、(5b)について中心的に扱う。まず、(5a)で明らかにした「ハの後接」によるとりたて詞における否定極性の有無の対立が、意味的な対立とも対応関係にあることを論じる。さらに、否定極性表現の中には、(5a)で明らかにした否定極性表現が持つ「ハの後接」という特徴を持つものの他に、「モの後接」という特徴を持つ要素が存在し、両者は統語的な分布が異なることを指摘する。

本稿は、分析手段として生成文法の基本的概念を用いる。それは、沼田 (1986) の指摘するとりたて詞の4つの統語的特徴と、生成文法理論を用いた分析には共通点が多いこと、そして、共通点を捉えつつも、生成文法の装置を用いることでとりたて詞の否定極性の特徴を体系的に捉えることができるためである。つまり本稿は、生成文法の理論装置をより洗練させることは目的としておらず、むしろ、その理論装置を用いて否定極性表現の統語的特徴を体系的に記述することを目指している。

## 0.2 対象となる現象

否定極性を持つとりたて詞の特徴を分析する際に有効なことは、否定極性を持たないとりたて詞と比較対照することである。しかし、とりたて詞に関する先行研究は、否定極性について、シカや wh-モなどの一部のとりたて詞の特徴として特記するにとどまっている。そこで、本論文ではまず、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞の対立を洗い出すことを試みる。具体的には、以下の①②のような述部の肯否の対立を持つとりたて詞を分析し、両者が統語的にどのように異なっているのか、もしくはどのような対応関係にあるのかを明らかにする。

### ① 極限や否定的特立を表すとりたて詞の肯否の対立

- (6) a. よりにもよって、警察ナドが 学校にやってきました。  
b. 当然、警察ナド 学校にやって来なかった。
- (7) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩で警察マデが 学校にやってきました。  
b. 当然、子どもの喧嘩で警察マデ 学校にやって来なかった。

② 限定を表すとりたて詞の肯否の対立

- (8) a. 警察ダケが 学校に やって来た。  
b. 警察シカ 学校に やって来なかった。

①のとりたて詞は、従来、否定極性が仮定されることはなかったとりたて詞である。しかし、本稿ではこれらの ab の対立を、否定極性表現と非否定極性表現の対立として捉えるべきことを論じる。また、②のシカは否定極性表現の代表的な例として捉えられてきた例である。しかし、ダケとシカは、専ら意味的な違いが論じられており、両者の違いを否定極性表現と非否定極性表現の対立として体系的に捉える試みはなされていない。本稿では、これらの対立を否定極性表現と非否定極性表現の対立として論じることで、否定極性を持つとりたて詞の統語的・意味的特徴を洗い出していく。そして、従来、個別の現象として記述されてきたこれらの現象が、「ハの後接」という操作を介して体系的な一つのグループをなしていることを指摘する。また、本稿では、この指摘を前提として、これらの否定極性の有無が意味的な対立とも対応関係にあること、さらに、否定極性表現には、「ハの後接」を介した要素の他に「モの後接」という特徴を持つものが存在し、両者は統語的な性質が異なることを指摘する。

以下では、本稿の構成を確認し、論証の過程の概略を紹介する。

### 0.3 本論文の構成

本節では、本稿の構成について述べる。本稿は、前述の通り 2 部構成となっている。第 1 章で先行研究を概観したのち、前半 (第 2 章～第 4 章) は、(5a)の目的に応じて分析を行う。また、後半 (第 5 章、第 6 章) は、(5b)の目的に応じて分析を行う。最後に終章で全体のまとめと展望について述べる。図 2 に、本論文の構成を簡略に示しておく。

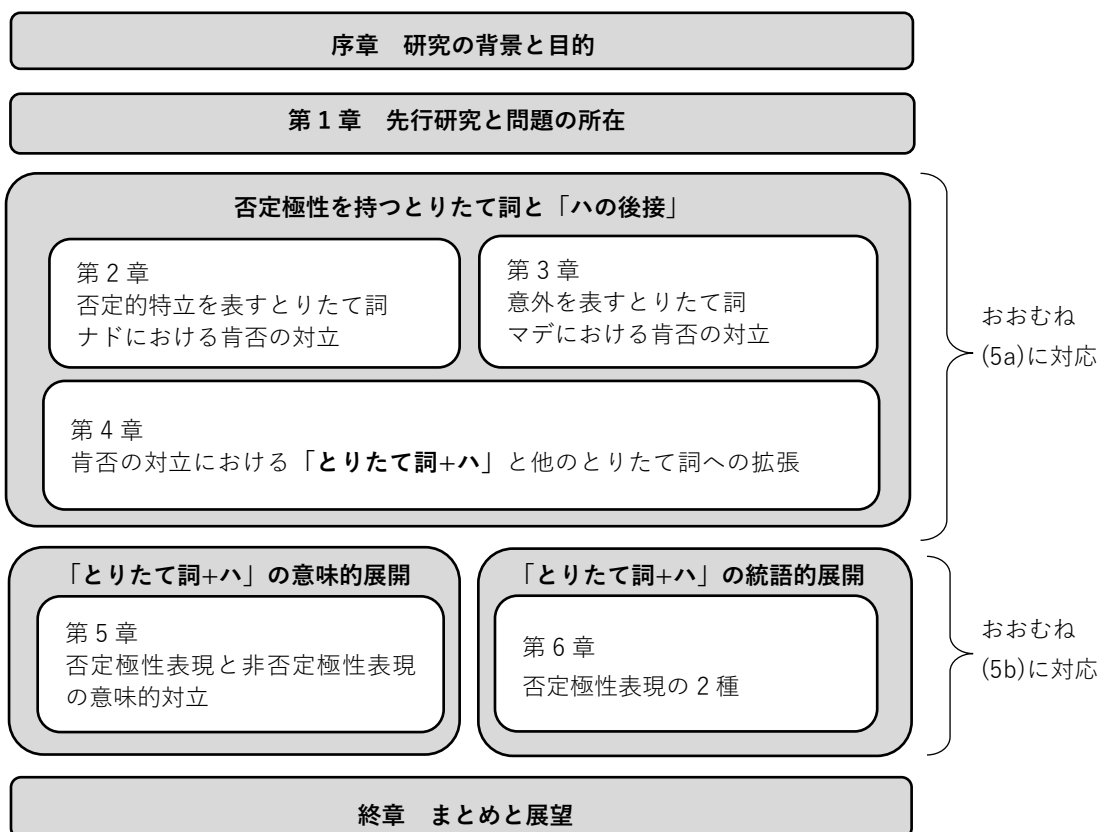


図2：本論文の構成

以下では、各章の内容についてももう少し詳しく述べておく。

## 第1章 先行研究と問題の所在

先行研究で指摘されている否定極性表現の特徴を概観する。さらに、とりたて詞分析における否定極性表現の取り扱いについても見ていく。そのうえで、先行研究は個別の否定極性表現の分析に終始しており、否定極性表現にはどのような共通した特徴を持つグループが存在するのか明らかでないという問題点があることを指摘する。さらに、とりたて詞の分析においても、否定極性は個別の特殊な現象として特記されるにとどまっているという問題点を指摘し、否定極性を持つとりたて詞の再整理が必要であることを示す。最後に、本稿ではこれらの問題点を受け、係助詞・副助詞の分類を活かしつつ現象を観察するアプローチをとることを論じる。

## 第2章 否定的特立を表すとりたて詞ナドにおける肯否の対立

第2章からは具体的な現象の分析に入る。第2章では、否定的特立を表すナドを扱う。(6ab)の肯否の対立を持つ否定的特立を表すとりたて詞ナドは、一形態で二つの統語的性質の異なる用法を持つことを指摘する。具体的には、これらのナドは焦点の広狭、名詞性、助詞の連結順序がそれぞれ異なり、(6a)のナドは述部の制約を持たない一方、(6b)のナドは否定極性を持つことを指摘する。さらに、この違いは伝統的な国文法や青柳(2006)等で指摘されている係助詞、副助詞の違いと一致していることを示す。

## 第3章 意外を表すとりたて詞マデにおける肯否の対立

第3章では、意外を表すとりたて詞マデについて扱う。ナドと類似した対立がマデにも見られることを指摘し、マデもまた、ナドと同様に(7ab)で二つの用法があり、統語的ステータスが異なることを論じる。もちろん、ナドと異なるふるまいを見せる点もあるが、本章ではマデにも二つの用法があり、一方は否定極性表現であると仮定しなければ説明できない現象があることを示す。

## 第4章 肯否の対立における「とりたて詞+ハ」と他のとりたて詞への拡張

第4章では、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞の比較を行う。そして、ナド、マデの分析に加え、ダケ、シカの分析を通し、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞は、「ハの後接」という操作によって対応関係にあることを指摘する。さらに、ナド、マデの分析に加え、ダケとシカにも上述の主張をサポートする現象があることを見る。具体的には、限定を表すとりたて詞ダケは、ナド、マデのような否定と呼応するような用法を持たないが、ダケハの形式を用いることでダケも(6b)(7b)に類似した用法を持つようになることを指摘する。さらに、シカは通時的に否定極性を獲得する際に、「シカ原型+ハ」という形を経由して成立したとする説を紹介し、この説もまた上述の主張を裏付けていることを示す。さらに、ナドやマデに見られた否定極性を持つ用法と持たない用法の対立が他のとりたて詞でも見られることや、そこでも「ハの後接」という操作を仮定すべきことを論じる。

## 第5章 否定極性表現と非否定極性表現の対立

### — 一定性効果から見たダケ、シカの前提集合 —

第5章では、とりたて詞における否定極性表現と非否定極性表現の対立が、意味的な違いとも対応関係にあることを指摘する。本章では特に、ダケとシカの意味の違いに焦

点を当て考察する。具体的には、いわゆる定性効果がある環境にダケは出現できないが、シカは出現可能であるという現象を指摘し、ダケは前提集合を持つ強決定詞的なふるまいを見せる一方、シカは前提集合を持たない弱決定詞的なふるまいを見せることを指摘する。つまり、ダケとシカの意味の違いとして、ダケは前提集合から当該の要素を選び出し、その他の要素を否定することによって限定を表す一方、シカは単に当該の要素以外の要素が存在しないことを示すことで限定を表すという違いがあることを論じる。さらに、本章での指摘はダケとシカの違いを正確に捉えられるだけでなく、否定極性表現である誰モと否定極性を持たない「誰モガ」の対立にも適応可能であることを示す。

## 第6章 否定極性表現の2種—シカとwh-モとの比較を中心に—

第2章から第5章までは「ハの後接」に基づくとりたて詞の否定極性の有無の対立を軸に現象を観察しているが、第6章では否定極性表現の統語的な多様性について観察し、否定極性表現には「ハの後接」以外に、「モの後接」という操作を介したものがあることを指摘する。さらに、「ハの後接」を経た否定極性を持つとりたて詞と「モの後接」を経た否定極性表現では、統語的な分布が異なることを指摘する。具体的には、シカとwh-モのふるまいの違いを観察する。シカもwh-モも、「学校には、学生が 誰モ／太郎シカ 来なかった」の「学生」のように、wh-モやシカが属する集合を表す名詞句(ホスト名詞句)を表示することができる。第6章では、コントロール構文の補部に当該の表現が現れることができるか否かを中心に、シカとwh-モはホスト名詞句との統語的關係が異なることを指摘する。そして、同様の対立が否定極性表現「1-モ (一つモ、一人モ)」と「2-トハ (二つとは、二人とは)」「マデ (ハ)」にも見られることを示す。以上の観察をもとに、本稿では先行研究が一括して類似した構造を提案してきた日本語の否定極性表現には、少なくとも「ハ後接タイプ」と「モ後接タイプ」の二つの異なるタイプがあることを示す。

## 終章 まとめと展望

ここまでの議論を総括し、本稿の学術的意義、課題や展望について述べる。

# 第1章 先行研究と問題の所在

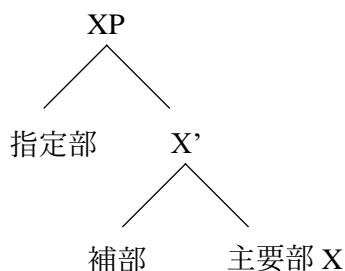
本章では、日本語の否定極性表現に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘した後、本稿の立場と問題解決の方向性について述べる。まず、1.1 節では本稿が依拠する統語理論について述べる。また、詳しい内容に踏み込むのに先立って、先行研究の日本語の否定極性表現に関する指摘を概観し、その問題点を指摘する。1.2 節、1.3 節では、先行研究の指摘を詳しく見ていく。1.2 節では、否定極性表現の統語的特徴や提案されている統語構造について確認する。そして、先行研究の指摘する統語構造は個別の否定極性表現の分析に終始しているという問題点を指摘する。さらに 1.3 節では、先行研究における否定極性を持つとりたて詞の扱いについて見ていく。とりたて詞の中には否定極性を持つものが多数あるが、先行研究はとりたて詞の否定極性について個別のとりたて詞の特徴として特記するにとどまっており、十分に整理されているとは言えないことを指摘する。以上の問題点を受け、1.4 節では先行研究の問題点の解決の方向性を示す。本稿では、山田 (1936) や青柳 (2006, 2008) で示される係助詞・副助詞の統語的な性質を用いてとりたて詞の否定極性を整理することを論じる。最後に 1.5 節は、本章のまとめである。

## 1.1 本稿の理論的背景と先行研究の概観

日本語には、否定文にのみ生起可能な表現が複数ある。これらの表現は、広義に「否定極性表現 (Negative Polarity Item; NPI)」と呼ばれる。日本語の否定極性表現の構造としていくつかのものが提案されているが、具体的な先行研究の内容に踏み込む前に、本研究が採用する理論的仮定と日本語の否定極性表現研究の理論的背景、さらにその問題点について簡単に触れておく。

統率・束縛理論 (Government and Binding Theory; 以下、GB 理論)<sup>1</sup> の中核となる X バー理論においては、あらゆる文法範疇が「指定部 (Spec (ifier)) — 補部 (Comp (lement)) — 主要部 (Head)」の構造をとると仮定されている。(1)の構造において、XP は主要部 X の投射 (projection) であるという。

(1)



Pollock (1989) や Chomsky (1991) は、否定の構造について、Neg は独自の投射を持つ機能範疇の一つであると仮定し、動詞句を c-統御 (c-command) する位置に NegP を置く<sup>2, 3</sup>。

<sup>1</sup> 生成文法は、1950 年代に Noam Chomsky が主唱し、普遍文法の解明を目指して目覚ましい展開を遂げてきた。生成文法が提唱された当初、文法は構文単位の個別の規則の集合と見なされていたが、Chomsky (1981) は個別の句構造規則を一般化し、文法は X バー理論に代表される構文を超えた普遍の原理からなるモジュール体系であるとする GB 理論を提唱した。近年の生成文法理論では、必要最小限の道具立てによって言語現象を説明しようとするミニマリスト・プログラムと呼ばれる研究方針が展開され、棄却された GB 理論の理論装置もあるが、基本的な説明対象や一致システムは GB 理論のものを踏襲している。本研究は現象を体系的に捉えることに主眼を置き、理論装置の精緻化や技術的なところには踏み込まないため、GB 理論を中心とした道具立てによる分析を行う。

<sup>2</sup> これは、英語とフランス語の動詞移動の非対称性を説明する際に導入されたものである。

(i) \* John likes not Mary.

(ii) Jean ('n) aime pas Marie.

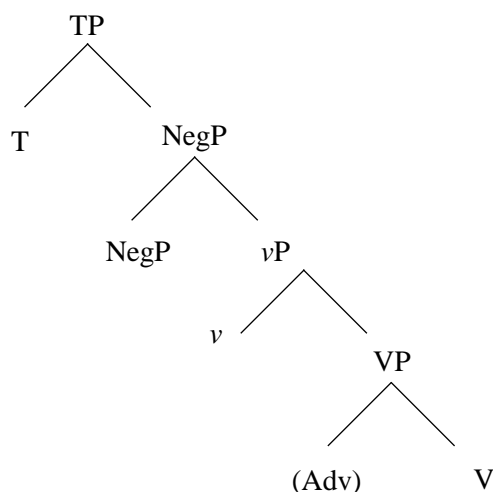
*Jean ('n) love NEG Marie*

「ジョンは メアリーを 愛していない。」

技術的な問題に踏み込まずに概要を説明すると、「強い一致」が起きるフランス語は動詞 V が時制辞 T まで移動するのに対し、「弱い一致」が起きる英語はそれが許されず、かわりに Affix が V に移動していると仮定する。よって、否定辞に対して左側に動詞がある (i)(ii) は、V が T まで移動していることになるため、英語の場合非文になる。

<sup>3</sup> 正確には、Pollock の仮定には vP は採用されておらず、代わりに NegP の直下には AgrP が仮定されている。AgrP とは一致素性の照合のための機能範疇であるが、素性一致のためだけに存

(2)



日本語においても、多くの先行研究がこの仮定を採用して否定の構造的な分析を行っている (Aoyagi & Ishii 1994、岸本 2005, 2010、片岡 2006 他多数)<sup>4</sup>。本稿でも、基本的に Neg を機能範疇の一つと仮定して分析していく<sup>5</sup>。

ここまでは理論的な背景について簡単に見てきた。次に、先行研究の概観をしておく。それぞれの先行研究の詳しい分析については、1.2 節、1.3 節で触れる。

否定極性表現の認可の方策としては、大きく二つのものが提案されているとあってよい (cf. 片岡 2006)。一つは、否定極性表現が否定辞と Spec-Head の関係になることで認

---

在する要素であり経験的証拠を持たないため、近年の研究では AgrP を用いず TP (IP) の直下に使役動詞として機能する音型を持たない軽動詞 *v* を仮定することが多い。*v* は、補部に VP を、指定部に主語を選択し、動作主 (agentive) の役割を付与する (Chomsky 1995)。後述するとりたて詞の素性一致について、青柳 (2006) もこの *vP* 分析を採用しており、本研究でもこの仮定に則って分析を進めていく。

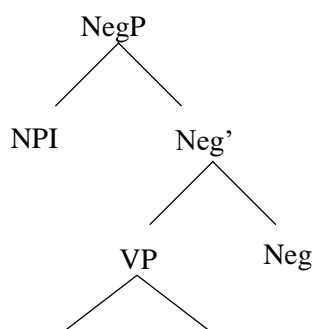
<sup>4</sup> 統語論における否定をめぐる展開については、加藤 (2010) を参照。

<sup>5</sup> (2)とは異なる位置に否定を担う要素が存在しているとする先行研究もある。Kuno (1980)、久野 (1983)、Takubo (1985)は、否定辞は基本的に V の姉妹位置に生起すると仮定し、VP の要素を否定のフォーカスとしているときは、マルチプル・チョイスの情報構造になっている場合や、有標の場合であるとする。また、西岡 (2007, 2010) では、英語の否定文に関して、TP より上位の PolP への否定 ([+NEG]) の移動を仮定しているが、日本語には PolP はないと仮定する。他にも、岸本 (2005, 2010) は(2)の否定辞の位置を仮定しつつも、日本語は否定辞が TP 主要部へ主要部移動を起こすと仮定している。本稿の立場としては、ひとまず(2)の統語的位置に否定辞句を仮定しておく。本稿の指摘で最も重要なことは、否定辞の統語的位置というよりは否定極性表現と否定辞との呼応関係とその特徴を体系的に捉えることであるため、いずれの位置に否定辞句を仮定しても本稿の議論には直接は影響を与えないものと思われる。

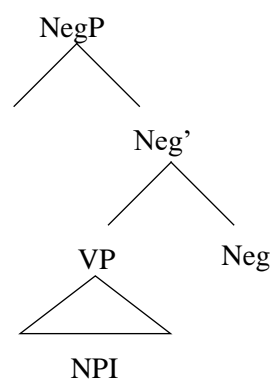


可されるというものである。もう一つの構造は、否定極性表現が否定辞によって c-統御されることで認可されるというものである。それぞれを、(3a)(3b)として示す。

(3) a.



b.



Klima (1964) は、GB 理論が提唱される前の生成文法初期の否定に関する古典的研究であるが、おおむね英語の any が(3b)のように否定辞によって c-統御されていないことを指摘している。

日本語についても、個別の否定極性表現に対して、(3a)の構造が提案されているものや、(3b)の構造が提案されているものがある。例えば、Kato (1994, 2002) は、シカや wh-モについて(3b)の構造をとると仮定している。一方、片岡 (2006) は、シカ、wh-モは(3a)の構造をとるが、「ろくな」は(3b)の構造をとると指摘している。他にも、後述するように多くの先行研究が個別の否定極性表現に対してそれぞれ構造を提案している。

加えて、(3ab)で否定極性表現の統語的なふるまいをすべて捉えられるわけではない。特に、(3a)の構造をとるとされるものの中には、否定極性表現によって異なった特徴を持つものがある。先行研究ではシカと wh-モに(3a)の構造を与えているものがあるが、シカと wh-モでも異なったふるまいを見せることがある。先行研究は、両者の違いについて複数の提案をしているが、いずれの先行研究も個別の現象についてそれぞれ規定を与えたに過ぎず、どのような要素が wh-モと類似した構造を持ち、どのような要素がシカと類似した構造をとるのか定かでない。つまり、日本語の否定極性表現の構造は、個別の現象に対して複数の提案がなされているものの、それぞれの構造をとる否定極性表現の外延・内包についてはまだ十分に議論されているとは言い難いのである。

否定極性表現に対するもう一つのアプローチとして、否定極性表現のとりたて詞としての側面を明らかにするものがある。それは、一部の否定極性表現—シカや wh-モの「モ」

一が、とりたて詞としての一般的な特徴を有しているためである。とりたて詞については日本語学の知見から豊かな記述の蓄積がある。ところが、否定極性表現のとりたて詞としての側面についても体系的な記述が十分になされたとは言い難い。先行研究の記述では、とりたて詞における否定極性は一部のとりたて詞の特殊な特徴として特記されるにとどまっており、当然 0.1 節に挙げたマデハのような複数のとりたて詞から構成されている否定極性表現が中心的に扱われたことはない。つまり、とりたて詞分析においても、どのような要素が否定極性を持ち、どのような要素が否定極性を持たないのかという内実に迫ったものは見られないというのが現状である。

ところが実際に現象を観察してみると、否定極性はシカや wh-モ等の一部のとりたて詞に見られる特殊なものではなく、(4)のように組み合わせによって複数のとりたて詞において見られるかなり広範な現象である。

- (4)
- a. 公園には、太郎シカ {来なかった/\*来た}。
  - b. パーティでは、何モ／一つモ {食べなかった/\*食べた}。
  - c. 店に客は、二人とハ {来なかった/\*来た}。
  - d. 学校には、危険人物ナド (ハ) {いなかった/\*いた}。
  - e. 子どもの喧嘩で、警察マデ (ハ) {来なかった/\*来た}。

このことは、一部のとりたて詞が特殊な語彙的指定として否定極性を持っているのではなく、とりたて詞の中には否定極性を持つものが一つのグループをなして体系的に存在していることを示唆している。もちろん、否定極性を持つ語は、とりたて詞に限らず様々なカテゴリの語群に見られるものである。しかし、とりたて詞における否定極性を整理し直すことは、否定極性表現の体系性の一端を明らかにするのに有効であると思われる。とりたて詞には、似たような意味を表しているにもかかわらず、否定極性を持つものと持たないものがどちらも存在している。よって、その両者を比べることで、否定極性の有無による統語的・意味的特徴の違いを比較しやすいためである。加えて、日本語はとりたて詞が顕著に発達した言語であることが指摘されている (金水 2002、長谷川 2007)。このこともまた、とりたて詞における否定極性表現の特徴を分析することが、日本語における否定極性表現の一端を明らかにするのに貢献する手段であることを示している。

以上が本研究の理論的背景と日本語の否定極性研究の概観である。先行研究では、理論的な統語論研究においても、日本語学の知見からの記述的分析においても、否定極性

表現は個別の語の分析が中心であったといえる。それを踏まえて本稿では、否定極性表現を体系的に分析する取り組みの一環として、とりたて詞という品詞カテゴリに否定極性表現が多数存在していることに注目し、とりたて詞の統語と意味から否定極性表現を分析することの有効性を指摘した。

続く 1.2 節、1.3 節では、否定極性表現の構造ととりたて詞分析における否定極性表現の扱いについてより詳しく見ていくことにする。そして各分析の問題点を指摘する。

## 1.2 否定極性表現の構造と認可

### 1.2.1 GB 理論におけるシカと wh-モの分析

日本語の否定極性表現の中でも特に研究の蓄積の多いのが、wh-モとシカである。先行研究では、理論的なバックグラウンドの違いや詳細な構造の違いは様々にあるものの、シカと wh-モにほとんど同じ構造が仮定されてきたと言ってよい。それは、以下に示すようにシカも wh-モも多くの場合同様のふるまいを見せるためである。

第一に、シカも wh-モも、否定辞と同一節内にならなければならないという局所性の制約がある (Muraki 1978、許斐 1989、Kato 1994、久野 1999、Aoyagi & Ishii 1994、茂木 2004、片岡 2006 他)。(5)-(7)の a は、シカや wh-モが主節または従属節で否定と同一節内にあるため認可されているが、それぞれの b はシカや wh-モと否定辞が主節と従属節で分かれているため許容されない。

#### シカ

- (5) a. 花子は [ 太郎が 日本語シカ 話さない ] と言った。  
b. \*花子は [ 太郎が 日本語シカ 話す ] と言わなかった。
- (6) a. 花子シカ [ 太郎が 日本語を 話す ] と言わなかった。  
b. \*花子シカ [ 太郎が 日本語を 話さない ] と言った。

#### wh-モ

- (7) a. 花子は [ 太郎が 何モ 話さない ] と言った。  
b. \*花子は [ 太郎が 何モ 話す ] と言わなかった。
- (8) a. 誰モ [ 太郎が 真実を 話す ] と言わなかった。  
b. \*誰モ [ 太郎が 真実を 話さない ] と言った。

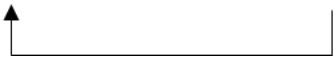
第二に、シカも wh-モも、当該の要素が属する集合を表す名詞と共に用いることができる (Aoyagi & Ishii 1994、江口 2000、宮地 2007、Kuno 2007 他)。江口 (2000) の名称を借りて、本稿ではこの名詞句を「ホスト名詞句」と呼んでおく。ホスト名詞句とシカや wh-モの分布が遊離数量詞の分布と類似していることから、Kawashima & Kitahara (1992) や Aoyagi & Ishii (1994) はシカや wh-モも遊離数量詞の一つとして付加詞の位置にあると考える。

- (9) a. ジョンが {リンゴシカ/何モ} 果物を 食べなかった。  
 b. ジョンが 果物を {リンゴシカ/何モ} 食べなかった。  
 c.(?) {リンゴシカ/何モ} ジョンが 果物を 食べなかった。  
 (Aoyagi & Ishii 1994: 297)
- (10) a. ジョンが 3本 バナナを 食べた。  
 b. ジョンが バナナを 3本 食べた。  
 c. 3本 ジョンが バナナを 食べた。  
 (Aoyagi & Ishii 1994: 298)

さらに、シカや wh-モには、弱交差効果 (weak crossover effect) があることが指摘されている (Takahashi 1990、Aoyagi & Ishii 1994)。弱交差効果とは、先行詞が移動した後の痕跡を、束縛代名詞が c-統御してはならないというものである (Postal 1971、Wasow 1972、Higginbotham 1980、Hoji 1985 他)。

- (11) a. Who<sub>i</sub> saw his<sub>i</sub> mother?  
 b. \*Who<sub>i</sub> did his<sub>i</sub> mother see?

(11ab)は、似たような文であるにもかかわらず、(11b)のみが who と his を同一指示として解釈することができない。これは、(11b)の who が wh 移動によって代名詞を飛び越えて移動し、代名詞が who の痕跡を c-統御しているためであるとされる。つまり、弱交差効果は先行詞の移動の証左であると捉えることができる。

- (12) \*Who<sub>i</sub> did his<sub>i</sub> mother see t<sub>i</sub> ?  


Aoyagi & Ishii (1994) は、この移動現象がシカや wh-モにも見られると指摘する。

- (13) a. (20年前、アメリカに進出した日本企業のうち、)  
ソニー<sub>i</sub>シカ そこ<sub>i</sub>のライバル会社を 脅かしていなかった。  
b.?\*[そこ<sub>i</sub>のライバル会社が] ソニー<sub>i</sub>シカ 脅かしていなかった。  
(Aoyagi & Ishii 1994: 301)

- (14) a. (ジョン、ビル、トムのうち、)  
誰モ<sub>i</sub> [そいつ<sub>i</sub>の 女房を] 褒めなかった。  
b.?\*[そいつ<sub>i</sub>の 女房]が 誰モ<sub>i</sub> 褒めなかった。 (Aoyagi & Ishii 1994: 302)

Aoyagi & Ishii は、シカが VP 内に基底生成した後、否定辞句の Spec 位置に LF 移動し、(3a)のように否定辞と Spec-Head 関係になることで認可されると仮定することで (13b)(14b)の非文法性を捉えている。すなわち、(13b)の「ソニーシカ」は、目的語位置に基底生成したのち、代名詞「そこ」を飛び越えて、「そこ」が「ソニーシカ」の痕跡を c-統御するため、弱交差効果が生まれ非文となると考える。構造を示すと、(15)のようになる。

- (15) (13b)の LF  
\*[TP[NegP ソニーシカ<sub>i</sub> [vp[そこ<sub>i</sub>のライバル会社]-が t<sub>i</sub> 脅かしていなかった]]]。  
(Aoyagi & Ishii 1994: 302)

(14)の wh-モも同様に移動を起こし、「そいつ」が wh-モの痕跡を c 統御しているため弱交差効果が生まれ非文になると分析している。

他にも、詳細な違いはあるものの、Takahashi (1990)、Kawashima & Kitahara (1992)、片岡 (2006) や Nishioka (2000)、西岡 (2007, 2010) も同様にシカや wh-モについて、(3a)のようなシカや wh-モと否定辞の Spec-Head 構造による認可を提案している<sup>6,7</sup>。

---

<sup>6</sup> 具体的には、Aoyagi & Ishii と異なり Nishioka (2000)、西岡 (2007, 2010) は LF での移動ではなく顕在的移動であると仮定する。また、許斐 (1989)、Konomi (2000) はシカに関して移動ではなく基底生成で主題位置にシカが現れるとする。ただし、本研究では、否定極性表現の体系性を記述することに重きを置くため、シカや wh-モの認可条件についてはこれ以上踏み込まない。

<sup>7</sup> シカが(3b)の構造によって認可されると仮定する先行研究として、Kato (1994, 2002) 等がある

しかし、シカと wh-モは、否定極性表現として常に同じふるまいをするわけではない。例えば、シカは多重生起が不可能であるが、wh-モは多重生起が可能であることが指摘されている (Kato 1985、Aoyagi & Ishii 1994、Konomi 2000、Nishioka 2000、茂木 2004、片岡 2006 他)。

- (16) \*ジョンシカ リンゴシカ 食べなかった (こと) (Aoyagi & Ishii 1994: 300)  
(17) 誰モ 何モ 食べなかった (こと) (Aoyagi & Ishii 1994: 300)

Kato (1985) は、シカのように多重生起ができない否定極性表現を Strong NPI、wh-モのように多重生起が可能な否定極性表現を Weak NPI と呼んでいる。Aoyagi & Ishii (1994) は、シカは否定辞の Spec 位置に移動することで認可される一方、wh-モは否定辞の Spec 位置に移動したのち、否定のオペレータによって認可されると仮定する。他にも wh-モの多重生起を説明する提案としては、次節で詳しく見る Watanabe (2004) や渡辺 (2005) が wh-モの認可に多重一致 (Multiple Agree) を仮定し、西岡 (2007) は、多重指定部 (Multiple Spec) を仮定するなど、様々な提案がなされている。しかし、いずれもシカと wh-モに個別に規定を与えているのみで、独立した根拠を示しているわけではない<sup>8</sup>。

### 1.2.2 ミニマリスト・プログラムにおけるシカと wh-モの分析

近年の統語理論において、必要最低限の道具立てと操作によって統語構造を構築しようとする試み (ミニマリスト・プログラム) が展開している。この理論においても、否定極性表現がどのように認可されるかが説明の対象となっている。ミニマリスト・プログラムにおいては、語が持つ解釈不可能な形式素性を照合し消去することが移動の動機となると仮定される。

---

が、これらの分析の問題点は片岡 (2006) を参照。

<sup>8</sup> Nishioka (2000) では、シカは[+Neg, +Foc]の素性を持ち、否定辞句の Spec 位置に移動後、フォーカス句の Spec 位置に移動しなければならないと仮定する。[+Foc]素性を持つ要素が一文中に複数現れた場合、同じ[+Foc]素性を有する要素がシカ句とシカ句の痕跡位置に介在することになり、シカ句の再構築が阻害されてしまうため、シカは多重生起が許されないと説明する。しかし、やはりシカの個別の指摘にとどまり、他のどのような否定極性表現が[+Foc]素性を持ち、どのような否定極性表現がそのような素性指定を持たないのかについては明らかではない。

Watanabe (2004)、渡辺 (2005) は、このミニマリスト・プログラムのアプローチを背景として、wh-モを否定極性表現 (Negative Polarity Item; NPI) ではなく、否定一致表現 (Negative Concord Item; NCI) として分析する。NCI とは、それ自身が否定辞の意味を内包するもので、否定辞との一致を要求しつつも、二重否定にはならないものを指す (Heageman & Zanuttini 1991, 1996、Heageman 1995)。具体的には、wh-モは否定素性[Neg]と解釈不可能なフォーカス素性[Foc]を持つと仮定し、wh-モは解釈不可能素性[Foc]を動機として、否定辞との素性の照合を引き起こす。否定辞と一致した[Neg]素性はコピーされ、否定辞は二つの[Neg]素性を持つことになり、[Neg]素性同士が打ち消し合い消去されるため、wh-モ文は肯定文と等価の意味になる。これは、(19)のような応答文における省略テストから裏付けられる。

- (18) [TP [NegP [vP 何も 買って来 ] なかつ ]た ]  
                           [+Neg]                          [+Neg][+Neg]

- (19) Q: 何を買ってきたの?  
       A: 何も買ってこなかった。 (渡辺 2005: 113)

Watanabe (2004)、渡辺 (2005)では、(19)で質問文が肯定文であるにもかかわらず、応答文で否定辞の省略が可能なのは、[Neg]素性の打ち消しによって wh-モ文の述語が肯定文相当になっているためだとする。しかし、このアプローチはそのままシカの分析に応用できるわけではない。次に見るようにシカは応答文において省略が不可能だからである。

- (20) Q: 何を買ってきたの?  
       A: \*本シカ買ってこなかった。

先行研究では、wh-モとの並行性からシカを NCI として扱う分析 (Nishioka 2000 他)<sup>9</sup> とシカは NCI として扱うべきではない、もしくはシカは遊離数量詞ではないとする分析

---

<sup>9</sup> Nishioka (2000) では、次のような例から wh-モは応答文で述部の省略が可能であることを論じている。

- (i) A: 何度もニューヨークにいったことがあるの?

(Konomi 2000、片岡 2006、朴 2007, 2009<sup>10</sup>他) の両者があり、統一した見解は見られない。

### 1.2.3 先行研究の問題点

以上、wh-モとシカを中心に、先行研究における否定極性表現の扱いを見てきた。GB 理論を用いた分析においては、wh-モとシカに否定辞との Spec-Head の関係が仮定されていることを見た。また、ミニマリスト・プログラムのアプローチにおいては、否定極性表現に、否定辞との一致の動機となるフォーカス素性や否定素性を仮定するアプローチがとられていることを見た。

しかし、これまで見てきたように、GB 理論における扱いにせよミニマリスト・プログラムにおける扱いにせよ、先行研究のアプローチはシカと wh-モを、否定極性を持つ要素として並行的に扱う傾向が強い。両者の違いについては、個別にシカと wh-モの違いを規定しているか、シカか wh-モのいずれかしか扱っていないという状況である。つまり、なぜそのような違いが生まれるのかについて説明しているものは見られない。よって、新しい否定極性表現が与えられたとして、それが wh-モに類似したふるまいを見せるのか、シカに類似したふるまいを見せるのか、いずれとも異なったふるまいを見せるのかを予測することはできず、それぞれの現象に個々に統語構造を与えるしかないのが現状であると言える。

一方、記述的には日本語には多数の否定極性表現があることが指摘されており、それらの指摘は否定極性表現が無関係に散在しているわけではないことを間接的に示している。工藤 (2000) は、否定文にのみ生起可能な要素として次のようなものを挙げている。工藤 (2000: 105-106) によると、(21)の(i)は「基本的に一般化された」ものであり、述語機能を強調、補足する否定極性表現である。一方、(ii)はシカを除いて、「意味的素材」があるもので、呼応上の制限—誰モなら「人」に限られる等—があるものである。

---

B : ?(いや、) 一度しか。

しかし、シカは付加詞位置と項位置ではふるまいが異なり、項位置である(20)では、やはり述部の省略が許されない。付加詞位置と項位置とのシカのふるまいの違いについては、朴 (2007, 2009) を参照。

<sup>10</sup> ただし、朴 (2007, 2009) は項位置のシカは NCI として扱えないが、付加詞位置のシカは NCI としてふるまうことを指摘している。



呼応形式については、(i)の①は「文法的否定」<sup>11</sup>と呼応するが、②は肯定形式とも呼応可能なものを指している。(ii)は常に「文法的否定」と呼応している。意味的な指摘としては、(ii)は「全否定を表すもの」「部分否定を表すもの」<sup>12</sup>の両方があるという。

(21) (i) 陳述副詞

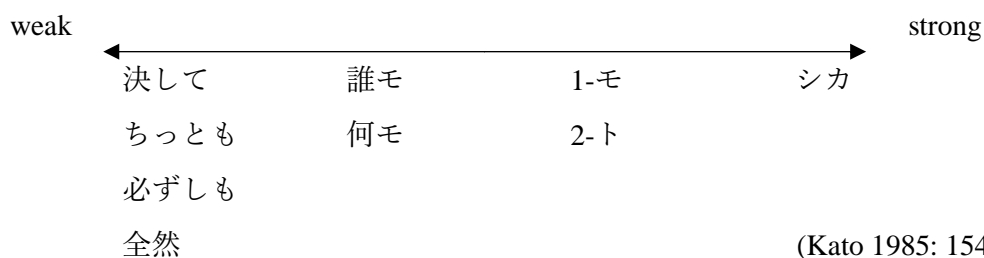
- ① けっして、かならずしも、あながち、いちがいに、まんざら、まさか、みじんも、ゆめにも、めったに
- ② とても、なかなか、まるで、あまり、それほど、そんなに、そう、べつに

(ii) その他の形式

- ① 半年と、五メートルと、二度と、つゆほども、ちりほども、一つも、一人も、一度も(一度だって)、誰一人、何一つ、誰も、何も、なんら
  - ② しか
- (工藤 2000: 105、一部抜粋)

さらに、Kato(1985) は、複数の否定極性表現を Strong NPI と Weak NPI に分類している。Strong NPI には、多重生起が可能な wh-モ等が該当し、Weak NPI には多重生起が不可能なシカ等が該当する。Kato の分類は二分法ではなく、多重生起のほか他のとりたて詞との共起制限等から 4 つの段階を設け、(22)のようにまとめている。

(22) NPI Scale



これらの指摘は、日本語の多様な否定極性表現が一定のルールに従ってグループを作りつつ存在していることを示唆している。

<sup>11</sup> 工藤 (2000) では、「不親切だ」「無関係だ」「言いがたい」「欠席する」のような「否定的意味」を表すものを「語彙的否定」と呼び、否定辞ナイによる「来ない」「若くない」のような否定を「文法的否定」と呼んでいる。

<sup>12</sup> 工藤 (2000) では、それぞれ「完全否定」「不完全否定」となっている。

しかし、これらの先行研究の分類の妥当性についてはまだ十分に検討の余地がある。例えば工藤の「その他の形式」とは消極的な定義であり、様々な要素が混在している状態にある。例えば、(21)(ii)には、誰モ・何モのような格成分とセットで用いることができる要素もあれば、「つゆほども」のような副詞位置に現れるものもある。工藤の指摘は、体系的な分析というよりは網羅的に記述することに重きを置いているものであり、(21)の(i)(ii)の区分が構造的に支持されるものなのか否かは検討の余地がある。

また、Kato の分類は、否定極性表現を weak と strong に分類してはいるものの、weak と strong のスケールが何を表しているのかは十分に明らかになっていないと断言は難しい。例えば、(22)のスケールでは、1-モと 2-トが同じ位置に置かれているが、1-モが全否定を表している点やモが後接している点では誰モや何モと同様の性質を持っており、その意味ではむしろ誰モ・何モと 1-モが一つのグループをなし、2-トとは区別するべきであるように思われる。つまり、(22)が示すスケールには、様々な特徴を持つ否定極性表現が同じスケール上に位置しており、誰モ・何モがスケールの中央左側に位置していることや、1-モや 2-トがスケール中央右側に位置していることは、同じ要因によるものなのか偶然その位置に位置しているだけなのかが明らかでないのである。以上のような点を踏まえると、日本語の否定極性表現の体系的分析はまだ多分に考察の余地を残していると言える。

前節では、否定極性表現の体系性を探る研究の一貫として、とりたて詞の統語と意味から否定極性表現を分析していくことの有効性を指摘した。その理由としては、第一に、とりたて詞には否定極性を持つものと持たないものがあるため、否定極性の有無による特徴の違いを分析するのに役立つということが挙げられる。加えて、(21)や(22)の語群を見てみると、改めて否定極性表現をとりたて詞の観点から分析することの有効性が確かめられる。それは、一見とりたて詞と関係が無いように見える否定極性表現の中にも、とりたて詞の選択制限を持つものが混ざっているためである。例えば次に見るように、否定極性表現「めったに」は、ハの後接は許すが、モの後接は許さない。

- (23) a. こんな光景は、めったに {見られない/\*見られる}。  
b. こんな光景は、めったに {ハ/\*モ} 見られない。

本稿の分析は、否定極性を持つとりたて詞に限ったものであって、否定極性表現を網羅的に取り扱うものではない。しかし、(23)のように、一見とりたて詞とは関係のないように見える否定極性表現が、ハ・モのようなとりたて詞の選択制限を持つことがある。

この事実は、本稿の指摘がとりたて詞のみに当てはまる部分的なものではなく、幅広い否定極性表現に説明を与えることを示している<sup>13</sup>。

次節では、とりたて詞分析において否定極性表現がどのように扱われてきたかについて確認していく。

### 1.3 とりたて詞としての否定極性表現

本稿は、否定極性表現をとりたて詞の特徴から分析していくことを目的としていることについて述べてきたが、そもそもとりたて詞とはどのような統語的・意味的特徴を持つ語群なのだろうか。本節では、とりたて詞の統語的・意味的特徴を概観した後、とりたて詞分析の中で否定極性表現がどのように扱われてきたかを見ていき、先行研究の問題点を指摘する。

#### 1.3.1 とりたて詞とは

##### 1.3.1.1 とりたて詞の意味的特徴

とりたて詞とは、山田 (1936) に代表される伝統的な国文法で「副助詞」「係助詞」とされた語群の一部を、一定の意味的・統語的特徴から再カテゴリ化したものである。特に、沼田 (1986) 以降、通時的・共時的に活発な議論が展開されている。

沼田の一連の研究 (沼田 1986, 2000, 2009 他) では、とりたて詞を次のように定義している。

- (24) とりたて詞とは、文中の種々な要素—これを自者と呼ぶことにする—をとりたてて、これに対する他の要素—これを他者と呼ぶことにする—との論理的関係を示す語である。 (沼田 1986: 108)

沼田 (2009) によると、それぞれのとりたて詞の意味は、(25)の 4 組 8 個の概念で記述できるという。

---

<sup>13</sup> 否定極性表現におけるハとモの後接については、特に第 6 章で扱う。

- (25) a. 自者と他者  
 b. 主張と含み  
 c. 肯定と否定  
 d. 断定と想定

(沼田 2009: 37)

(25a)の自者とは、とりたてられる要素のことであり、他者とはそれと範列関係にある別の要素のことを指す。(25b)の主張と含みとは、とりたて詞によって表される明示的な主張と暗示的な主張に対応している。(25c)の肯定と否定は、自者・他者と、主張・含みといった命題との関係の叙述の肯否のことである。最後に(25d)は、ある命題の真偽を断定するのか、話し手や聞き手の想定なのかを区別している。例えば、ダケの意味は(26)のように表される。

- (26) 「だけ」主張：断定・自者一肯定  
 含み：断定・他者一否定

(沼田 2009: 196)

具体例(27)に当てはめると、ダケを用いた文の意味は(28)のようになる。

- (27) 太郎ダケが学校にやってきた。  
 (28) a. 太郎が学校にやって来た。  
 b. 太郎以外は学校にやって来なかった。

(27)は、自者が「太郎」であり、他者は「太郎以外の人物」を指しており、(28a)の自者についての「学校にやって来た」という命題を断定し、(28b)の他者についての「学校にやって来なかった」という命題を含みとして断定している。

Kato (1985)、茂木 (2004) や青柳 (2006) などの先行研究では、このようなとりたて詞の意味を、「焦点一前提」構造と並行的に捉えている。これは、Rooth (1985, 1997) による英語の焦点副詞の分析と並行させてとりたて詞を捉える考え方である。茂木 (2004: 11) は、「とりたて詞文では、文あるいは命題の一部がとりたて詞の焦点 (フォーカス) として変項に換えられ、その命題を前提としながら同類の要素間の関係が表されている」と述べている。また、青柳 (2006: 119) では「とりたて詞には、その名の通り、文中のある構成素を取り立てる、すなわち、他と対照的に提示する機能がある。意味論の用語を借りれば、「とりたて」とは、とりたて詞と焦点の関連づけ (association with focus) の

ことである」と述べられている。(27)の例を用いて説明すると、まず「太郎」が焦点になりダケと関係づけられ、「x が学校にやってきた」という変項を含む命題が形成される。そのうえで、x に太郎を入れた「太郎が学校にやってきた」という命題が断定され、x に「太郎以外の人物」を入れた「太郎以外の人物は学校にやって来なかった」という命題が前提され、限定の意味を表していることになる (cf. Rooth 1985, 1997)。つまり、理論的な研究においては、とりたて詞は英語の焦点副詞に対応するような焦点化詞として捉えられているのである。

以上、本節ではとりたて詞の意味について概観した。とりたて詞は、大きく文中の様々な要素と、それと範列関係にある要素との論理関係を示す要素と捉えることができ、沼田のとりたて詞の意味に関する一連の指摘は、より一般的な理論において「焦点一前提」構造と並行して捉えられていることを見た。

### 1.3.1.2 とりたて詞の統語的特徴

とりたて詞は、意味だけでなく、統語的にも共通した特徴を持っている。沼田 (1986, 2000, 2009 他) では、とりたて詞の統語的特徴として次の4つを挙げている。

- (29)    a. 分布の自由性  
          b. 任意性  
          c. 連体文内性  
          d. 非名詞性 (沼田 2009: 25)

一方、生成文法の観点からは、青柳 (2006, 2008) がとりたて詞の性質を「接語的付加詞」であるという仮説を立て、以下のように仮定している。

- (30)    a. 統語的性質：  
          とりたて詞は、主要部であるが、投射はしない([-projection])付加詞である。  
          b. 形態的性質：  
          とりたて詞は接語的 ([+clitic]) である。 (青柳 2006: 22)

(29)と(30)の指摘にはある程度共通している部分がある。(29a)の分布の自由性と(29b)の任意性は、(30a)の付加詞仮説と共通する。すなわち、とりたて詞は付加詞であり、「他

の要素を選択せず、選択もされない」ため、「他の条件が許す限りさまざまな品詞に付加してよい」（青柳 2006: 22）のであって、それは「分布が（他の条件の許す限り）自由である」ことを示すことになる。これらの分析は、(31)のようにとりたて詞が種々の要素に付加できる現象を捉えている。

- (31) a. 太郎は [すし(を)] だけ／も／さえ 食べた。 (DP：名詞句)  
 b. 客が [ソウルから] だけ／も／さえ 来た。 (PP：後置詞句)  
 c. 花子は [本を読み] ? だけ／も／さえ した。 (VP：動詞句)  
 d. 次郎は [部下を忙しく] だけ／も／さえ した。 (AP：形容詞句)  
 e. 太郎は [花子が帰ったと] だけ／も／さえ 言った。 (CP：補文)
- (青柳 2008: 40)

また、付加詞であるということは、文の成立要件に関わらないことを意味する。これは、(29b)の任意性と共通する特徴である。奥津 (1986) や沼田 (1986) が示すように、とりたて詞がなくとも文は問題なく成立する。(32)を例に見ていく。(32a)のとりたて詞ダケは、文中の必須要素ではない。一方、(32b)のダケは文の必須要素であって、当該の要素が無くては文が成り立たない。このような分布の違いから、(32a)はとりたて詞のダケであるが、(32b)のダケは補部をとり全体で副詞として働く「形式副詞」としてとりたて詞とは区別される。

- (32) a. 割引券を常連客に だけ／ $\phi$  渡した。  
 b. 割引券を常連客が欲しがらる だけ／\* $\phi$  渡した。 (沼田 2009: 27)

さらに、連体文内性は、とりたて詞が主題よりも統語的に低い位置にあることを意味している。

- (33) a. 私には解けない問題 (でも、彼には解ける。)  
 b. \*鳥は飛ぶ時 (沼田 2009: 30)

(33)が示すように、対比のハは連体文内に収まるが、主題のハは収まることができない。このようにして対比のハと主題のハは区別され、対比のハのみがとりたて詞であることになる。このような特徴は、フォーカスを形成する要素がトピックより低い位置にある

とする Rizzi (1997) の指摘や、対比のハが時制辞の位置に付加すると考える分析 (青柳 2006 他) と並行的である。

一方、名詞性については意見が分かれる。沼田は、とりたて詞が連体修飾構造の主名詞の一部になれないために、とりたて詞には名詞性がないと指摘している。

- (34) a. 田中さんだけが悲しそうにしずんでいた。  
b. \*悲しそうにしずんでいた田中さんだけ (沼田 2009: 30-31)

しかし、とりたて詞は、別の名詞性テストには通るものが存在する。例えば、青柳 (2006, 2008) では、とりたて詞を副助詞と係助詞に二分し、副助詞のみが名詞性があると指摘している。その根拠に、青柳は副助詞のみが格助詞が後接可能であることや、形容動詞が副助詞に接続する際連体形になることを挙げている (cf. 山田 1936)。

- (35) a. 本・を・ば／も (格助詞—係助詞)  
b. \*本・は／も・を (係助詞—格助詞)  
(36) a. 本・を・だけ／まで／ばかり (格助詞—副助詞)  
b. 本・だけ／まで／ばかり・を (副助詞—格助詞)  
(青柳 2006: 52)

さらに、茂木 (2004) は「連体修飾構造の主名詞になれるか否かという問題は、名詞か否かということ以外に意味論の領域で扱うべき問題も含んでいる」として、「とりたて詞の連体テストは、その前提となる名詞に関する議論を行わないかぎり、生産的な方向では進展しえない」 (茂木 2004: 192) と指摘している。本稿では、「とりたて詞の名詞性とは何であるか」ということに関する提言は行わない。しかし、名詞性を測るのに用いられるテストは、次節で詳述するとりたて詞の特徴を示す一つの指標となることは確かであると考え、複合的なテストの一部としていくつかの「名詞性テスト」を試みる。

以上、とりたて詞がどのような意味的、統語的特徴を持ったカテゴリなのかについて先行研究の指摘を概観した。本稿で扱う、否定的特立を表すナド、意外を表すマデ、限定を表すダケ、シカもここで挙げた特徴を満たすとりたて詞として広く受け入れられている。

一方で、とりたて詞は共通した特徴を持ちつつもその内部に多様性を持つ。次節では、とりたて詞というカテゴリの中に存在する多様性について、特に統語的階層性という観

点から分析した先行研究を概観する。その中で、否定極性を持つとりたて詞がどのように扱われてきたかを確認し、その問題点を指摘する。

### 1.3.2 とりたて詞の統語的階層と否定極性

とりたて詞は、沼田 (1989) が示す一定の統語的特徴を持ちつつも均質ではなく、様々な統語的階層に位置していることが指摘されている (沼田 1989、野田 1995、佐野 2001, 2007、茂木 2001, 2004, 2006、青柳 2006, 2008、益岡 2007、宮地 2007 等)。中でも、野田 (1995)、佐野 (2001, 2007)、茂木 (2001, 2004, 2006) などの先行研究は、呼応 (統語的一致) という観点を中心に、とりたて詞の分布や特徴を分類している。

野田 (1995) は、文を、述語の語幹の階層、ボイスの階層、アスペクトの階層、肯定・否定の階層、テンスの階層、事態に対するムードの階層、聞き手に対するムードの階層の7つの階層に分け、とりたて詞はそれぞれ位置する統語的階層が異なることを指摘している。とりたて詞の統語的階層を測るテストとしては、次の3つのテストが用いられる。

- (37) a. どんな述語と呼応するか  
b. どんな成分をとりたてるか  
c. どんな従属節の内部に入るか (野田 1995: 8)

先に、(37b)「どんな成分をとりたてるか」について見ていく。これは、とりたて詞がどのような要素に付加され得るかということを見るものである。例えば、(38)は、とりたて詞が格助詞より内側 (語幹のレベル) のものをとりたてられるかどうかをテストしている。

- (38) a. 家族だけに言った。  
b. \*家族しかに言わなかった。 (野田 1995: 8)

(38a)のダケは語幹のレベルをとりたてることができる。しかし、シカは(38b)が非文になることから分かるように、語幹のレベルをとりたてることはできない。これは、ダケが語幹のレベルに位置している要素である一方、シカはそれより上位の文法的な階層に位置している要素であることを示しているという。



次に(37a)について見ていく。(39)に示すように、「例示」を表すといわれているデモは、「未確定を表すモード」と呼応しなければ許容されない。野田 (1995) は、この現象を「例示」を表すデモが、「未確定を表すモード」の階層に位置するとりたて詞であるためであると分析する。

- (39) a. お茶でも飲もう。  
b. \*お茶でも飲んだ。 (野田 1995: 8)

(39)は、あるとりたて詞が文中に現れた場合、その文が、とりたて詞が要求する文の階層を含んでいる必要があることを示している。(37c)の「どんな従属節の内部に入るか」は、現象は異なるが、本質的には(35a)と同じとりたて詞の特徴をテストしている。(37c)は、当該のとりたて詞が呼応する階層を含まない「小さな」従属節の場合、そのとりたて詞はその従属節中に現れることができず非文となるが、当該のとりたて詞が呼応する階層を含むほどに「大きな」従属節であればとりたて詞は呼応可能であるため、非文とはならないことを示している。つまり、(37a)も(37c)も、とりたて詞の文法的な呼応を妨げない環境をテストしていることになる。(40)(41)は、主題のハが「～ために」節には入るが、「～けど」節には入らないことを示しているという。

- (40) \*飛行機は欠航になったため、帰ってこれなくなった。  
(41) 飛行機は欠航になったけど、新幹線を乗りついで帰ってきた。 (野田 1995: 9)

「～ために」節はテンスの階層の従属節だが、「～けど」節は事態に対するモードの階層の従属節である。(40)は、主題のハがテンスより高い位置と一致関係にあり、テンスの階層の「小さな」従属節には収まらないことを示している。

野田 (1995) は、とりたて詞はそれぞれ位置する統語的階層が異なるため、以上のような文法性の違いが現れると分析している。野田 (1995) が指摘するとりたて詞の統語的階層をまとめたものが、次の表1である。

		語幹	アスペクト	肯定否定	現実性	事態への ムード	聞き手への ムード
比較形	対 立 的			は (対比)			
	並 立 的			も (同類)			
限定的	対 立 的	だけ	ばかり	しか が (排他)	なら (条件) では	は (主題)	こそ (特立) なら (主題)
	並 立 的					でも (例示)	も (柔らげ) など (例示)
極限系	対 立 的			など (否定的強調 <sup>14</sup> ) ぐらい (最低限)			
	並 立 的			まで (意外) も (意外)	でも (意外)	さえ (意外)	
従属節 専用	対 立 的					こそ (譲歩)	
	並 立 的				さえ (最低限)		

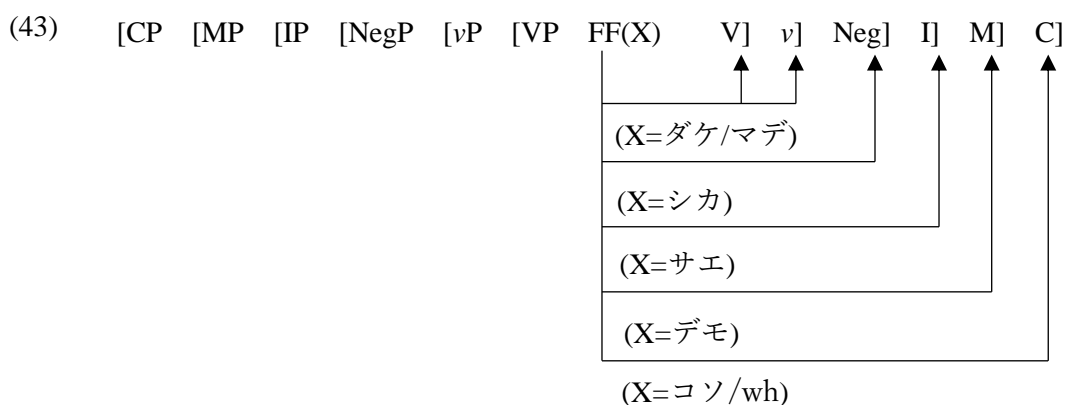
表 1：とりたて詞の階層構造 (野田 1995: 33)

<sup>14</sup> 野田 (1995) では、「否定的強調」となっているが、本稿では沼田 (2009) に倣い、以降「否定的特立」で統一する。

佐野 (2001, 2007)、茂木 (2004, 2006) は、野田が指摘するようなとりたて詞の統語的階層を、特定の認可子による認可という観点から分析している。佐野 (2001) は、とりたて詞の呼応現象を統語的一致現象として考え、とりたて詞 X は、そのとりたて詞が持つ形式素性 FF (X) がそれぞれの認可子まで移動することで認可されると分析する。例えば、(42)は、譲歩を表すこそが、ケレドモやガのような譲歩を表す要素 (の素性) によって認可されることを示している。

- (42) a. 太郎は親にこそ相談した \*({が/けれども}、自分の妻には黙っていた。)  
 b. 太郎は女子学生とお茶こそ飲んだ \*({が/けれども}、お酒は飲まなかった。)  
 (佐野 2001: 182)

このように、とりたて詞はそれぞれが異なる認可子を要求する。佐野 (2001) では、以下のような認可の階層を提示している。



(佐野 2001: 181)

### 1.3.3 先行研究の問題点

ここまで、とりたて詞の統語的、意味的な特徴を確認し、とりたて詞の多様性について、それぞれのとりたて詞に認可子の統語的階層を仮定するアプローチがあることを見てきた。このアプローチにおいて、否定極性表現は「認可子が否定辞であるとりたて詞」に過ぎないことになる。実際、野田 (1995) では、シカや(44)の否定的特立のナドのような否定と呼応関係にある要素を「肯否の階層」のとりたて詞として扱っている。

- (44) a. なぐさめの言葉など 要らない。  
b. \*なぐさめの言葉など 要る。 (野田 1995: 25)

しかし、これらのアプローチには問題がある。まず、野田 (1995) の「肯否の階層」にあるとりたて詞には、明らかに統語的な性質が異なるものが混在しているという点である。「肯否の階層」に分類されているとりたて詞は、ハ (対比)、モ (同類)、シカ、ガ (排他)、ナド (否定的特立)、グライ (最低限)、マデ (意外)、モ (意外)の8つである。これらのうち、シカ、ナドは、「否定辞との呼応」を要求しているとりたて詞として考えることができる。

- (45) 公園には 太郎シカ {来なかった/\*来た}。  
(46) 太郎は 危険物ナド {持ち込んでいない/\*持ち込んでいる}<sup>15</sup>。

しかし、シカやナドと異なり、ハ (対比)、モ (同類)、マデ (意外)、モ (意外)、ガ (排他) は、否定辞との呼応制限や逆に否定文や肯定文に出てこないといった制約は (少なくとも表面的には) ない。さらに、「肯否の階層」に位置しているとりたて詞に関しては、野田 (1995) では見逃されている様々な現象が未検証のままとなっている。例えば、グライ (最低限) については、次のような例から、肯定文にしか出てこないため「肯否の階層」に位置づけられている。

- (47) 足し算グライ {できる/\*できない}。 (野田 1995: 26)

しかし、グライ単独では否定文と呼応できなくても、次のようにグライモの形にすることで今度は肯定文と共起できなくなるという性質がある。

- (48) 足し算グライモ {\*できる/できない}。

---

<sup>15</sup> ここで扱うナドは、否定的特立のナドである。沼田 (2009) は、ナドには他に疑似的例示の例ととりたて詞とは区別される並列詞の例を挙げているが、本稿では、特に記述のない限りナドは否定的特立のナドを指す。

つまり、一概にグライが否定辞と呼応できないと断定することはできない。他にも、ナドについては格助詞を後接した場合、(46)と異なり肯定述部と共起しなくてはならないという特徴がある。

(49) よりにもよって、太郎は 危険物ナドを {持ち込んでいる/\*持ち込んでいない}。

このように、とりたて詞における「肯否の階層」には、「肯否」に関わる多くの要素が混在している状態で、未整理のままである。

また、佐野 (2001, 2007)、茂木 (2004) 等の理論的研究においても、肯否の観点はシカについて部分的に記述があるのみで、十分に検証されているとは言い難い。しかし、野田の分類で「肯否の階層」に多くのとりたて詞が位置していることや、野田の指摘以外にも(4)に挙げたように否定辞を要求するとりたて詞群が存在することを踏まえると、とりたて詞における述部の肯否は整理すべき重要な課題であると考えられる。本稿では、否定極性表現の体系を明らかにすることを目的としているが、そのためにはまずとりたて詞における肯否の対立にはどのような特徴があるのかを整理する必要があると考えられる<sup>16</sup>。

## 1.4 本稿の立場

### 1.4.1 本稿の目的

ここまで、否定極性表現に関する先行研究として、大きく二つの問題点について触れてきた。一つが、従来提案されている否定極性表現の構造は、個別の議論に終始し、どのような特徴を持つ否定極性表現がどの統語構造や認可システムを用いるのかが明らかになっていなかったこと、言い換えれば、否定極性表現の体系的な分析がなかったことである。もう一つが、否定極性を持つものが多く含まれるとりたて詞において、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞の違いが十分に分析されていなかったこと、つまり、とりたて詞における「肯否の階層」の整理が不十分であることである。そ

---

<sup>16</sup> このようなとりたて詞における「肯否の階層」の整理については、特に第2章から第4章で取り扱う。

ここで本稿では、序章 (0.2 節(5)) で述べたように次の二つの目的を立てた。(50)として再掲する。

- (50) a. 日本語の否定極性表現の体系性を明らかにする試みの一環として
  - i. とりたて詞における否定極性の有無を整理する。
  - ii. 否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞を比較し、否定極性表現の特徴を明らかにする。
- b. (50a)で明らかになった否定極性表現の特徴を前提として
  - i. 否定極性表現の意味的な特徴を明らかにする。
  - ii. 否定極性表現の統語的な多様性を明らかにする。

つまり、「肯否の階層」に位置するとりたて詞を整理し、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞を区別することで否定極性表現の特徴の一端を明らかにし、否定極性表現の体系性にアプローチするという試みである。

#### 1.4.2 本稿のアプローチ—係助詞・副助詞の違い—

特に本稿では、アプローチの手法として「係助詞」と「副助詞」の対立に注目したい。山田 (1936) では、係助詞と副助詞は以下のように定義されている。

- (51) a. 副助詞は或る用言の意義に関係を有する語に付属して遥かに下なる用言の意義を修飾するもの (山田 1936: 439)
- b. 係助詞は陳述をなす用言に関係ある語に付属して、その陳述に勢力を及ぼすもの (山田 1936: 472)

山田 (1936) は、副助詞と係助詞に似たような用いられ方があることを認めつつも、副助詞は用言を副詞的に修飾する要素である一方、係助詞は「一定の陳述」を要求する要素である点が異なるとしている。具体的には、副助詞としてナド、マデ、ダケ等、係助詞としてハ、モ、シカ等を挙げている。

それに対し、奥津 (1974, 1986) は、山田 (1936) が「陳述に影響を及ぼす」とした係助詞が、(52)に見るように連体修飾節内に収まることを指摘している。奥津は、陳述に

影響を及ぼすのであれば連体修飾節という狭い節の中に収まらないはずなので、これを係助詞と呼ぶのは不自然であると指摘している。

(52) 色は美しいが香はよくない花 (奥津 1986: 20)

また副助詞に関しても、ダケとシカが意味的には同じ文になることなどの理由を挙げ、係助詞と副助詞の違いが曖昧である問題点を指摘し、係助詞・副助詞とされた語群の大部分を「とりたて詞」として一括することを提案している。

近年では、(51)の抽象的な規定による分類より、とりたて詞としての分類を採用する分析が多い。しかし、係助詞と副助詞の違いは、(51)に挙げるものにとどまらず、その違いを捉えるためにはやはり両者は区別すべきとする研究もある。山田 (1936) は、係助詞と副助詞の違いは、助詞同士の承接順や格助詞の後接の可否に現れることを指摘している。山田 (1936) は、副助詞は、格助詞への前接・後接をとともに許すが、係助詞は格助詞に後接することしかできないことを指摘している。また、係助詞と副助詞が共起した場合は、必ず係助詞が副助詞に後接することを指摘している。

特に、否定極性表現シカは、否定との呼応を持ち山田 (1936) の指摘する係助詞として典型的にふるまう。シカは格助詞の後接を許さず、必ず否定辞という「一定の陳述」を要求する。意味的に類似しているにもかかわらず、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞の対立として代表的なものにダケとシカがあるが、山田 (1936) は、否定極性を持つとりたて詞シカを係助詞に分類し、ダケを副助詞に分類している。以上のような点を踏まえると、少なくともとりたて詞の中の否定極性を整理するという目的においては、係助詞・副助詞の区別は有効であると考えられる。

青柳 (2006, 2008) は、山田 (1936) の分析に基づき、生成文法の観点から係助詞・副助詞の分類が統語的に有効な概念であると指摘している。青柳 (2006, 2008) は、とりたて詞というカテゴリは、(53)に挙げる共通性を持つ点で有効な枠組みであると考え一方、名詞性やスコープの広狭という観点からは、係助詞・副助詞という枠組みもまた統語的に有効な概念であると指摘する。

- (53) a. 統語的性質：  
とりたて詞は、主要部であるが、投射はしない ([-projection]) 付加詞である。
- b. 形態的性質：  
とりたて詞は接語的 ([+clitic]) である。 (青柳 2006: 22、再掲)

青柳は山田の分析に則り、とりたて詞と助詞の承接順の違いを名詞性の違いで捉えている。青柳は、すべての名詞句は指定詞 D を主要部とし、D は形態格素性[case]がある音声形式/X/と結びつかなければならないとの仮定の上、格助詞が、ヲ、ニは D の形態格素性に音声形式を与える存在であるとする。よって、副助詞のみが格助詞を後接できるのは副助詞に名詞性があるためであるとする。

また、青柳 (2006, 2008) では、副助詞と係助詞のスコープの違いを指摘している。沼田 (1986, 2000, 2009 他) や青柳 (2006, 2008) では、とりたて詞は付加した語より広い焦点をとることや、とりたて詞が動詞句末に付加したにもかかわらず、ある特定の語だけを焦点にとることがあることが指摘されている。青柳 (2006, 2008) は、前者を「広い焦点」、後者を「狭い焦点」と呼び、とりたて詞が係助詞か副助詞かによって取れる焦点の広狭が異なると観察している。具体的には、係助詞は主語に付加しても目的語に付加しても vP 全体を焦点にとれるが、副助詞は主語に付加した場合その名詞句しか焦点にすることができず、主語からの焦点の拡張ができない。青柳 (2006) が挙げる、係助詞ハの焦点の拡張、副助詞バカリの焦点の拡張の例を確認すると、次のようになる。

### 係助詞タイプ

- (54) 今回の事件は、白昼堂々、しかも人ごみで起こったのだから…
- a. 誰かが 犯人を 目撃しては いる はずだ。
  - b. 誰かが 犯人は 目撃して いる はずだ。
  - c. 誰かは 犯人を 目撃して いる はずだ。 (青柳 2006: 127)

### 副助詞タイプ

- (55) a. 漫画を 読んで ばかり いた。  
b. 漫画ばかり 読んで いた。 (青柳 2006: 122)
- (56) a. 太郎が 花子を 責めてばかり いた。  
b. 太郎ばかり (が) 花子を 責めて いた。 (青柳 2006: 131)

(54)では動詞句末に係助詞のハが付加している。この場合、ハは少なくとも「誰かが犯人を目撃する」という事態があるはずだ、という主語を含んだ動詞句 vP を焦点にとるということを端的に示している。しかし、とりたて詞が動詞句末に付加した場合以外にも、vP を焦点にとることができる例が存在する。(54b)や(54c)のように項の位置 (目的語、主語) にハが付加した場合であっても、同様の意図で発話することが可能である。



このことから、ハは目的語についても主語についても  $vP$  までを焦点化できることが分かる。

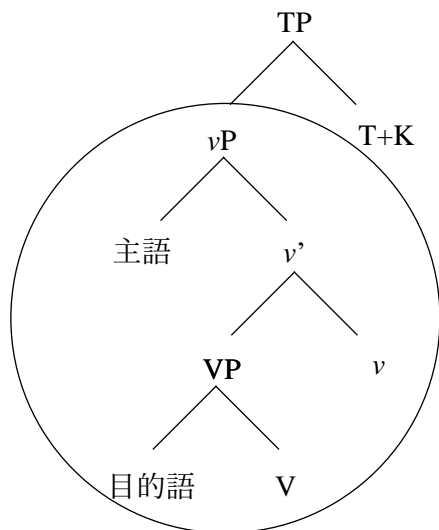
一方、(55)(56)は副助詞のバカリが付加している例である。バカリが動詞句末に付加した(55a)は、VP を焦点にとり「何かをしている時間の中で、大半が漫画を読むという行為をしていた」という発話意図を示すことができる。一方でバカリが目的語に付加した例(55b)も、焦点を拡張させ(55a)と同様に解釈することができる。しかし、(56ab)の場合はそのようにはいかない。(56a)はバカリが動詞句末に付加し、「(たとえば、ミーティングなどで他の人が発言したりする機会はなく) 太郎が花子を責めるというできごとだけが継続した」という発話意図を示すことができる。しかし、主語にバカリが付加している(56b)の場合は焦点を拡張して(56a)と同じ発話意図で発話することができない。(56b)を解釈するならば、「(他の人は花子を責めていないが、) 太郎は花子を責めていた」という、主語名詞句のみを焦点にとったものになる。つまり、焦点の拡張には係助詞と副助詞で非対称性がある。係助詞ハは、動詞句末に付加しても、目的語・主語位置に付加しても  $vP$  を焦点にとることができるが、副助詞バカリは、主語位置から  $vP$  に焦点を拡張させることができない。

青柳は、このような係助詞と副助詞の非対称性を、両者の認可位置の違いによって説明している。青柳は、係助詞は LF で時制辞 T<sup>17</sup> の位置まで上昇して認可される一方、副助詞は軽動詞  $v$  の位置に上昇して認可されると仮定することで説明することを試みている。よって、係助詞は T より下位の主語や目的語を含んだ  $vP$  までを作用域にとることができる一方、副助詞は主語を含まない VP までしか焦点にとれないという。そのことを示したのが(57)である。

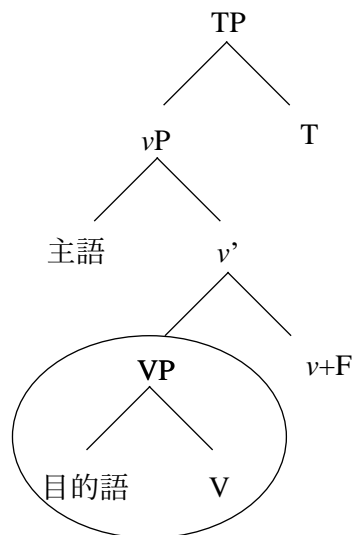
---

<sup>17</sup> 時制辞 T は機能範疇に属する要素であり、Fukui (1995) によると [+Functional, -Lexical] という素性の指定を持つ。機能範疇については注 18 を参照。

(57) a. 係助詞の作用域



b. 副助詞の作用域



(青柳 2008: 49、ただし K は係助詞、F は副助詞を表す)

ちなみに、副助詞で、主語にとりたて詞が付加した場合は、指定詞 D によって認可されるため、焦点は主語名詞句内にとどまる。

さらに、青柳(2006、2008)は、機能範疇と語彙範疇の区別に基づいて係助詞が[+F (unctional), -L (exical)]、副助詞が[+F, -L]という素性指定を持っていると仮定し、係助詞と副助詞の共通性と違いを捉えている<sup>18</sup>。これは、係助詞、副助詞がそれぞれとり得る焦点範囲から、係助詞の場合は LF 部門での認可が同じ素性を共有する時制辞 T によって、副助詞の場合は同じ素性を共有する軽動詞 v によって行われるからである、と説明されている。そして、副助詞のみが[+L]であることについて、副助詞がもとは内容語であったものが多いことを挙げ、「その歴史的由来から内容語的性質を保持しているとしても不思議はない」(青柳 2006: 50)としている。

もちろん、係助詞・副助詞による分類には限界も見られる。現代語においては、古典語のように係助詞や副助詞によって助詞の承接順が一定になっているのではなく、副助詞の中、係助詞の中でも容認度に揺れが見られるうえ、スコープの広狭の問題もすべての係助詞で一定の現象として現れるわけではない。青柳 (2006, 2008) が扱うとりたて詞も、数多く存在するとりたて詞のなかの一部分を特徴づけたにすぎない<sup>19</sup>。ただし、

<sup>18</sup> 動詞 (V)、名詞 (N)、形容詞 (A)、前置詞 (P)、決定詞 (指定詞) (D) のような範疇を語彙範疇と呼び、これらの範疇は[±N][±V]の素性の束によって区別される。一方、補文標識 (C)、屈折要素 (I) などのこれらの素性の束によっては捉えられない範疇を機能範疇と呼ぶ (Chomsky 1970)。青柳 (2006, 2008) では、Fukui (1995) の品詞分類に基づき、すべての品詞は以下のような機能範疇的素性 ([±F (unctional)]) と語彙範疇的素性 ([±L (exical)]) の組み合わせによって分類できると仮定している。

	+L	-L
+F	語彙的性質を併せ持った機能範疇 (v など)	純粋な機能範疇 (C、T など)
-F	語彙範疇 (N、V、A など)	語彙的でも機能的でもない範疇 ('minor category')

図 i: 語彙範疇と機能範疇の交差分類 (Fukui 1995: 338)

<sup>19</sup> そもそも係助詞・副助詞という分類は、とりたて詞のもつ「焦点—前提」構造を作るという機能とは無関係な分類であり、山田 (1936) の指摘する係助詞・副助詞と青柳の定義するそれでは対応する語群にずれがある。山田 (1936) による係助詞・副助詞の区別は、助詞の連結順序を主な切り口としているため、焦点を形成するか否かという点を考慮していない。しかし、本稿は、とりたて詞の品詞論を展開することは目的としないため、「どこからどこまでがとりたて詞か」という点には踏み込まない。山田 (1936) の指摘する係助詞・副助詞には、とりたて詞としては分類されない語や用法が含まれているが、本稿は奥津 (1986) や沼田 (1986, 2000,

これらの特徴がとりたて詞のなかの一側面を表していることは確かである。特に、とりたて詞の中の否定極性を取り扱うという目的においては、これらの区分を用いることには意義がある。以下に見るように、否定極性を持つシカが格助詞の後接を許さないのと同様、他の否定極性を持つとりたて詞はいずれも格助詞の後接を許さないという係助詞としての一定の特徴を示しているためである。

- (58) a. \*太郎シカが 公園に 来なかった。  
b. \*警察ナドが 学校にやって来なかった。  
c. \*太郎は 足し算グライモが できない。

そこで本稿では、とりたて詞における係助詞・副助詞の分類は少なくとも否定極性という特徴を切り取るうえでは有効な概念であると考え、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞を区別する際に、青柳 (2006, 2008) が用いている係助詞・副助詞の特徴を用いて分析していくことにする。つまり、本稿では、序章であげたとりたて詞でもナド、マデは、否定極性を持つものと持たないものとの青柳の指摘する[±L]という違いがあることを見ていくことになる<sup>20</sup>。

## 1.5 第1章のまとめ

本章では、先行研究でどのように否定極性表現が扱われてきたか確認した。その結果、否定極性表現の体系的分析には、まだ多分に検討の余地が残っていることが明らかになった。本稿ではこのような問題点を踏まえ、青柳 (2006, 2008) の指摘する係助詞・副助詞の分類を活かしつつ、「肯否の階層」と呼応関係にあるとりたて詞を整理し、否定極

---

2009) 等の分析で、とりたて詞とされた語に絞って議論する。係助詞・副助詞という分類の限界については、第4章でも述べる。

<sup>20</sup> ただし、青柳 (2006, 2008) の枠組みにおいて、係助詞はハとモシカ扱われておらず、否定極性表現を持つとりたて詞がどのように扱えるのかは触れられていない。青柳 (2006) では、日本語には主要部との一致を引き起こすような Spec は存在しないという立場に立っており、この仮定に則ったままでは、否定極性表現の Spec-Head による認可は受け入れられないことになり、(57)の構造との関連性を探るのは困難である。そこで、本研究では一般的な係助詞の特徴を捉えることを優先し、ひとまず当面(57)の構造にしたがって、肯否の対立を持つとりたて詞を観察していくことにする。

性を持つとりたて詞とそうでないとりたて詞はどのように異なるのか分析する。さらに、否定極性表現の体系性を明らかにする試みの一環として、否定極性表現にはどのような意味的、統語的特徴があるのか分析していく。

## 第2章 否定的特立を表すとりたて詞 ナドにおける肯否の対立

本章では、とりたて詞における否定極性の整理のため、否定的特立を表すとりたて詞ナドの分析を行う。本章では、ナドは一形態でありながらふるまいの異なる二つの用法をもつことを主張する。その二つとは、一方は否定辞や否定的な評価のモダリティを要求するナドであり、もう一方はそれ自体が評価の意味を内包しそのような要求はないナドである。具体的には、これらのナドは焦点の広狭や助詞の連結順序がそれぞれ異なり、その違いは伝統的な国文法等で指摘されている係助詞・副助詞の違いと一致することを示す。

### 2.1 はじめに

#### 2.1.1 本章の目的

否定的特立を表すナドには、次の(1a)のような用法がある。

- (1) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。  
b. 当然、警察ナド 学校に やって来なかった。

(1a)はどちらも、「警察は学校にやって来るものではない」という話者の評価を示している。しかし、(1a)は肯定述部と共起し、(1b)は否定辞と共起しているという違いがある。よって、(1a)のナドは述部と肯否が逆転する評価を、(1b)のナドは述部そのままの評価を警察に対して与えていることになる。

また、(1a)の場合はナドに格助詞が後接し、(1b)の場合はナドに格助詞が後接しないという特徴がある。

- (2) a. \*よりにもよって、警察ナド $\phi$  学校に やって来た。

- b. \*当然、警察ナドが 学校に やって来なかった。

また、次の(3)(4)の例からは、否定文に現れるか肯定文に現れるかで、ナドの前接部分の解釈に違いがあることが分かる。

- (3) a. よりにもよって、花子ナドが 研究者に なった。  
b. よりにもよって、花子が 研究者ナドに なった。
- (4) a. 花子ナド 研究者に なるはずがない。  
b. 花子が 研究者にナド なるはずがない。

肯定述部と共起している(3a)では、ナドは「花子は研究者になれるほど賢い人間ではない」という花子に対する否定的な評価を示しており、(3b)では「研究者という職業は、なるべきではない職業である」という研究者に対する否定的な評価を示している。一方、否定述部と共起している(4a)は、(3a)と同様に花子に対する否定的評価が読みとれる。ここまでは、いずれもナドは直前の名詞句に対して否定的な評価を与えているということが出来る。(4b)についても、直前の名詞句である「研究者」に対して否定的な評価を与えている解釈が可能である。しかし、(4b)はさらにもう一つの解釈が可能である。つまり、「そんなに賢くない花子が研究者になることは起きるはずがない」という花子に対する否定的な評価を表すことも出来る。

このように、肯定述部と共起するナドと否定述部と共起するナドは、形態は同じでもかなりふるまいに違いが見られる。本章の目的は、(1ab)のような否定的特立のナドの肯否の対立におけるふるまいの違いを体系的に捉えることである。結論を先に述べておくと、(1ab)のナドは格助詞やコピュラの承接、焦点の拡張などに違いがあり、否定文に現れるナドと肯定文に現れるナドは、それぞれ伝統的な国文法において「係助詞」「副助詞」とされた語群の特徴と一致することを示す。

### 2.1.2 対象となるデータ

本稿で対象とするのは、次のような否定的評価を表すとりたて詞ナドである。

- (5) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。  
b. 当然、警察ナド 学校にやって来なかった。 (再掲)

- (6) a. よりにもよって、田中先生は、人望の薄い山田ナドを 推薦した。  
b. 当然、田中先生は、人望の薄い田中ナド 推薦しなかった。

同じナドという形態を持つものであっても、沼田 (2009) で「並列詞」や「擬似的例示」を表すとりたて詞とされたものは含まない。次の(7)は並列詞ナドの例であり、(8)は擬似的例示のとりたて詞ナドの例である。

(7) 今度の誕生日にはバラの花などを贈った。 (沼田 2009: 99)

(8) 竹本さんなど、来春結婚する 10 組の中に入ってるんじゃないの。  
(沼田 2009: 233)

(7)は、誕生日に贈った複数の贈り物の一例としてバラの花を挙げている例である。このようなナドは、直前の名詞に付加して、全体として名詞として機能する (奥津 1974)。つまり、焦点一前提構造を形成する機能を持たない要素である。当然、否定的な評価の意味も感じられない。一方、(8)は「竹本さん」以外の誰かが、「来春結婚する 10 組の中に入っている」ことが真であるかのごとく「肯定」される (沼田 2009: 233) ものであり、ナドの前接名詞以外の要素が実在するか否かという点で(7)とは異なる。しかし、両者は連続的であり、やはり話者の評価的な意味は感じられない。本稿では、これらのナドは考察対象から外すこととする。本稿では、これ以降特に記述の無い場合、ナドは否定的特立を表すとりたて詞のナドである。

さて、(5ab)はどちらからも、話者の「警察は学校にやって来るものではない」という評価が読みとれる。しかし、(5a)は肯定述部と共起し、(5b)は否定述部と共起しているという違いがある。よって、(5a)のナドは述部と肯否が逆転する評価を、(5b)のナドは述部そのままの評価を「警察」に対して与えていることになる。本稿では便宜上、(5a)のように述部とは肯否が逆転する評価を表すナドを A 用法、もしくはナド A、(5b)のように否定辞や否定的評価のモダリティがそのまま評価を明示するナドを B 用法、もしくはナド B と名付けて論を進めていく<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> ナド B には否定辞または否定的評価のモダリティが必要だと定めたが、これは正確ではない。それは、次のような例文から明らかである。

- (i) 太郎は、身体に悪いと分かっているながら、煙草ナド {を/\* $\phi$ } 止められなかった。  
(ii) 太郎は、身体に悪いと分かっているのだから、煙草ナド {\*を/ $\phi$ } すぐ止めるべきだ。



### 2.1.3 本章の構成

本章の構成は以下の通りである。2.2 節では、否定的特立のナドが先行研究でどのように分析されてきたか確認し、その問題点を指摘する。続く 2.3 節では、ナドの格助詞の後接の可否に注目し、伝統的な国文法で指摘されている係助詞・副助詞の違いや、それに基づく統語的分析である青柳 (2006, 2008) の指摘に沿って具体的な現象を観察する。そして、二つのナドが焦点の広狭、名詞性などの現象において対立を見せ、それは係助詞・副助詞のふるまいの違いとそれぞれ一致することを示す。2.4 節は 2.3 節の提案のさらなる裏付けとして疑問文化の可否を見る。2.5 節は本章のまとめである。

## 2.2 先行研究

### 2.2.1 ナドの意味的特徴

ナドに関する先行研究は記述的なものが中心である (沼田 1986、山田 1995、中西 1995、安部 2003 等)。統語的、理論的な研究はほとんど見られない。記述的な先行研究においては、沼田 (2009) が、ナドの意味を次のように記している。

(9) 否定的特立を表すナドの意味

主張：断定・自者一肯定

含み：想定・自者一否定／他者一肯定

二次的特徴：「想定」は評価を含む

(沼田 2009: 238)

この記述をもとに、(10)に挙げた例文の意味を解釈すると(11)のようになる。

---

(i)(ii)はいずれも「煙草は止めるべきものだ」という「煙草」に対する評価が読みとれる。しかし、(i)は格助詞が後接可能で「止められなかった」という述部と肯否が逆転する評価を「煙草」に下しているのに対し、(ii)は格助詞が後接不可能で述部がそのまま「煙草」に対する評価になっている。すなわち、(i)は否定辞と共にナド A の特徴を、(ii)は否定辞が現れずにナド B の特徴を有している。このことから、ナド A、B の特徴には本来否定辞の有無は関係なく、話者が意味的に「否定的な評価」をもって発話すれば容認可能となることが分かる。しかし、ナド B の実際の用例はほとんどが否定辞と共に起ること、話者によって異なり得る語用論的な否定的評価の読みを排除することの二点のため、ナド B を否定辞と共に起るものに限って論を進めていく。

- (10) よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。
- (11) 沼田 (2009) に基づいた(10)の意味  
 主張：断定・ 警察—学校にやって来た  
 含み：想定・ 警察—学校にやって来るべきではないもの  
 警察以外—学校にやって来るもの

さらに、沼田 (2009) では、B 用法のナドに関して(12)のような用例を挙げている。(12)は、意味上(13)のような否定とのスコープ関係になっていることを指摘している。

- (12) 幸ちゃんとなど 一緒に遊ばない。 (沼田 2009: 240)
- (13) (幸ちゃんとナド 一緒に遊ば) ない。

(13)は、ナド B が否定辞より狭いスコープをとっていることを示している。よって、ナドの意味は、「幸ちゃんとナド一緒に遊ぶ」で計算される。(9)に沿って意味を記述するのであれば、自者「幸ちゃん」に対して「一緒に遊ぶ」という命題を肯定する。その上に否定の意味が加わり、「幸ちゃんと遊ばない」という命題が成立する。ただし、含みとしての、自者「幸ちゃん」についての想定命題「一緒に遊ばない」および他者「幸ちゃん以外」についての想定命題「一緒に遊ぶ」は否定の対象とならない。

しかし、一見意味的には(13)のようなスコープ関係に見えたとしても、それがナドの統語的特徴まで示しているとは限らない。沼田 (2009) で指摘されているようにナドが否定述語や反語的表現と共起した場合 (すなわち、ナド B の場合)、格助詞がナドに後接しないという特徴がある。対照的に、A 用法の場合は、むしろ格助詞は後接させるのが自然である。

- (14) a. よりにもよって、警察ナド {が/\* $\phi$ } 学校にやって来た。  
 b. 警察ナド {\*が/ $\phi$ } 学校に やって来なかった/来るものではない。
- (15) a. よりにもよって、人望の薄い田中ナド {が/\* $\phi$ } 推薦された。  
 b. 当然、人望の薄い田中ナド {\*が/ $\phi$ } 推薦されなかった。<sup>2</sup>

---

<sup>2</sup> ただし、ヲ格の場合は(i)に挙げるように、一見反例に感じられる例が見られる。しかし、その場合は否定との位置関係がガ格の場合とは異なり、(ii)のようにパラフレーズされる構造であ

(14)(15)に示したような格助詞の前後接の問題は、否定のスコープの広狭を論じても捉えることはできない。否定のスコープと格助詞の前後接の問題は、直接は関係していないためである。例えば、「全部」と否定とのスコープ関係を見ても、格助詞が後接の有無にかかわらず、否定とのスコープ関係は曖昧なままである。

- (16) a. あんなにお腹を空かせていたのに、太郎は全部 {を/φ} 食べなかった。  
(残してしまっていた。) 否定>全部
- b. 嫌いな食べ物ばかりだったので、太郎は全部 {を/φ} 食べなかった。  
(何も食べなかった。) 全部>否定

本研究では、(5)で見た二つのナドは統語的性質が異なることを、2.3節以降で示していく。

## 2.2.2 ナドの統語的特徴

ナドの統語的特徴を個別に議論している先行研究は管見の限り見あたらない。また、部分的に扱っている先行研究も、ナド B のみについての言及しかなく、(1)や(5)で示した述部の肯否の対立について言及しているものはない。

部分的な指摘としては、益岡 (2007) では、(17)のような例を挙げ、ナドを含むとりたて詞に「準提題」の用法があると指摘している。

- (17) a. おれだってそのくらいのことは知っているぞ。  
(「どくとりマンボウ青春期」)
- b. 私などももちろん、一言も言葉をさしはさむどころではありませんでした。

---

ると考えられる。

- (i) 当然、田中先生は、人望の薄い山田ナド {を/φ} 推薦しなかった。  
(ii) 当然、田中先生は、[人望の薄い山田ナドを推薦する]ことはなかった。

これは、ナドと否定辞が一致の関係にあるというよりは、「人望の薄い山田ナドを推薦する」で A 用法として完結した文に否定辞を付加している構造であり、ここでの反例とはならないと考える。

(遠藤順子「夫の宿題」)

- c. この知的閉鎖状況こそ大衆文化の行き着く先でもあった。

(小林道憲「二十世紀とは何であったか」)

(益岡 2007: 129)

益岡 (2007) は、「(筆者注：取り立ての機能や提題の機能に) 関係する多くの助詞において、パラダイグマティックな関係を表す副助詞性とシンタグマティックな関係を表す係助詞性が入り混じって現れる」と指摘している。益岡のこの指摘は、ひとつのとりたて詞が複数の統語的位置を持つこと、それが「取り立て」という機能や「提題」という機能に結びついていくことを示唆するものであり、ナドという一つの形態に二つの用法があることを間接的に肯定するものではある。ただし、「提題」「準提題」「取り立て」とは具体的にどのような統語的特徴を持つ要素を指しているのか明らかでなく、本稿でいうところの A 用法のナドとの関連も明らかでない。

とりたて詞は、沼田の一連の研究が示す一定の統語的特徴を持ちつつも均質ではなく、様々な文法的階層に位置していることが指摘されている (沼田 1989、野田 1995、茂木 2001, 2004, 2006、青柳 2006, 2008、佐野 2001, 2007、宮地 2007 他、第 1 章 1.4 節参照)。野田 (1995) では、(18)のデータから、ナドは否定辞と呼応する必要があると考え、ナドを「肯否の階層」に位置するとりたて詞として分析している。

- (18) a. なぐさめの言葉など要らない。

- b. \*なぐさめの言葉など要る。

(野田 1995: 25)

この指摘は、ナドが肯否の対立と深く関係があるとする点で本稿の立場と共通している。しかし、野田の指摘する「肯否の階層」には、否定極性を持つもの以外にも統語的に様々な特徴を持ったものが混在している状態であり、また、A 用法のナドについても扱われておらず、十分な分析がなされているとは言い難い (第 1 章 1.3.2 節参照)。

## 2.3 現象の観察

2.1 節で確認したように、ナドには A 用法と B 用法で格助詞の承接順に違いがあった。とりたて詞の中で格助詞が後接できるのは、山田 (1936) や青柳 (2006, 2008) で「副助詞」と呼ばれる語群の特徴であり、格助詞が後接できないのは「係助詞」と呼ばれる

語群の特徴である。そこで本節では、先行研究で指摘されている係助詞と副助詞の違いを、大きく名詞性の違いと焦点範囲の違いとに分けて概観した後、二つのナドのふるまいの違いが、係助詞と副助詞のふるまいの違いと一致することを見る。

## 2.3.1 名詞性の違い—格助詞、コンピュータの承接順序—

### 2.3.1.1 格助詞の後接

青柳 (2006, 2008)では、副助詞のみが名詞性を持ち、格助詞やコンピュータが後接可能であると指摘している。ここでは、二つのナドの名詞性について見ていく。

山田 (1936) は、副助詞のみが格助詞が後接可能であることを指摘している (cf. 青柳 2006, 2008、宮地 2007 他、第 1 章参照)。

- (19) a. 本・を・ば／も (格助詞—係助詞)  
b. \*本・は／も・を (係助詞—格助詞)
- (20) a. 本・を・だけ／まで／ばかり (格助詞—副助詞)  
b. 本・だけ／まで／ばかり・を (副助詞—格助詞) (青柳 2006: 52)

(14)(15)の繰り返しになるが、ナドについて観察してみると、ナド A の場合は格助詞が後接することができるが、ナド B の場合は、格助詞を後接させると不自然な文になる。

- (21) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。  
b. \*当然、警察ナドが 学校に やって来なかった。
- (22) a. よりにもよって、人望の薄い太郎ナドが 推薦された。  
b. \*当然、人望の薄い太郎ナドが 推薦されなかった。

(21b)(22b)は、並列詞のナドとしては解釈できるが、それはここで意図している解釈ではない。つまり、ナド B の場合のみ格助詞を後接させると、ナド B としては解釈でき

なくなるということである。これは、ナド A は副助詞の特徴に、ナド B は係助詞の特徴にそれぞれ一致するものである<sup>3</sup>。

### 2.3.1.2 コピュラの後接

さらに、ナド A とナド B は、コピュラの接続についても違いが見られる (茂木 2001, 2004, 青柳 2008 他)。茂木 (2004) は、マデ、サエを除く副助詞系のとりたて詞 (F タイプ) のみがハ分裂文においてコピュラを後接可能であると指摘している。

- (23) a. 太郎が話したのは自分のこと {だけ／ばかり} だ。  
b. \*太郎が話したのは自分のこと {まで／も} だ。  
c. \*太郎が話さなかったのは自分のこと {しか／さえ} だ。 (茂木 2004: 191)

ナド A、ナド B についても、(24)-(27)に見るように、ナド A はコピュラが後接可能だが、ナド B はコピュラが後接不可能であることが分かる。

- (24) 二次会に来たのは、よりもよって嫌われ者の太郎ナドだった。  
cf. よりにもよって、嫌われ者の太郎ナドが 二次会に来た。
- (25) 推薦されたのは、よりもよって人望の薄い太郎ナドだった。  
cf. よりにもよって、人望の薄い太郎ナドが推薦された。
- (26) #<sup>4</sup> 二次会に来なかったのは、嫌われ者の太郎ナドだった。  
cf. 当然、嫌われ者の太郎ナド 二次会に来ない。

---

<sup>3</sup> しかし、次のような「べきだ」というモダリティと共起した場合は、述部に話者の評価がそのまま表れているが、格助詞が後接しているため、一見反例のように見える。

(i) 当然、警察ナド {が／ $\phi$ } 学校に やって来るべきではない。

これは、「べき」が前節の命題をひとくりにして、(ii)のような構造をとることを可能にしているためであると考えられる。つまり、「警察ナドが学校にやって来る」というナド A を内蔵した構造であると判断できる。

(ii) 当然、[警察ナドが 学校に やって来る] べきではない。

<sup>4</sup> 本稿で#は、意図している解釈とは異なる解釈となることを表している。以下同様。

(27) #推薦されなかったのは、人望の薄い太郎ナドだった。

cf. 当然、人望の薄い太郎ナド、推薦されなかった。

(24)(25)は、ナド A にコピュラが後接した例であり、(26)(27)はナド B にコピュラが後接した例である。(24)(25)の cf.は、「嫌われ者の太郎は二次会に来るべきではない」「人望の薄い太郎は、推薦されるべきではない」という評価が感じられることが分かる。そしてその評価を変えることなく、分裂文に言い換え可能である。一方、(26)(27)は、B用法の文の言い換えとしては不自然な文である。もちろん、(26)(27)をナド A の文の言い換えと判断し、(28)(29)のような分裂文を作ることは可能である。

(28) 二次会に来なかったのは、よりもよって幹事の太郎ナドだった。

cf. よりにもよって、幹事の太郎ナドが二次会に来なかった。

(29) 推薦されなかったのは、よりもよって特待生の太郎ナドだった。

cf. よりにもよって、特待生の太郎ナドが推薦されなかった。

(28)は、分裂文に直す前の文で、「(幹事の) 太郎は、二次会に来るものだ」と予想していたものと思われる。分裂文に直す前、「(幹事の) 太郎ナドが二次会に来なかった」という文は予想と肯否が異なる事態を表しているため、ナド A である。その場合は分裂文に言い換え可能である。しかし、「太郎」に対する「嫌われ者」という評価を変えないままナド B として分裂文に言い換えることはできない。(29)の例も同様である。つまり、コピュラの後接はナド A のみが可能であると言い換えることができる。

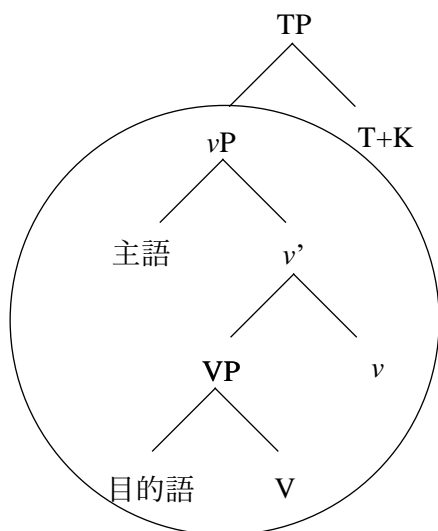
### 2.3.2 焦点の拡張

ナド A とナド B の違いは、格助詞やコピュラの後接以外にも見られる。Kuroda (1965)、青柳 (2006, 2008) や沼田 (1986, 2000, 2009) では、とりたて詞は、付加した語より広い焦点をとることや、とりたて詞が動詞句末に付加したにもかかわらず、ある特定の語だけを焦点にとることがあることを指摘している。青柳 (2006, 2008) では、前者を「広い焦点」、後者を「狭い焦点」と呼び、とりたて詞が係助詞か副助詞かによって取れる焦点の広狭が異なると指摘している。

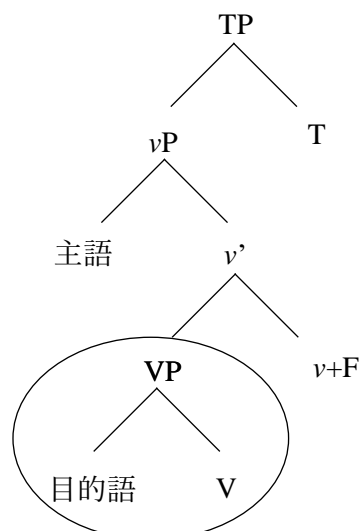
青柳は、係助詞は時制辞 T と、副助詞は軽動詞 v と一致するために LF で上昇すると仮定する。よって、係助詞は、時制辞 T の位置まで上昇し主語や目的語を含んだ vP ま

でを作用域にとることができるため、*vP* までを焦点にとることができる<sup>5</sup>。一方、副助詞は *v* の位置までしか上昇しないため、主語を含まない *VP* までを作用域とし主語を焦点にとれないという。そのことを示したのが(30)である。

(30) a. 係助詞の作用域



b. 副助詞の作用域



(青柳 2008: 49、ただし K は係助詞、F は副助詞を表す)

青柳の指摘する係助詞への焦点の拡張、副助詞ばかりの焦点の拡張の例を確認すると、次のようになる。

### 係助詞タイプ

(31) 今回の事件は、白昼堂々、しかも人ごみで起こったのだから…

- a. 誰かが 犯人を 目撃しては いる はずだ。
- b. 誰かが 犯人は 目撃して いる はずだ。
- c. 誰かは 犯人を 目撃して いる はずだ。

(青柳 2006: 127)

### 副助詞タイプ

(32) a. 漫画を 読んで ばかり いた。

- b. 漫画ばかり 読んで いた。

(青柳 2006: 122)

<sup>5</sup> *v* や *T* については、第 1 章 1.4.2 節および同節注 18 参照。



- (33) a. 太郎が 花子を 責めてばかり いた。  
 b. 太郎ばかり (が) 花子を 責めて いた。 (青柳 2006: 131)

(31a)では動詞句末に係助詞ハが付加している。この場合、ハは少なくとも「誰かが犯人を目撃する」という事態があるはずだ、という主語を含んだ動詞句 *vP* を作用域にとるということを端的に示している。しかし、目的語や主語にハが付加した(31b)や(31c)も同様の意図で発話することが可能である。このことから、ハは目的語についても主語についても *vP* を焦点化できることが導かれる。

(32)(33)は副助詞タイプのばかりが付加している。(32a)は *VP* を焦点にとり、「何かをしている時間の中で、大半が漫画を読むという行為をしていた」という意味を表すことができるが、一方でばかりが目的語に付加した例である(32b)も焦点を拡張させ同様に解釈することができる。しかし、問題は主語にばかりが付加した場合の(33b)である。(33a)は「(たとえば、ミーティングなどで他の人が発言したりする機会はなく) 太郎が花子を責めるというできごとだけが継続した」という意味を表すことができる。しかし、主語にばかりが付加している(33b)の場合は焦点を拡張して(33a)と同じ意味にはならない。(33b)を解釈するならば、「(他の人は花子を責めていないが、) 太郎は花子を責めていた」という、主語名詞句のみを焦点にとったものになる。

### 2.3.2.1 目的語からの拡張

早速、ナドの焦点の拡張について見ていく。まず、目的語に二つのナドが付加した場合を観察する。より対立関係を明示的に表すために、焦点となっている範囲とともに範列関係にある事態も[ ]で示す。

#### ナド A

- (34) a. よりにもよって、花子は [学校に 行か] ず、[部屋に 籠り] ナドしている。  
 b. よりにもよって、花子は [学校に 行か] ず、[部屋ナドに 籠っ] ている。

#### ナド B

- (35) a. 花子は、[部屋に 籠り] ナドせず、[学校に 行く] べきだ。  
 b. 太郎は、[部屋にナド 籠ら] ず、[学校に 行く] べきだ。

(34)はナド A の例である。(34a)は動詞句末にナドが付加し、VP を焦点にとっている。一方、(34b)では目的語にナドが付加している。(34b)は、もちろん、「よりもよって、図書館でも、居間でもなく、(自分の) 部屋に籠っている」という目的語名詞句を焦点にとった解釈も可能である。しかし、ここで注目したいのは、焦点を拡張させ VP を焦点にとった解釈、つまり(34a)と同義の解釈も可能である点である。これは、ナド B にも同様の現象が見られる。(35a)は動詞句末にナドが付加した例であり、(35b)は目的語にナドが付加した例である。いずれも VP を焦点にとった解釈が可能で、同義に解釈できる<sup>6</sup>。以上のように、ナド A・ナド B いずれも、目的語からは VP への焦点の拡張が可能である。

### 2.3.2.2 主語からの拡張

問題となるのは、主語からの焦点の拡張の例である。主語にナドが付加した場合、ナド A とナド B で非対称性が見られる。(36)(37)は、それぞれナド A、ナド B の例である。動詞句末にナドが付加した(36a)(37a)は、いずれも、vP を焦点にとり、「あんなところで誰かが走るはずがない」という評価を読み取ることができる。しかし、主語の不定名詞句にナドが付加した(36b)(37b)の場合は非対称性がみられ、ナド A の場合のみ許容できない。

#### ナド A

- (36) a. あんなところで、[誰かが 走り] ナドしている。  
b. \*あんなところで、[誰かナドが 走って] いる。

#### ナド B

- (37) a. あんなところで、[誰かが 走り] ナドするはずがない。  
b. ?あんなところで、[誰かナド 走る] はずがない。

(36b)(37b)の非対称性は、焦点の拡張の可否によって自然に捉えることができる。ナド B は、主語から焦点を拡張させて、「(あんなところで) 誰かが走る」ことに対して否定的

---

<sup>6</sup> もちろん、(35b)も「図書館に籠るのは構わないが、部屋には籠るべきではない」という、目的語名詞句を焦点にとった読みも可能である。

評価を表しており、自然な文である。一方、ナド A の場合は焦点の拡張ができないため、「誰か」に対して否定的な評価を表すことになっており、不自然な文になっている。

主語からの焦点の拡張の可否によって、2.1 節で見た例も説明できる。

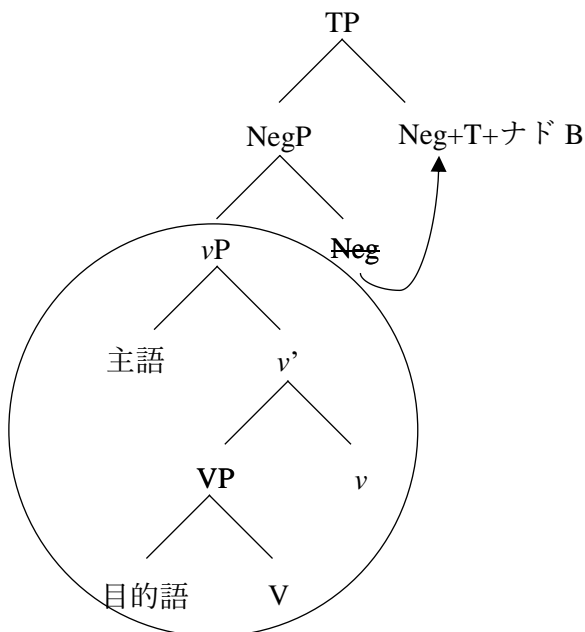
(38) よりにもよって、花子が 研究者ナドに なった。 (再掲)

(39) 花子が 研究者にナド なるはずがない。 (再掲)

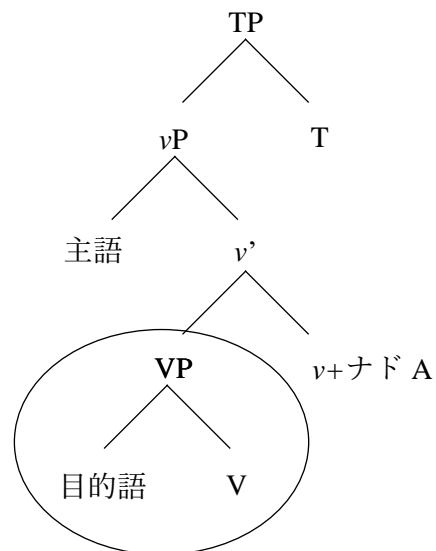
(38)は、「研究者」に対して「なるべきでない職業である」という評価を与えることは可能であるが、「花子が研究者になる」という事態に対して「そのようなことは起きるはずがない」という解釈をすることはできない。一方、否定述部と共起した(39)の場合はそのような解釈が可能である。これは、(39)のナドが焦点を拡張させ vP を焦点にとることが可能であると考えれば、自然に説明することができる。

ここまで、格助詞やコピュラの承接、焦点拡張の可否について見てきた。このような非対称性は、青柳の指摘する係助詞と副助詞の焦点の拡張の違いに一致するものである。青柳が示す構造に二つのナドを当てはめると、次の(40)のようになる。

(40) a. ナド B の作用域



b. ナド A の作用域



なお、NegPについては、岸本 (2005, 2010) や松井 (2009) の分析に従い、日本語の否定辞 Neg は時制辞 T まで主要部移動を起こし、そのうえで否定極性表現が認可されるものと仮定しておく<sup>7</sup>。

### 2.3.3 サエの後接

(40)の構造の妥当性は、他の現象からも裏付けられる。ここでは、二つのナドにサエを後接させることで、両者の違いを確認する。青柳 (2006) によると、サエは副助詞から係助詞へと変化した語であり、副助詞と係助詞の中間的性質を見せるという。格助詞の前後接の可否は話者によって揺れがある一方、作用域については副助詞と同じ VP であるとしている。

主要部後置型の日本語では通常、構造的に低い位置にある要素がそれより高い位置にある要素に後接することができない。つまり、サエは構造的に高い VP を作用域にとる要素に後接することはできないことを予測する。

ナドについて観察してみると、ナド A にはサエが後接することができる一方、ナド B にはサエを後接させることができないことが分かる。

#### ナド A

- (41) a. 警察ナドが 学校に やって来た。  
b. 警察ナドさえ 学校に やって来た。
- (42) a. 人望の薄い太郎ナドが 推薦された。  
b. 人望の薄い太郎ナドさえ 推薦された。

#### ナド B

- (43) a. 警察ナド 学校に やって来なかった。

---

<sup>7</sup> 岸本 (2010: 32) では、日本語のナイは、語彙的な指定がなくなり、[-L]の機能範疇となっており、[+L]の指定がなくなることが主要部移動の動機となることを指摘している。また、松井 (2009) は、否定極性表現の認可の条件として、動词语幹、否定辞、時制辞が直接結合するための主要部移動を挙げている。松井は(i)を挙げ、とりたて詞モにより否定辞の主要部移動が妨げられているため、否定極性表現シカが認可されないと指摘する。

- (i) a. \*太郎が りんごシカ 食べなくもなかった。  
b. \*太郎シカ りんごを 食べなくもなかった。 (松井 2009: 139)

- b. #警察ナドさえ 学校に やって来なかった。
- (44) a. 人望の薄い太郎ナド 推薦されなかった。
- b. #人望の薄い太郎ナドさえ 推薦されなかった。

(41)(42)と(43)(44)はそれぞれ、ナド A、ナド B の例である。(41)(43)を取り上げて見ていく。(41a)(43a)の場合は、いずれも、話者は「警察は学校にやって来ないものだ」と評価している。一方、(41b)と(43b)では非対称性がある。(41b)は、a の場合と同様に、「警察は学校にやって来ないものだ」と評価している。しかし、(43b)は a とは異なり「警察は学校にやって来るべきものだった (のに学校にやって来なかった)」という評価になる。これは、(43b)の「やって来なかった」という述部に対して評価が逆転しているので、ナド A の解釈である。つまり、ナド B にサエが後接すると、ナド B としては解釈できないということである。このような現象からも、ナド B の作用域が  $vP$  であるとする(40)の構造の妥当性が確認できる。

#### 2.3.4 ここまでのまとめ

以上見てきたように、ナドは一形態でありながら、格助詞の前後接、コピュラの後接、焦点の広狭において、山田 (1936) や青柳 (2006, 2008)、茂木 (2001, 2004) が指摘している副助詞 (F タイプ)、係助詞 (K タイプ) と同じ対立を示す二つの用法があることが確認できた。青柳 (2006) では、機能範疇と語彙範疇の区別に基づいて係助詞が[+F (unctional), -L(exical)]、副助詞が[+F, +L]という素性指定を持っていると仮定し、係助詞と副助詞の共通性と違いを捉えている。これは、係助詞、副助詞がそれぞれとり得る焦点範囲から、係助詞 (-L) の場合は LF 部門での認可が同じ素性を共有する時制辞 T によって、副助詞 (+L) の場合は同じ素性を共有する軽動詞によって行われるからであると説明されている。そして、副助詞のみが+L であることについて、副助詞がもとは内容語であったものが多いことを挙げ、「その歴史的由来から内容語的性質を保持しているとしても不思議はない」(青柳 2006: 50) としている。

この枠組みを用いることで、二つのナドについても体系的に分析することができる。ナド A、ナド B は、それぞれ、素性指定が[+L, +F]、[-L, +F]で、認可子が  $v$  と T である

と仮定する。すると、ナドの二面性を[±L]という素性の対立で捉えることができる<sup>8</sup>。ここで、ナド B は述部がそのまま話者の否定的評価を示している一方、ナド A は話者の評価と肯否が逆転する述部になっていたことを合わせて考える。そうすると、ナド B は否定的評価の対象と否定的評価の内容を結ぶという機能によって否定的評価を示しているため、純粋な機能語的存在であると捉えられる。一方、ナド A はそれ自身が既に否定的な評価の意味をもつ内容語的存在であり、したがってナドが付加した句の外に否定的評価を必要としないと考えられ、二つのナドの対立を自然に捉えることができる。

## 2.4 更なる裏付け

前節では、ナド B が否定的評価の対象と否定的評価の内容をつなぐという機能によって評価を表していると指摘した。このことは、疑問文における二つのナドの非対称性からも裏付けられる。次に見るように、ナド A は疑問文にすることができるが、ナド B はそのままでは疑問文にすると許容度が下がる。これは、ナド B の述部には、話者の否定的評価が明示されているためであると考えれば、自然なことである。ナド B は話者が持っている否定的評価の内容が述部に来るため、それを他者に尋ねる疑問文にすることができない。一方、ナド A は、述部にナド B のような制約はないため、問題なく疑問文にすることができる。

- (45) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に 来たの？  
b. \*警察ナド 学校に来なかったの？
- (46) a. よりにもよって、人望の薄い太郎ナドが 推薦されたの？  
b. \*人望の薄い太郎ナド 推薦されなかったの？

---

<sup>8</sup> 長谷川 (2007) では、係助詞が T よりさらに上位の CP レベルで認可される可能性について言及している。青柳 (2008) は、注で CP 領域も [+F, -L] であるため、その可能性もあることに触れている。注 1 で触れたように、ナドには時制辞は必須ではなく、話者の否定的な評価を表す述語がありさえすれば認可されることから、ナドの認可は単純な否定辞や時制辞によるというよりは、何らかの否定的なモダリティ要素によって認可されると仮定したほうが厳密である。ここでいう否定的なモダリティ要素の統語的位置については、特に日本語は、単なる命題否定の否定辞以外にも、「べきでない」「はずがない」等のモダリティ要素に後接する形で否定辞が現れるため、特定は容易ではない。ここでは、便宜的に「統語的に高い何らかの機能的要素」として、(40) のように Neg+T に代表させて認可されると仮定しておく。

ナド B を疑問文にするためには、(47)(48)のように、聞き手の心の内を問う「～と思うの？」や話者自身が考えていることを聞き手に確認するような「～よね？」を用いなくてはならない<sup>9</sup>。

- (47) a. あなたは「警察ナド 学校に来ない」と思うの？  
b. 警察ナド 学校に来なかったよね？
- (48) a. あなたは「太郎ナド推薦されない」と思うの？  
b. 太郎ナド 推薦されないよね？

このような疑問文におけるナド A とナド B の非対称性も、2.3 節の結論を裏付けている。

さて、ナド B は、先行研究では否定のスコープによって説明されてきた例である (2.2 節参照)。しかし、否定のスコープによる分析では、このような疑問文における非対称性を捉えることはできない。(49)に見るように、否定のスコープの広狭は疑問文化には関係がないためである。

- (49) a. (ボイコットで、) 昨日の授業に、学生は、全員 来なかったの？  
全員>否定
- b. (初回の授業には必ず参加するよう伝えてあったのに、)  
履修登録した学生は、全員 来なかったの？  
否定>全員

疑問文化の可否を正確に捉えるためには、やはり、[±L]の素性の違いを仮定し、二つのナド一致の位置の違いとして捉えるのが有効である。

---

<sup>9</sup> 例えば、廣瀬 (2005) では、思考動詞の引用部には、聞き手の存在を想定しない思考・意識としての側面、例えば、確信、推量といった心的状態が現れることが指摘されている。

- (i) a. 秋男は、<雨に違いない>と思っている。  
b. 秋男は、<雨だろう>と思っている。
- (ii) a. \*秋男は、[雨だよ]と思っている。  
b. \*秋男は、[雨です]と思っている。

## 2.5 第2章のまとめ

以上、第2章では、否定的特立を表すナドに二つの用法があることを見た。その二つとは、一つは否定的な評価の意味を含んだ内容語的な用法であり、もう一つが否定辞や否定的なモダリティと一致する必要がある、つまり否定極性を持つ機能語的な用法である。そして、その二つの違いは、山田 (1936) や青柳 (2006, 2008) が指摘する副助詞と係助詞の違いと一致することを見た。また、二つのナドは疑問文化においても違いが見られ、これは、ナドと否定のスコープ関係では捉えられないことを指摘した。

本章は、否定極性表現と非否定極性表現の対立を洗い出すことを目的としたが、ここに一つ、ナドにおける対立を捉えることができた。次節ではさらに、マデについても類似した対立が見られることを示す。



## 第3章 意外を表すとりたて詞マデにおける 肯否の対立

前章に引き続き第3章でも、否定極性を持つとりたて詞を洗い出していく。ここでは意外を表すとりたて詞マデを見る。第2章では、否定的特立を表すナドに、否定極性を持つ用法と持たない用法があることを見た。意外を表すマデにも、ナドと類似した肯否の対立が見られる。本章では、マデもまた、ナドと同じように二つの用法に分けて論じるべきことを示す。もちろん、マデとナドで異なるふるまいを見せる点もあるが、本章では、マデに否定極性を設定しなくては説明できない現象があることを示す。

### 3.1 はじめに

意外を表すマデには、次の(1ab)のような用法がある<sup>1</sup>。

- (1) a. 子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やって来た。  
b. 子どもの喧嘩ごときでは、警察マデ やって来なかった。

(1ab)のマデは、いずれも「子どもの喧嘩ごときでは、警察は学校にやって来ないはずだ」という話者の予想を表している。(1a)はそのような想定を裏切る事態について言及し、

---

<sup>1</sup> 本章で対象とする現象は、意外を表すとりたて詞のマデである。同じマデという形態を持っていても、格助詞や順序助詞のマデは含まない。沼田 (1986) では、マデを4種類に区別し、とりたて詞のマデと区別している。とりたて詞以外の3つを以下に挙げておくが、本稿では、以下のマデは対象としない。以降、特に記述のない限りマデは意外を表すとりたて詞のマデを指す。

- (i) a. 御存知の方は当方まで御一報ください。 (格助詞)  
b. 大阪から東京まで新幹線に乗った。 (順序助詞)  
c. 彼は3年間見違うまで(に)強たくましくなった。 (形式副詞)

(沼田 1986: 187)

肯定述部と共起している。一方、(1b)は「警察」に対する「子どもの喧嘩ごときではやって来ない」という話者の予想を述部で明示し、否定述部と共起している。つまり(1a)のマデは述部と肯否が逆転する想定を、(1b)のマデは述部そのままの想定を、「警察」に与えていることになる。(1a)の解釈は、「よりもよって」「信じられないことに」等の話者の「意外である」という認識を補うような副詞を添えるとより解釈が容易になる。一方(1b)の解釈は、「当然」「もちろん」などの、話者の「想定通りだった」という認識を補う副詞を添えると解釈しやすい。本稿では、以降、解釈がしやすいようにこれらの副詞を補いつつ議論を進めていく。

(1ab)と類似した対立が否定的特立を表すナドにも見られる。(2)のナドもまた、話者は、「警察は学校にやって来ないものだ」と評価しているが、(2a)は肯定述部と、(2b)は否定述部と共起しているという違いがある。

- (2)     a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。  
          b. 当然、警察ナド 学校に やって来なかった。

第2章では、(2ab)のナドを、それぞれナド A、ナド B と呼んだ。第2章での観察の結果、ナド A、ナド B はそれぞれ山田 (1936) や青柳 (2006, 2008) で「副助詞」「係助詞」とされた語群の特徴と一致することを指摘した。具体的には、ナド A は、内容語的 (+L) で、否定的評価の意味を内包した要素である。一方、ナド B は、純粋に機能語的 (-L) で、否定的評価の対象と否定的評価の内容をつなぐという機能によって評価を表示しており、否定極性を持つことを示した。

便宜上、本章でも(1ab)のマデをそれぞれマデ A、マデ B と名付けて議論していく。本章では、マデについても、否定極性を持つ用法と持たない用法を区別すべきことを論じる。もちろん、ナドとマデでは異なったふるまいを見せる点もある。しかし、本章では、マデ B には否定極性があり、マデ A とは統語的に異なった特徴を持つと仮定しなければ説明できない現象があることを示す。

本章の構成は以下の通りである。まず、3.2 節では先行研究を概観し、先行研究のアプローチの問題点を指摘する。次に 3.3 節では、具体的な現象観察を通し、マデ A とマデ B は統語的に異なったふるまいを見せること、そして、マデ B に否定極性を仮定すべきことを指摘する。最後に 3.4 節で本章の内容をまとめる。

## 3.2 先行研究

### 3.2.1 マデと否定のスコープ

沼田 (2009) では、意外のマデの意味を(3)のように記述している。

(3) 意外を表すマデの意味

主張： 断定・自者一肯定

含み： 断定・他者一肯定

想定・自者一否定

二次的特徴：自者は自者・他者で構成する序列上の最端要素

(沼田 2009: 168)

沼田 (2009) の記述に沿って、(4)の意味を考えると、次のようになる。まず、主張は、自者「警察」に対して「やって来た」という命題を断定するものになる。さらに含みは、他者「警察以外 (例えば保護者や教師)」についても、「やって来た」という命題を断定しつつ、自者「警察」については、「やって来ない」と想定していたことを表している。

(4) 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やって来た。

マデの二次的特徴によると自者「警察」は「子どもの喧嘩でやってくる人」の序列上の最端要素となる。つまり、「子どもの喧嘩でやってくる人物」の序列上、警察は「最もやって来ない人」ということを表している。

沼田 (2009) には、マデ B についての記述は見られない。マデ B もまた、警察に対して「子どもの喧嘩ごときでは、やって来ないだろう」という想定をしている。しかし、マデ B はマデ A と異なり、否定述部と共起しているという違いがある。マデ B は先行研究ではどのように扱われてきたのだろうか。

寺村 (1991: 114) は、マデは、「ある事態の存在を積極的に伝えようとする形が叙述の普通」であるとし、マデが否定文には現れにくいことを指摘している。また、野田 (1995) によると、マデは「肯否の階層」に位置するとりたて詞であるという。野田 (1995) は、その根拠として、(5)(6)の例を挙げマデが肯定述部とは共起するが、否定述部とは共起しないと指摘している。これは、(7)から分かるように、マデと同じく意外を表すサエとは対照的な現象である。

- (5) 弁当まで 用意した。 (野田 1995: 27)
- (6) ?お茶まで 用意しなかった。 (野田 1995: 27)
- (7) お茶サエ 用意しなかった。

このように、先行研究には、マデはそもそも否定述部と共起しないと指摘し、マデ B の存在自体認識していないものがある。しかし、茂木 (1999, 2004) は、マデとサエの違いとして、肯定文・否定文の分布の違いは本質ではないことを示している。(8)は、マデが否定文に現れた例であるが、いずれも問題なく許容できる。

- (8) a. 花子まで そのテストに合格しなかった。  
b. 今年は誕生日プレゼントまで もらえなかった。 (茂木 2004: 79)

茂木 (1999, 2004) は、サエとマデの違いは、肯定文と否定文の分布の違いではなく、両者がとり得る否定とのスコープ関係の違いであると指摘している。マデやサエが否定文に現れた場合、(9)のようにマデは二通りに解釈できるが、(10)のようにサエは一通りの解釈しかない。

- (9) 親にまで打ち明けなかった。  
解釈 1：最も信頼できる「親」にも打ち明けなかった。  
解釈 2：信頼できる他の人（「友人」等）には打ち明けたが、「親」には打ち明  
けなかった。 (茂木 2004: 80)
- (10) 親にさえ打ち明けなかった。  
解釈 1：最も信頼できる「親」にも打ち明けなかった。  
解釈 2：\*信頼できる他の人（「友人」等）には打ち明けたが、「親」には打ち明  
けなかった。 (茂木 2004: 80)

解釈 1 は、マデやサエが否定より広いスコープ (W スコープ) をとっている解釈であり、解釈 2 は、マデやサエが否定より狭いスコープ (N スコープ) をとっている解釈であるという。この場合のマデは、「親友には打ち明けたが、『親にマデ打ち明ける』ということとはしなかった」というようにパラフレーズできる。つまり、サエは常に W スコープをとる一方、マデは N スコープ・W スコープのいずれもとることができるという

ことになる。茂木の議論に則れば、寺村 (1991) や野田 (1995) の指摘していた現象は、マデが N スコープに偏りやすいため、否定文でサエと交代できないことがあるという傾向差に過ぎないことになる。

さて、野田 (1995) や茂木 (1999, 2004)、佐野 (2001, 2007) は、とりたて詞の呼応現象を指摘している。例えば、野田 (1995) によると、「例示」を表すといわれているデモは、「未確定を表すモード」と呼応しなければ許容されないという。

- (11) a. お茶でも飲もう。  
 b. \*お茶でも飲んだ。 (野田 1995: 8)

佐野 (2001, 2007)、茂木 (2001, 2004) は、とりたて詞には統語的階層性があり、それぞれの統語的階層に位置する「認可子」に相当する要素と一致 (呼応) する必要があるとしている (詳細は 1.3.2 節を参照)。(11)のデモの例に当てはめれば、デモは述部の未確定のモダリティ要素によって認可されることになる。

茂木 (2004) では、マデと否定のスコープ関係を統語に反映させ、マデの一致する要素として、随意的に述部 (Pred P) か時制辞 (T) がとれると仮定している。つまり、マデが述部によって認可された場合(12)のようにマデは否定のスコープの中に収まり N スコープになる。一方、(13)のようにマデが否定辞より高い時制辞によって認可された場合、W スコープをとる。つまり、茂木 (2004) は、マデの解釈の曖昧性を認可位置の随意性によって説明しているということである。

- (12) [[[ マデ Pred P] Neg P] TP] (Neg>マデ)  
 (13) [マデ [[ Pred P] Neg P] TP] (マデ>Neg)

### 3.2.2 問題の所在

先行研究が指摘している現象と、本稿の観察対象であるマデ A、マデ B の現象を突き合わせてみる。すると、マデ A、マデ B の解釈は、それぞれ茂木の指摘する W スコープ、N スコープの解釈に等しいことが分かる。

(14) マデ A

信じられないことに、娘である花子の発言を 太郎マデが 信じなかった。

cf. 信じられないことに、娘である花子の発言を 太郎マデが 疑っていた。

(15) マデ B

当然、娘である花子のことを、親の太郎マデ 見捨てなかった。

(14)は茂木のいう W スコープの解釈であるが、これはマデ A に等しい。(14)は、太郎について「娘である花子の発言を信じるはずだ (疑わないはずだ)」という話者の想定が感じられる。話者は、その想定が裏切られ、「太郎マデが信じなかった (疑った)」ということを感じている。つまり、話者の想定と述部の肯否が逆転する想定を太郎に与えていることになるマデ A の解釈である。

一方、(15)は、茂木のいう N スコープの例である。話者は、太郎に対して「父親の太郎は花子を見捨てないだろう」と想定している。つまり、太郎に対して(15)の述部そのままの想定が与えられていることになる。これは、マデ B の解釈と同等である。

マデ B について、前節では、先行研究が否定のスコープ関係によって(1)の対立を捉えていることを見た。しかし、マデ B の解釈には、否定のスコープによっては説明できない現象が複数見られる。

先行研究は、否定極性表現シカが他の否定極性表現と共起できないことを指摘している (Kato 1985、Aoyagi & Ishii 1994、茂木 2004、片岡 2006、西岡 2007 他)。このような特徴を持つ否定極性表現を Kato (1985) は、Strong NPI と呼ぶ。

(16) a. \*一人モ リンゴシカ 食べなかった。

b. \*太郎シカ 決して シャベらなかった。 (Kato1985: 155)

マデ B は、シカと共起すると極めて不自然な文になる。(17)の不自然さは、(18)(19)と比較すると分かり易い。(18)(19)は、それぞれマデやシカを単独で用いた例である。

(17)<sup>2</sup> a. ??当然、花子は、初対面の太郎にマデ 義理チョコシカ 渡さなかった。

---

<sup>2</sup> 茂木 (2004) では、(17)と同じ「…マデ…シカ…」の語順の文について、次のような例を挙げ、本稿でいう B 用法のマデとして、正文と判断している。

- b.??さすがに1年生の段階では、まだ太郎シカ 全国大会出場マデ 決めていない。
- (18) a. 花子は、義理チョコシカ 初対面の太郎に 渡さなかった。  
 b. 当然、花子は、手作りチョコを 初対面の太郎にマデ 渡さなかった。
- (19) a. さすがに1年生の段階では、まだ太郎シカ全国大会出場を決めていない。  
 (他の部員は、2、3年生になって全国大会出場を決めることができた。)  
 b. さすがに1年生の段階では、まだ太郎は全国大会出場マデ 決めていない。  
 (せいぜいベスト 16 止まりだった。)

また、マデ A にはこのような対立は見られないことから、マデ B の特殊性がうかがえる。(20)は、マデ A とシカが共起した例であるが、いずれも自然に解釈できる。

- (20) a. 信じられないことに、担任教師の太郎マデが、大人の意見シカ 聞いていなかった。(生徒の意見を聞いていなかった。)  
 b. (花子は渡米しても、ほとんど連絡をよこさなかった。)  
 恋人にマデ一通のメールシカ 送らなかった。

このようなマデ B の Strong NPI 的なふるまひは、否定のスコープでは捉えることができない。否定とのスコープのインタラクションを起こす要素には、特にシカとの共起制限がないためである。茂木 (2004) や片岡 (2006) は、シカと否定辞に挟まれた位置の量化詞が、否定より狭いスコープを取ることを指摘している。

- (21) 小学生シカ [ゲームソフトを5本以上も] 持っていない。  
 \*5本以上>否定、否定>5本以上  
 (片岡 2006: 159)

- 
- (i) 太郎は 赤いりんごシカ 太郎にマデ 渡さなかった。 (茂木 2004: 142)

(17)は、判断がしやすいように状況が想像しやすい文脈を設定しているが、それでもやはり(18)-(20)に比べて明らかに許容度が低いと判断する話者が多数である。また、(i)を許容する話者であっても、マデをマデハに置き換えるとより座りの悪い文になるようである。マデとマデハの関係については、第4章参照。

- (ii) ??太郎は 赤いリンゴシカ 太郎にマデハ 渡さなかった。

(22) 太郎は、花子にシカ 必要なすべての情報を 教えなかった。

\*すべて>否定、否定>すべて

(21)は、「小学生以外の人、例えば社会人は、ゲームソフトを 0 本~4 本持っている (4 本以上持っている人はいない)」ということを示している。片岡 (2006) は、「5 本以上」が否定されている解釈のため、「否定>5 本以上」になっていると指摘している。(22)の例も同様で、「太郎は、花子以外の人に、一部の情報を教えた (すべての情報を教えたわけではない)」ことを表している。よって、「すべて>否定」ということになる。マデもこの位置に現れた場合、同様の解釈が可能になることが予測されるが、実際は先ほど(17)で見たように、シカとマデが共起すると不自然になる。つまり、(17)はマデと否定のインタラクションによっては捉えられない現象であることになる。これらの問題は、マデ B にも否定極性があると仮定することで自然に説明できる。つまり、シカとマデ B はいずれも否定極性表現であり、一つの否定辞に対して複数生起することができないため(17)が非文になると考えるのである。

以上のように、(1)で見たマデにおける肯否の対立をもつ現象には、否定極性が関わっていると仮定すべきものがあることが確認できた。本稿では、3.3 節以降、マデ AB の統語的性質は、否定のスコープによって説明されるものではなく、ナド AB と並行して、否定極性の有無によって説明されるべき現象であることを示していく。

### 3.3 現象の観察

#### 3.3.1 格助詞の後接とハの後接

ここでは、マデ A とマデ B の統語的な性質の違いが具体的に現れる現象を見ていく。まずは、格助詞の承接を取り上げる。

青柳 (2006, 2008) は、名詞性を持つものにのみ格助詞が後接できると指摘する。そして、副助詞のみが名詞性を有し、格助詞を後接させることができ、係助詞は純粋に機能的な要素であるため、格助詞を後接させることができないと述べている。ナド AB の格助詞の承接は、それぞれ副助詞と係助詞と並行したふるまいを見せるのであった。(23)に見るように、ナド A には格助詞が後接し、ナド B には格助詞が後接しない。マデ AB についても、(24)(25)に見るようにマデ A の場合のみ格助詞の後接を許し、マデ B の場合は格助詞が後接することができない。



- (23) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。  
 b. \*当然、警察ナドが 学校に やって来なかった。
- (24) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やって来た。  
 b. \*さすがに、子供の喧嘩ごときで、警察マデが やって来なかった。
- (25) a. あきれたことに、無関係の子どもマデが 疑われた。  
 b. \*当然、無関係の子どもマデが 疑われなかった。

青柳の議論に則るならば、マデ A は名詞性を有する一方、マデ B は名詞性を持たないということになる<sup>3</sup>。このことも、マデ A とマデ B の統語的なステータスが異なることを支持している。

さらに興味深いことに、ナド、マデの二つの用法は、ハの後接についても興味深い対立を示す。次にみるように、ナド A、マデ A はハを後接することができないが、ナド B、マデ B は問題なくハを後接することができる。

- (26) a. \*よりにもよって、警察ナドハ 学校に やって来た。  
 b. 当然、警察ナドハ 学校に やって来なかった。
- (27) a. \*信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデハ やって来た。  
 b. さすがに、子供の喧嘩ごときで、警察マデハ やって来なかった。
- (28) a. \*あきれたことに、無関係の子どもマデハ 疑われた。  
 b. 当然、無関係の子どもマデハ 疑われなかった。

つまり、A 用法と B 用法は、ハとガの後接において非対称性があるということである。ハの後接については次章で詳述するためここでは詳しくは触れないが、ここでもまた、A 用法と B 用法の統語的ステータスの違いを見ることができる。

---

<sup>3</sup> ただし、ヲ格に後接した場合は、一見反例のように見える(i)のような例が存在する。しかし、その場合のヲ格は(ii)にパラフレーズできるような解釈であると考えられる。

- (i) 当然、花子は、無関係の子どもマデを疑わなかった。  
 (ii) 当然、花子は、[無関係の子どもマデを疑う] ことはなかった。

(ii)は、「無関係の子どもマデを疑う」という A 用法の文であり、それを「こと」で一度括って否定している例であると考えられる。ナドについても同様の現象がある。第 2 章注 2 も参照。

### 3.3.2 疑問文化の可否

第2章では、ナド A は、内容語的な要素であり、話者の否定的評価を内包しており、述部に否定的な評価を明示する必要がないと述べた。一方で、ナド B は、話者の評価対象と評価内容をつなげるという機能によって否定的評価を表していると指摘した。このことは、ナド B のみが述部に制約があるという現象からも裏付けられる。次のように、ナド A は Yes-No 疑問文化することができるが、ナド B はそれができない。

- (29) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に 来たの？  
b. \*警察ナド 学校に来なかったの？

マデについても見てみると、ナドと並行した現象が見られ、マデ A は Yes-No 疑問文化できるが、マデ B はそれができない。

- (30) a. 子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やって来たの？  
b. \*子どもの喧嘩ごときで、警察マデ やって来なかったの？
- (31) a. 無関係の子どもマデが 疑われたの？  
b. \*無関係の子どもマデ 疑われなかったの？

この現象は、ナド B と同じく、マデ B の述部は話者の評価をそのまま明示しているため、話者自身の評価を聞き手に尋ねると不自然になると考えることで自然に説明することができる。マデ B を疑問文にするときは、次のように引用句にしたり、「～よね？」という確認の疑問の形式をとる必要がある。

- (32) a. あなたは「子どもの喧嘩ごときで、警察マデやってこない」と思っているの？  
b. 子どもの喧嘩ごときで、警察マデやって来ないよね？
- (33) a. あなたは、「無関係の子どもマデ疑われない」と思っているの？  
b. 無関係の子どもマデ疑われないよね？

このような述部の制約は、マデと否定のスコープの曖昧性では捉えることができない。例えば、「全員」と否定のスコープの曖昧性は述部には影響を及ぼさず、問題なく Yes-No 疑問文化できるためである。

- (34) a. (ボイコットで、) 昨日の授業に、学生は、全員 来なかったの？  
 全員>否定
- b. (初回の授業には必ず参加するよう伝えてあったのに、)  
 履修登録した学生は、全員 来なかったの？  
 否定>全員

このように、否定のスコープのインタラクションの可否は疑問文化には関係がない。このことは、ナド A・マデ A とナド B・マデ B の対立は、統語的に同じステータスの要素が否定とのスコープのインタラクションを起こしている現象なのではなく、統語的にステータスが異なる二つの要素があると仮定すべきであるということを示している。

### 3.3.3 提案

以上、マデ AB の対立は、否定極性を持たないマデと持つマデの対立として説明すべきであることを見てきた。本稿では、ナドにおける対立とマデにおける対立を並行して捉え、マデ A は対象の否定的な予想を内包した内容語的な要素である一方、マデ B は対象と、対象についての否定的な予想の内容をつなげる機能を持つ純粋に機能的な要素であり、否定極性を持つと仮定する。このように仮定することで、3.3.1 節、3.3.2 節で見た現象 (格助詞の後接、疑問文化の可否) は、自然に説明することができる。

本稿の提案は、マデに二つの語彙項目を設定するものである。さて、否定のスコープによる説明は、サエとマデの解釈の違いを捉えることを可能にしていた。本稿の提案でこれを解釈しなおすと、マデは一形態で二つの語彙項目を設定するため解釈の曖昧性が現れるが、サエは一形態で一つの語彙項目しかないため、解釈も一通りしかないということになる<sup>4</sup>。実際、サエは、マデの A 用法に値する用法は持つが、B 用法にあたる用法は持たない。

- (35) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やって来た。  
 b. 当然、子どもの喧嘩ごときでは、警察マデ やって来なかった。 (再掲)

---

<sup>4</sup> ここでは、(i)のような、条件節に現れる「最低限」を表すサエについては扱わない。

(i) 水サエあれば、あと3日は生き残れる。

- (36) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察サエ やって来た。  
b. #当然、子どもの喧嘩ごときでは、警察サエ やって来なかった。

ところで、マデは A 用法の場合モを後接させることができ、B 用法の場合ハを後接させることができる。しかし逆の組み合わせは非文になる。この特徴は、まさに二つのマデの語彙的特徴が異なることを意味している。

- (37) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデ {\*/ハ/モ} やって来た。  
b. 当然、子どもの喧嘩ごときでは、警察マデ {ハ/\*モ} やって来なかった。

一方、サエについて見てみると、そもそもサエは、「サエハ」という連結を許さない。このこともまた、サエが B 用法としての特徴を持たないことを意味している。

- (38) 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察サエ {\*/ハ/モ} やって来た。

このことも、マデには一形態で二つの語彙項目を認められるが、サエには一つの語彙項目しかないことを裏付けている。

### 3.4 第3章のまとめと課題

以上、マデもまた、ナドと同じように、肯否の対立において統語的に異なるステータスを持つ A 用法と B 用法に分けて考えるべきことを論じた。特に B 用法には、否定極性を仮定すべきことを指摘した。

確かに、ナドとマデの間にも違いはあるが、ここでは否定極性を仮定することの妥当性の検証に重きを置いて分析した。なお、ナドとマデの違いについては、第4章 4.6.2 節に詳細を載せた。このような用法間の差がそれぞれ何に依拠しているかについては、更なる考察を要する。

## 第4章 肯否の対立における「とりたて詞+ハ」と他のとりたて詞への拡張

第2章、第3章では、ナド、マデは一形態で副助詞的なA用法と否定極性を持つ係助詞的なB用法に分かれることを指摘した。本章では、A用法とB用法は、「ハの後接・編入」という統語的操作を介して対応関係にあることを指摘する。先行研究の分析は、位置や素性の違いから係助詞・副助詞の対立を捉えてはいるものの、その間にどのような対応関係があるのかについては言及していない。本章では、ナドハ、マデハの形式が否定極性を持つB用法に限られるという現象を指摘し、否定極性化には「ハの後接・編入」が必要であることを指摘する。さらに、ダケはB用法を持たないものの、ダケハの形式はB用法に類似すること、否定極性表現シカの成立には通時的に「ハの後接」を経ているとする説があることを確認し、本章での主張を裏付ける。最後に、第2章、第3章で見たA用法とB用法の対立がナドとマデの局所的なものではなく、他のとりたて詞にも見られる一般的な対立であることを示す。

### 4.1 はじめに

否定的特立を表すナド、意外を表すマデ、限定を表すダケは、山田(1936)が副助詞に分類した語である。しかし、山田(1936)が同じ副助詞に分類した語であっても、(1)のようにふるまいに違いが見られるものがある。

- (1)
- a. いくら不良といっても、人殺しナド しないだろう。
  - b. いくら不良といっても、人殺しマデ しないだろう。
  - c. #いくら不良といっても、人殺しダケ しないだろう。

(1ab)のナドやマデは自然であるが、(1c)のダケは不自然である。(1ab)を発した話者は、「不良であっても、人殺しをすることは最もありえない」と考えていると思われ

るが、(1c)はそのような意味で捉えることはできない。ところが興味深いことに、ダケもハを後接させればナド、マデと並行した解釈が可能になる。

(2) いくら不良といっても、人殺しダケハ しないだろう。

(2)を発した話者は、(1ab)同様「不良であっても、人殺しをするということは最もありえない」と考えていると解釈できる。

さて、このような述部との間に何らかの制約が現れる統語的性質は、副助詞の特徴というよりはむしろ係助詞の特徴である。山田 (1936) は、副助詞は用言を副詞的に修飾する要素である一方、係助詞は「一定の陳述」を要求する要素である点が異なるとしている。山田のこの分類においては、副助詞と係助詞はあくまで別の語群に属し、両者の関係は明らかでない。しかし、(1)(2)のふるまいは、副助詞が何らかの形で係助詞と対応関係を持ちつつ存在していることを示唆している。本章の目的は、ナド、マデ、ダケという副助詞を対象とし、否定との「一致」「呼応」「係り結び」(山田 1936 の言う「一定の陳述」の要求)の制約をもつ係助詞との統語的な対応関係を指摘することである。結論を先に述べると、副助詞と係助詞は、無関係に散在しているのではなく、「ハの後接・編入」という操作を通して、統語的に対応関係を持ちつつ存在していることを主張する。

本章の構成は以下の通りである。まず 4.2 節で先行研究を概観する。4.3 節では、前節までのナド、マデの二つの用法について簡単に振り返る。4.4 節では、その二つの用法が「ハの後接・編入」によって対応関係にあることを具体的な現象を通して指摘する。さらに、この節ではその指摘がシカの通時的な変化からも裏付けられることを示す。さらに 4.5 節では、第 2 章から第 4 章までの議論を通して主張してきた内容が、他のとりたて詞にも応用可能な重要な観点であることを指摘する。4.6 節はまとめと課題である。

## 4.2 先行研究

山田自身が副助詞と係助詞が似ていることを指摘しているように、両者の違いは判然としないことがある (詳しくは 1.4 節)。近年では、両者の統語的、意味的共通点を洗い出し、新たな基準で再カテゴライズし、とりたて詞という区分を用いることが多い (奥津 1986、沼田 2009 他)。しかし、これらの語群のとりたて詞としての共通点を捉えることはできても、その内部にどのような体系性があるかについては、未だ議論の分かれ

るところである。例えば、とりたて詞は、個々の要素によってさまざまな統語的階層に位置すると考える研究がある。また、山田 (1936) の分析を再評価し、とりたて詞としての共通性を認めつつも、係助詞と副助詞という分類は必要であるとする研究もある。以下では、これらの分析についてそれぞれ見ていく。

野田 (1995) や茂木 (2001, 2004, 2006)、佐野 (2001, 2007) は、とりたて詞には、統語的階層性があり、それぞれの統語的階層に位置する要素と呼応関係になくってはならないことを指摘している。例えば野田 (1995) によると、例示を表すとりたて詞デモは「事態へのムード」と呼応関係にあるという。(3)のように、デモは述部が単純な過去形では許容されず、「飲もう」のような「事態へのムード」を表す統語的に高い位置にある要素と呼応する必要がある。

(3) お茶でも 飲もう/\*飲んだ。 (野田 1995: 8)

また、茂木 (2001, 2004, 2006) や佐野 (2001, 2007) は、とりたて詞は、「認可子」に相当する要素と一致 (呼応) する必要があるとしている。詳細には先行研究によって違いがあるが、おおよそナド (否定的特立)、マデ、ダケなど、山田 (1936) で副助詞とされた語群は統語的に低い位置に、係助詞とされた語群は統語的に高い位置に認可子を持つとされている。具体的には、おおむね副助詞は語幹や VP などに、係助詞はテンスやモダリティなどの階層に位置すると分析されている (第 1 章 1.3.2 節参照)。

青柳 (2006, 2008) でも、副助詞と係助詞は、認可子の統語的な階層が異なることを指摘している。青柳 (2006) は、副助詞と係助詞の名詞性の違いや焦点の広狭の違いから、副助詞は内容語的要素であり、係助詞は純粋な機能的要素であると仮定している。青柳は、副助詞のみが名詞性を持ち、格助詞が後接可能であると指摘している。本稿が扱うナド、マデ、ダケも青柳 (2006) の言う副助詞にあたり、いずれも名詞性を持ち、格助詞が後接可能である。

- (4) a. 警察 {ナド/マデ/ダケ} が 学校にやって来た。  
b. 警察 {ナド/マデ/ダケ} を 学校に呼んだ。

青柳 (2006, 2008) では、このような違いを副助詞[+F(unctional), +L(exical)], 係助詞[+F, -L]という理論的な統語的素性の対立で捉えている。これらの要素は LF 部門で上昇し、副助詞は同じ素性を共有する軽動詞 *v* と、係助詞は時制辞 *T* と一致すると仮定してい

る。つまり、おおむね統語的に低い[+L]の VP の領域は副助詞が機能する領域であり、TP 以上の[-L]の階層は係助詞の領域ということになる。

以上、先行研究は、とりたて詞という分類を認めつつも、その内部の体系性については複数の提案をしていることを見た。しかし、とりたて詞に複数の統語的階層を仮定する分析にせよ、副助詞と係助詞に二分する分析にせよ、その多様性を指摘したのみで統語的位置どうしの関係について説明したものは見られない。しかし実際には、(1)(2)の現象から分かるように、副助詞と係助詞は単に認可子の位置や素性指定 ([+L]か[-L]か) が異なるだけでなく、何らかの対応関係を持ちつつ存在していることが考えられる。

とりたて詞内部の体系性を捉えるためには、それぞれのとりたて詞が、どのような対応関係のもとで一つのカテゴリをなしているかを考える必要がある。本章では、第2章、第3章で見たナドとマデの A 用法 (副助詞)・B 用法 (係助詞) に対応するふるまいの違いは、ハの後接によって対応関係が自然に捉えられることを指摘する。さらに、ダケ、シカの分析についても、ハの後接という観点を取り入れることで、否定文におけるふるまいを捉えることができることを示す。確かに、(1)(2)で見た対応以外にも、ナド、マデ、ダケの間に詳細な違いはあるかもしれない。3者は異なる語彙項目で意味も違う要素であるので、当然である。しかし、本稿では各語彙の違いを記述することではなく、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞の対応関係を見ることが主眼にしている。以降は、ひとまず3者を副助詞としてのふるまいを見せるものとして、統語的に低い位置 (VP 内) と呼応関係にあると仮定し、一括して捉えておく。

### 4.3 二つのナド、二つのマデ

(1)で示したナド、マデについてはすでに第2章、第3章で論じた。ここでは、その概要を説明しておく。第2章では、否定的特立のナドには否定極性を持つナドと、そうでないナドの二つの用法があることを論じた。その違いは、それぞれ青柳 (2006, 2008) の指摘する副助詞と係助詞の違いに相当することを見た。また、第3章では、ナドと類似した対立がマデにも見られることを指摘した。マデもまた、否定極性を持つ用法とそうでない用法を区別して論じるべきことを指摘し、一形態で副助詞と係助詞の両方の用法を持つと仮定した。このように、一形態で否定極性用法とそうでない用法の統語的性質を持つ語があることは、両者が無関係に散在しているわけではないことを端的に示している。



- (5) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。  
 b. 当然、警察ナド 学校に やって来なかった。
- (6) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やって来た。  
 b. 当然、子どもの喧嘩ごときでは、警察マデ やって来なかった。

(5)(6)のナド、マデは、いずれも、話者の「警察は学校にやって来るものではない／来ないはずだ」という「警察」に対する否定的な評価や想定を示している。しかし、(5a)(6a)は肯定述部と、(5b)(6b)は否定述部と共起しているという違いがある。第2章、第3章にならい、(5a)(6a)のような否定的な評価や想定と述部の肯否が逆転する用法を A 用法(ナド A、マデ A)、(5b)(6b)のように否定的評価や想定が肯否を入れ替えずそのまま述部に現れている用法を B 用法(ナド B、マデ B)と呼ぶ。

A 用法と B 用法は、格助詞の後接に違いがある。青柳 (2006, 2008) は、名詞性のある副助詞のみが格助詞が後接可能であることを指摘しているが、二つのナドのうち、格助詞が後接できるのはナド A のみである。

## ナド

- (7) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来た。  
 b. \*当然、警察ナドが 学校に やって来なかった。
- (8) a. よりにもよって、人望の薄い太郎ナドが 推薦された。  
 b. \*当然、人望の薄い太郎ナドが 推薦されなかった。

## マデ

- (9) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やって来た。  
 b. \*さすがに、子供の喧嘩ごときで、警察マデが やって来なかった。
- (10) a. あきれたことに、無関係の子どもマデが 疑われた。  
 b. \*当然、無関係の子どもマデが 疑われなかった。

また、B 用法のみが、述部に制約があり、そのままでは疑問文にすることができない。このように、述部に制約がある点も係助詞的な性質である。

## ナド

- (11) a. よりにもよって、警察ナドが 学校に やって来たの？  
 b. \*警察ナド 学校に やって来ないの？

- (12) a. よりにもよって、人望の薄い太郎ナドが 推薦されたの？  
 b. \*人望の薄い太郎ナド 推薦されなかったの？

### マデ

- (13) a. 子どもの喧嘩ごときで、警察マデが やってきたの？  
 b. \*子どもの喧嘩ごときで、警察マデ やって来なかったの？
- (14) a. 無関係の子どもマデが 疑われたの？  
 b. \*無関係の子どもマデ 疑われなかったの？

このような二つのナド、マデのふるまいの違いは、A用法が副助詞(素性指定[+F,+L])、B用法が係助詞([+F,-L])とすることで体系的に説明できる。つまり、A用法はそれ自身が否定的な評価の意味を含んだ内容語的(副助詞; +L)要素である一方、B用法は否定的評価の対象と否定的評価の内容が一致するという機能のみ(係助詞; -L)によって否定的評価を表しているということである。前章までは、一形態で副助詞としてだけでなく、係助詞としても働きうるとすることで、格助詞の後接や否定的評価の述部との一致の制約の違いが説明できると指摘した。以上のようなナド、マデに関する指摘は、青柳(2006, 2008)が示す[±L]という副助詞と係助詞の素性指定の対立を体現するものであるといえる。しかし、[+L]の要素と[-L]の要素では何が異なるのだろうか。ナド、マデが一形態で素性の対立を体現していることを見ても、とりたて詞の中に、単に内容語と非内容語が無関係に散在しているとは考えられない。次節では、A用法は「ハの後接」という操作を介して、B用法に対応していることを見ていく。

## 4.4 ハの後接と否定極性

### 4.4.1 ナド、マデとハの後接

寺村(1991: 114)は、マデハという形式について「そんな馬鹿なことを言う者まではいなかった。」という例をあげ、これを「否定の述語とつながることができる」形式であると述べている。詳細な議論はなされていないが、こちらもハの後接と否定極性との関連を示唆する指摘である。興味深いことに、ナド A、マデ A にハを後接させると A 用法としては解釈できなくなる。

### ナド

- (15) \*よりにもよって、子どもの喧嘩ごときで 警察ナドハ 学校にやって来た。

(16) \*よりもよって、人望の薄い太郎ナドハ 推薦された。

#### マデ

(17) \*信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで 警察マデハ 学校にやって来た。

(18) \*あきれたことに、無関係の子どもマデハ 疑われた。

ナドハ、マデハの連なりを自然に解釈するためには、否定辞を加え、「当然」「さすがに」等の副詞と共起させるような解釈にする必要がある。

#### ナド

(19) 当然、子どもの喧嘩ごときで、警察ナドハ 学校にやって来なかった。

(20) さすがに、人望の薄い太郎ナドハ 推薦されなかった。

#### マデ

(21) 当然、子どもの喧嘩ごときで、警察マデハ 学校にやって来なかった。

(22) さすがに、無関係の子どもマデハ 疑われなかった。

これらの例は、ナド B、マデ B の用法と等しい。すなわち、ナド、マデは、ナドハ、マデハの形式にすると、A 用法とは解釈できず、B 用法と同じステータスを持ち、統語的に否定辞との一致を要求するようになるということである。

#### 4.4.2 ダケとハの後接

前節の議論は、否定極性を持たないダケにも通ずる点がある。(23)(24)のように、ナド、マデは B 用法として、否定辞や否定辞を伴ったモダリティ形式と共起しうる (寺村 1991 のいう「否定とつながる解釈」が可能である) のに対し、ダケはそのような用法をもたず、単独では否定辞や否定辞を伴ったモダリティ形式と共起すると不自然になる。

- (23) a. いくら不良といっても、人殺しナド しないだろう。  
b. いくら不良といっても、人殺しマデ しないだろう。  
c. #いくら不良といっても、人殺しダケ しないだろう。 (再掲)
- (24) a. どんなに基準が低くても、人望の薄い太郎ナド 推薦されなかった。  
b. どんなに基準が低くても、人望の薄い太郎マデ 推薦されなかった。  
c. #どんなに基準が低くても、人望の薄い太郎ダケ 推薦されなかった。

(23ab)(24ab)は前節までで見た、ナド、マデの B 用法に等しい。つまり、これらの例文は、ナド、マデは B 用法を持ち、ダケは B 用法を持たないことを示している。しかし、(23c)(24c)のダケも、ハを後接させることでナド B、マデ B と並行した解釈が可能になる。

- (25) a. いくら不良といっても、人殺しナドハ しないだろう。  
b. いくら不良といっても、人殺しマデハ しないだろう。  
c. いくら不良といっても、人殺しダケハ しないだろう。
- (26) a. どんなに基準が低くても、人望の薄い太郎ナドハ 推薦されなかった。  
b. どんなに基準が低くても、人望の薄い太郎マデハ 推薦されなかった。  
c. どんなに基準が低くても、人望の薄い太郎ダケハ 推薦されなかった。

つまり、B 用法を持たないダケであっても、ダケハの形を用いることでナド B、マデ B と同様の B 用法的にふるまうことが可能になるのである。

ここで、ナド、マデについても、ナドハ、マデハの形式を用いると必ず否定との一致を要求していたことと関連させて考える。すると、ナド、マデ、ダケは、ハを後接させることで係助詞と同様の統語的ステータスを得ると考えることができる。一方、ナド、マデにとっては、ハは必須ではなく、ナド B、マデ B として単独で係助詞としてふるまうことができる。このように、A 用法から、ハを後接させた形と同じくふるまうように統語的なステータスを変化させ B 用法になることを、便宜上「ハの編入」と呼んでおく<sup>1</sup>。こうすることで、ナド、マデはハを編入した B 用法を持つ一方、ダケはハを編入した B 用法を持たないため、ハを後接させることによるのみ係助詞的にふるまうことができると思うことができる。以上の観察をまとめると、次の(27)のようになる。

---

<sup>1</sup> ここでのハの編入とは、形態的・音声的にハが取り込まれたということの意味しているのではなく、ナド、マデが単独で統語的にハを後接させた形式で同じくふるまうようになる変化のことを指している。ただし、後述する「ナンゾ→ナンゾハ→ナンザ」のように、音声的にも編入しているとりたて詞もある。

- (27) a. ナド、マデは、一致を持たない A 用法と、否定辞と一致する B 用法をつ。  
ナドハ、マデハのようにハを後接させると B 用法と同様にふるまう。
- b. ダケは、一致を持たない A 用法は持つが、否定辞と一致する B 用法は持たない。しかしダケハのようにハを後接させると、B 用法と同様にふるまうことができる。

#### 4.4.3 更なる裏付け—シカの成立—

前節までの「ハの後接・編入による係助詞化」という分析は、係助詞の通時的研究からも裏付けられる。本節では、宮地 (2007, 2010) で指摘されている<其他否定>の係助詞の成立を見る。

<其他否定>の係助詞とは、現代語のシカに代表される、否定と呼応する限定の助詞である。シカの通時的成立に関しては確固とした通時的資料が残っていないものの、松下 (1928, 1930) はシカの原型は「シキ+ハ」だと推測している。さらに、宮地 (2007, 2010) は、シカ以外の<其他否定>の係助詞 (ヨリ、ホカ等) を参考に、これらの助詞が否定と呼応するようになるには、本来否定極性のない助詞にハ (または他の係助詞) が後接する形式が仲介したことを指摘している。

- (28) さいおんし三条はうもんもろちかより外は人なし。  
(とはずがたり・二) (宮地 2007: 51)
- (29) にくげなき此のしやれかうべあなかしこ目出度かしくこれよりはなし  
(一休咄 (二) 四 (1668)) (宮地 2007: 54)

(28)はホカに、(29)はヨリにハが後接し、さらに否定と呼応している例である。このように、通時的にもハを後接させることで本来否定極性を持たない要素が統語的ステータスを変化させる例があることが指摘されている。これはまさに前節までの「ハの後接・編入」という操作を、通時的にも裏付けるものである。

これまで4.4節では、副助詞と係助詞が「ハの後接・編入」という操作を通すことで、対応関係が捉えられることを指摘し、さらに、本稿の指摘が通時的にも裏付けられることを見た。本稿のここまでの指摘をまとめると、次の表1のようになる。

	統語的特徴	とりたて詞の形式			
副助詞	[+L] 述部の制約なし	ナド A	マデ A	ダケ	—
係助詞	[-L] 否定辞と呼応	ナドハ	マデハ	ダケハ	(シカ原型+ ハ?)
		ナド B	マデ B	—	シカ

表 1：ナド、マデ、ダケ、シカとハの後接

本稿で B 用法と呼ぶナド、マデの解釈は、先行研究では否定とナド、マデのスコープ関係によって捉えられてきた (沼田 2009、茂木 1999, 2004、佐野 2007 他)。沼田 (2009) と茂木 (2004) はそれぞれ、本稿でいうナド B、マデ B の「幸ちゃんなど遊ばない」「親にまで打ち明けなかった」という文は、否定辞とのスコープ関係が次のようになっていると指摘している。

(30) [幸ちゃんなど 遊ば]ない。 (沼田 2009: 240)

(31) [親にまで 打ち明け]なかった。 (茂木 2004 の言う「N(arrow) スコープ」)

ここで一旦、ここまで見てきたとりたて詞に後接するハの性質について考える。ここで見てきたハは、主題のハではなく、対比のハであると考えられる。主題のハは、連体修飾節内に収まることができないが、対比のハは収まるという違いがある (沼田 1986 他)。次に見るように、とりたて詞に後接するハは連体文内性を持つことから、対比のハであると判断できる。

(32) a. [暴力団ナドハ いない]町 (を作ろう。)

b. [全国大会にマデハ いけなかった]部員 (もよく頑張った。)

もし、否定ととりたて詞のスコープ関係にインタラクションがあるだけであるなら、なぜハが後接することで否定を要求するようになるのかが説明できない。そもそも、対比のハが後接したからといって、必ずしも否定を要求するわけではないためである。

(33) 太郎は、学生ハ {殴った／殴らなかった}。(でも {花子は殴らなかった／殴った。})

よって、ナドハ (ナド B)、マデハ (マデ B) は、対比のハを後接・編入させることで統語的なステータスの変化が起きたと考える必要がある。

対比のハと否定辞の共起の問題を保留にして、「副助詞に後接した対比のハは、否定より狭いスコープをとる」という新たな仮説を立て、ナドハ、マデハは否定より狭いスコープをとっていると主張することも可能である。しかし、この仮定に立っても、ダケハは「否定>ダケ」のスコープになっているわけではないので、うまくいかない。

(34) いくら不良といっても、人殺しダケハ しないだろう。

(35) どんなに基準が低くても、人望の薄い太郎ダケハ 推薦されなかった。

(34)(35)は、ダケにハが後接している例である。この例を、「否定>ダケ」で解釈すると、「人殺しだけをするのではなく、他の犯罪も犯すだろう」「人望の薄い太郎だけでなく、他の人間も推薦された」というものになる。これは明らかに(34)(35)の意味とはかけ離れている。よって、上記の仮説を立てることも適切ではない。

また、なぜ否定が広いスコープをとるときだけ格助詞が後接可能であり、否定が狭いスコープをとるときは後接不可能になるのかを説明することができない。一方で、ナドやマデを否定のスコープではなく、A用法とB用法に分け、表1のように仮定すると、その点を副助詞と係助詞の名詞性の違いで説明できるため、無理なく捉えることが可能である。

以上から、「副助詞にハが付加した場合」は何か特別な統語的ステータスの変化が起きていると考えるべきことが分かる。この仮説の下であれば、ナド、マデ、ダケの3者の並行性と相違点を自然に捉えることができる。

#### 4.5 他のとりにたて詞への拡張

ここまで、第2章、第3章を通じて、否定的評価を表すとりたて詞ナドや意外を表すマデは、形態は一つでありながら述部の肯否の対立に応じた統語的特徴の異なる二つの用法を持つことを指摘してきた。さらに、第4章では、A用法とB用法が、「ハの後接・編入」を通して対応関係にあることを見た。最後に、この節ではナド、マデに見られた

A用法/B用法の対立が、他のとりたて詞の分析にも不可欠な観点であることを指摘しておく。また、これらの対立も、B用法のみがハの後接を許すという第4章での観察と並行した現象を見せることを指摘する。

#### 4.5.1 評価を表すとりたて詞—ナンカ、トカ、ナンゾ (ナンザ)、ナンテ—

評価の意味を持つとりたて詞の中には、ナド、マデと同じように A用法/B用法の対立を持つものが見られる。以下に挙げるのはナンカ、トカ、ナンゾの例である。沼田(2009)では、ナンカ、トカ、ナンゾがとりたて詞としての二次的特徴に「評価」を含むことを指摘している。

- (36) a. パーティに 太郎ナンカ {が/?? $\phi$ } やって来た。  
b. パーティに 太郎ナンカ {\*が/ $\phi$ } やって来ないよ。
- (37) a. (彼女、お酒は苦手と言っていたのに) 昨日は、ウォッカトカ {を/ $\phi$ } 飲んでいた。  
b. (彼女、お酒は苦手と言っていたから) ウォッカトカ {\*を/ $\phi$ } 飲まないよ。
- (38) a. 昨日行ったレストランの料理には、髪の毛ナンゾ {が/\* $\phi$ } 入っていた。  
b. 当然、昨日行ったレストランの料理に、髪の毛ナンゾ {\*が/ $\phi$ } 入っていなかった。

ナンテやトカは口語的な表現と相性が良いからか、A用法でも格助詞の脱落を好む傾向があるようだが、それでもやはり B用法のときに格助詞の後接を許さない。また、4.3節で、B用法はそのままでは Yes-No 疑問文にならないことを確認したが ((11)-(14))、それと同じことが(36)-(38)にも当てはまる。

- (39) a. パーティに 太郎ナンカが やって来たの？  
b. \*パーティに 太郎ナンカ やって来ないの？
- (40) a. (彼女、お酒は苦手と言っていたのに) ウォッカトカを 飲むの？  
b. \*(彼女はいつも、お酒は苦手と言っていたから) ウォッカトカ 飲まないの？



- (41)<sup>2</sup> a. 昨日行ったレストランの料理に 髪の毛ナンゾが 入っていたの？  
 b. \*昨日行ったレストランの料理に 髪の毛ナンゾ 入っていなかったの？

(39)-(41)の用例が疑問文になるためには、(42)-(44)のように「～と思うの?」「～と思っているの?」等、「～と」によって、引用部が聞き手の心的な表現であることを明示するか、話者自身の評価を相手に確認する「～よね?」による疑問文にしなくてはならない。

- (42) a. 「パーティに 太郎ナンカ やって来ない」と思うの？  
 b. パーティに 太郎ナンカ 来ないよね？  
 (43) a. (彼女はいつも、お酒は苦手と言っていたから)「ウォッカトカ 飲まない」と思っているの？  
 b. (彼女はいつも、お酒は苦手と言っていたから) ウォッカトカ 飲まないよね？  
 (44) a. 「料理に 髪の毛ナンゾ 入っていない」と思っているの？  
 b. 料理に 髪の毛ナンゾ 入っていないよね？

4.3 節で論じたように、ナド、マデは、ハを後接した場合必ず B 用法として用いる必要がある。この点についても、これまでの観察と同様で A 用法のナンカ、トカ、ナンゾは、ハを後接することができない。

- (45) a. \*パーティに 太郎ナンカハ やって来た。  
 b. パーティに 太郎ナンカハ やって来ないよ。  
 (46) a. \*(彼女、お酒は苦手と言っていたのに、) 昨日、ウォッカトカハ 飲んでいた。  
 b. (彼女はいつも、お酒は苦手と言っていたから、) ウォッカトカハ 飲まないよ。  
 (47) a. \*昨日行ったレストランの料理に 髪の毛ナンゾハ 入っていた。  
 b. 昨日行ったレストランの料理に 髪の毛ナンゾハ 入っていなかった。

---

<sup>2</sup> ナンゾは文語的性格が強いため、口語的な「～の?」と共に用いると不自然に感じられるが、ここでは文語的、口語的性格による不自然さは加味しないこととする。

以上のように、他のとりたて詞に関してもナドやマデと同様の現象が見られることが確認できた。一方で、B用法しか持たないと思われる評価系のとりたて詞もある。例えば次の(48)に挙げるナンテはB用法しか持たない。

- (48) a. \*よりもよって、学校に 警察ナンテが やって来た。  
b. 学校に 警察ナンテ やって来なかった。

さらに、ナンゾは、B用法の異形態ナンザを持つ。ナンザは、「ナンゾ+ハ」が「ナンザア」と変化しナンゾになったものと考えられ、B用法としてしか用いることができない。このことも、本稿の主張を指示している (cf. 日本国語大辞典 第二版)<sup>3</sup>。

- (49) a. \*花子は、自分のことは後回しにして、他人の面倒ナンザを 見ていた。  
b. 花子は、自分のことが最優先で、他人の面倒ナンザ 見なかった。

そしてやはり、ナンテは疑問文になることができず、「～と思っているの？」や「～よね？」等の表現と共に用いなくてはならない。

- (50) \*学校に 警察ナンテ やって来なかったの？  
(51) \*花子は、自分のことが最優先で、他人の面倒ナンザ 見ないの？  
(52) a. 「学校に 警察ナンテ やって来ない」と思っているの？  
b. 学校に 警察ナンテ やって来ないよね？  
(53) a. 「花子は他人の面倒ナンザ見ない」と思っているの？  
b. 花子は他人の面倒ナンザ見ないよね？

---

<sup>3</sup> 『日本国語大辞典第二版』には、ナンゾにハが後接し、変化してナンザ (ア) になった例として、次のようなものが上がっている。

(i) つみぞナニサ咄なんざあした事アごぜんせん

(「洒落本・世説新語茶」1776-77 か)

#### 4.5.2 意外を表すとりたて詞—モ、サエ—

前節で見た現象とは異なり、似たような意味を表しているように思われても A 用法／B 用法の対立を持たないとりたて詞もある。マデは意外を表すとりたて詞であるが、同様に意外を表すとされるサエやモは、A 用法しか持たない。

- (54) a. 信じられないことに、警察モ 学校に やって来た。  
b. \*当然、警察モ 学校に やって来なかった。<sup>4</sup>  
cf. 当然、「警察モ学校にやって来る」なんてことはなかった。
- (55) a. 信じられないことに、警察サエ 学校に やって来た。  
b. \*当然、警察サエ 学校に やって来なかった。  
cf. 当然、「警察サエ学校にやって来る」なんてことはなかった。

これまでの A 用法／B 用法の対立を持つとりたて詞は、ハを後接すると、B 用法に限られるという特徴を持っていた。一方、サエとモは、そもそもハを後接させる形式を許さない。

- (56) \*サエハ／\*モハ

サエについて興味深いことは、ハを後接することができず、むしろモのみが後接可能であるという点である。また、A 用法のマデもハは後接できないが、モは後接可能であるという特徴がある<sup>5</sup>。

- (57) 信じられないことに、警察サエ {\*ハ／モ} 学校に やって来た。  
(58) 信じられないことに、警察マデ {\*ハ／モ} 学校に やって来た。

---

<sup>4</sup> モには、「意外」の用法以外にも、「累加」の用法がある。ここでは、「累加」のモは扱わない。これらの違いについては、沼田 (1986, 2009) 参照。

<sup>5</sup> この点については、第 3 章 3.3 節でも論じている。

本稿ではこれまで、A 用法／B 用法の対立とハの後接に注目して分析を進めてきた。サエやモの現象は、肯否の対立という観点から、ハの後接だけでなくモの後接についてもさらに拡張できることを示唆している。モの後接と否定極性については、第 6 章で一部論じる。

以上のように、本稿で示した A 用法、B 用法の区別はナド、マデに限らず他の形式においても重要であることが分かる。今までこれらの助詞はこのような区別抜きに扱われることが多かった。例えば佐野 (2009: 349) では、係助詞・副助詞という違いではなく名詞性の有無が「とりたて詞が絡む文法現象を分類記述するだけでなく、他の文法原理とも連動する体系的な説明を与えることを可能にする」としている。しかし、佐野はまた、ナンカを「格助詞が後接できるため副助詞」としており、(36)に挙げたような二つのナンカの違いを区別していない。ナンカには(36a)のように格助詞の後接を許し名詞性がある場合と(36b)のように格助詞の後接を許さず名詞性がない場合があることから、その用法を区別したうえでナンカに名詞性があるかどうかを議論する必要がある。また、A 用法／B 用法と「ハの後接・編入」という観点から、他のとりたて詞に適用可能なだけでなく、「モの後接」にも援用可能なものであることを示した。もちろん、個々のとりたて詞の特徴を詳しくみれば、それぞれ異なったふるまいを見せる側面もある。しかし、本稿が指摘した A 用法、B 用法の違いを混同したままそれぞれのとりたて詞の詳細な記述に入るとは、記述の混乱を招くおそれがある。ここではこれ以上個々のとりたて詞について議論することはしないが、とりたて詞の名詞性について議論する際に本稿で述べたような区別は不可欠であると思われる。

## 4.6 第 4 章のまとめと課題

### 4.6.1 まとめ

以上、本章ではナド、マデ、ダケが「ハの後接・編入」を経て、副助詞と係助詞で対応関係を持つことを論じた。このように「ハの後接・編入」という操作を仮定することで、ナド、マデの対立だけでなく、ダケとダケハとの並行性も捉えることができることを示した。さらに、本章では、シカの先行研究の指摘を通してこの操作が通時的にも裏付けられることを指摘した。最後に、「ハの後接・編入」による副助詞と係助詞の対応がナド、マデ、ダケに限らず、他のとりたて詞の観察のうえでも重要であることを示した。

#### 4.6.2 課題—とりたて詞の個別の特徴について—

第4章の締めくくりとして、ここまでの議論の課題を述べておく。本章は、ナド、マデ、ダケを一括して扱い、ハが後接したときの共通性を捉えることを目的として現象を観察した。このように、これまでのところ個別のとりたて詞の違いについては、詳細を捨象し A 用法/B 用法の対立に焦点を絞って議論してきた。しかし、当然のことながら、これらの3者は語彙項目が異なるのであって、個別の特徴を有する。そこで、最後に、それぞれのとりたて詞の語彙的特徴について記述しておく。観察する現象は、格助詞の後接に関するものと焦点の拡張に関するものである。

まず、格助詞の後接について見ていく。山田 (1936) や青柳 (2006, 2008)、宮地 (2007) は、係助詞と副助詞を区別する根拠の一つとして副助詞のみが格助詞が後接可能であるという現象を挙げている。本稿でも、格助詞の後接は A 用法と B 用法を分ける統語的特徴の一つとなっている。実際、ここで観察したナド A、マデ A、ダケは、いずれも山田 (1936) が副助詞として扱った語群であり、格助詞が後接可能である。

(59) 警察 {ナド/マデ/ダケ} が 学校にやって来た。

しかし、格助詞の承接に関して、常に3者が並行したふるまいを見せるわけではない。例えば、格助詞の脱落について3者には違いがある。ナド A は格助詞が後接しなければ座りが悪くなるが、マデ A、ダケは格助詞が後接せずとも自然な文として成立する。

(60) 警察 {??ナド/マデ/ダケ}  $\phi$  学校にやって来た。

また、格助詞の中でも意味格の場合はさらに複雑である。ナドは意味格の後接を許すが、マデは許さない。ダケは、意味格が前接した場合と後接した場合とで意味が異なる (森田 1972、久野・モネーン 1983、久野 1999、沼田 2009 等)。

(61) よりにもよって、花子は、安物の自転車 {ナドで/??でナド} 東京まで通っていた。

(62) 信じられないことに、花子は、素手 {??マデで/でマデ} 地面を掘り続けた。

(63) 太郎は、右手 {ダケで/でダケ} リンゴを握りつぶせる。

(63)の「ダケで」の場合は、「片手でリンゴを握りつぶせる」という意味だが、「でダケ」の場合は「リンゴを握りつぶせるのは右手だけであって、左手では握りつぶせない」という意味になる。久野・モネーン (1983)、久野 (1999) では、(63)のように「ダケで」の場合は動詞句修飾である一方、「でダケ」の場合は文修飾であると指摘している。久野・モネーン (1983) は、他にも、ノミ、バカリ、クライ等にこのような意味格との前後接による意味の違いがあるとしているが、そもそもどのようなとりたて詞が意味格に前後接可能で、意味が異なるのかについては明らかになっていない。

また、焦点の拡張についても個別の違いが見られる。青柳 (2006) では、係助詞のみが主語から vP までに焦点を拡張することができるとしている。例えば、対比のハは、主語についても焦点を拡張させて vP までを焦点として解釈することができる (詳細は、第 1 章 1.4 節参照)。

- (64) 今回の事件は、白昼堂々、しかも人ごみで起こったのだから…
- a. 誰かが 犯人を 目撃しては いる はずだ。
  - b. 誰かが 犯人は 目撃して いる はずだ。
  - c. 誰かは 犯人を 目撃して いる はずだ。 (青柳 2006: 127)

第 2 章では、ナド B についても同じような焦点の拡張が見られることを指摘した。しかし、マデ B については、ナド B ほどは自然に焦点を拡張して解釈することができないようである。

- (65) a. 当然、あんなところで [誰かが 走り]ナド するはずがない。  
 b. 当然、あんなところで [誰か ナド 走る] はずがない。
- (66) a. 当然、あんなところで [誰かが 走り]マデ するはずがない。  
 b. ??当然、あんなところで [誰か マデ 走る] はずがない。

また、本稿の B 用法に限らず、他の係助詞でも対比のハのように焦点の拡張できないものがあるようである。青柳 (2008) では、係助詞としているモについて、(67c)については主語からの焦点拡張の判定を許さない話者がいることを指摘している。

- (67) 昨日のパーティでは、花子がダンスを踊っただけでなく…
- a. 太郎が ピアノを 弾きも した。

b. 太郎が ピアノも 弾いた。

c. 太郎も ピアノを 弾いた。

(青柳 2008: 47)

このような、とりたて詞がマークしている位置と焦点範囲のずれについては、Kuroda (1965) 以来様々な提案がなされており、青柳 (2006, 2008) では、Kuroda (1965) の添加変形による分析を再解釈し、焦点の拡張を LF での素性一致のための移動によるものと分析している。他にも、Kotani (2009) では、分散形態論の枠組みを用い、とりたて詞は句レベルにのみ付加し、形態的派生の段階で文中の要素に付加するとしているが、統一した見解には至っていない。また、記述的な一般化のレベルでも揺れがある。沼田 (2009) は、とりたて詞が目的語や主語から焦点を拡張する場合、焦点の先頭要素を表示していると述べている。この指摘は、青柳 (2006, 2008) の指摘する目的語からの主語や動詞を含む  $vP$  レベルまでの焦点の拡張 ((67b)) を予測しない。これは、 $vP$  を焦点にとる場合の先頭要素は主語であり、沼田の指摘に則れば、 $vP$  を焦点にとることができるとりたて詞の付加位置は、主語か動詞句末に限られるためである。沼田 (2009) の指摘するように、焦点の拡張は多分に文脈に依存し、語用論的要因が含まれている。焦点の拡張についての分析には、多層的なアプローチが不可欠である。ここでのナドとマデの焦点の拡張の許容度の違いについても、詳細な分析は今後の課題としておく。

このように、個々に見ていくと、 $[\pm L]$  というシンプルな素性によって区分されたとりたて詞であっても、その内実は複雑であり、当然のことながら、この素性だけでは切り取れない個別の特徴が数多くある。本稿ではこれまで、A 用法の場合は格助詞の後接が可能で、B 用法の時は不可能であるという一般化を中心に、A 用法/B 用法の対立を捉えてきた。本節では最後に課題として、A 用法/B 用法それぞれの用法の内にも多様性があることを見た。本稿の段階では、これらが何に起因するものなのかまだ十分に議論できていない。これらを個別に議論することは今後の課題となるが、いずれにせよ、A 用法/B 用法を分けずに格助詞の前後接や焦点の拡張の問題を扱うことはできず、個別の特徴があること自体は、本稿の主張を揺るがすものではない。

## 第5章 否定極性表現と非否定極性表現の対立 — 定性効果から見たダケ、シカの前提集合 —

第2章から第4章では、とりたて詞の中の肯否の対立として、ナド、マデ、ダケ、シカという4形式を中心に、とりたて詞の否定極性の有無が「ハの後接・編入」という操作を介して対応関係にあることを指摘した。ここまでの議論は、序章で立てた目的の前半部分(序章0.1節(5a))に対応するものである。

第5章、第6章は、おおむね本稿の目的の後半部分に対応している。特に第5章では、否定極性表現と非否定極性表現の意味的特徴の比較を行う。特にダケとシカの意味の違いを一般的な概念で捉え直すことを試みる。定性効果があると言われる所有文や絶対存在文のガ格名詞句の位置に、ダケは現れることができないがシカは問題なく現れることに注目し、ダケは前提集合を持つ強決定詞としてふるまう一方、シカは前提集合を持たない弱決定詞としてふるまうことを指摘する。さらに、この指摘は、否定極性表現である誰モと、非否定極性表現である誰モに格助詞が後接した形(誰モガ)の対立にも援用可能であることを示す。つまり、否定極性表現と非否定極性表現は、意味的には前提集合の有無という点が異なっていることになる。

### 5.1 はじめに

とりたて詞ダケ、シカは、いずれも限定を表すとりたて詞とされるが、一方は否定極性を持ち、一方は否定極性を持たない。

- (1) a. 学校に 花子ダケが {来た／来なかった}。  
b. 学校に 花子シカ {\*来た／来なかった}。

両者は単に極性の有無が異なっているのではない。(2)(3)に見るように、ダケとシカは生起できる環境にも違いがある。



- (2) 日本の平均的な家族構成では、
- a. 1人の子どもに、1人の兄弟シカ いない。
  - b. \*1人の子どもに、1人の兄弟ダケが いる。
- (3) a. 人間とチンパンジーの間には、僅かな遺伝子の違いシカ ない。
- b. \*人間とチンパンジーの間には、僅かな遺伝子の違いダケが ある。

(2a)(3a)のシカの文は、問題なく許容されるが、(2b)(3b)のダケの文は許容できない。

(2)(3)は、所有文や絶対存在文と呼ばれる文である。これらの文のガ格には、定的な表現が出てくることができない、いわゆる「定性効果」があることが指摘されている (飯田 2002、岸本 2005、西山 2013 他)。本稿は、このような定性効果のある環境を中心に、ダケとシカの文法性の違いを指摘し、その意味を記述することを目的とする。先に結論を述べておくと、ダケは前提集合を持ち強決定詞的にふるまう一方、シカは前提集合が必要でなく、弱決定詞的にふるまうことを指摘する。

本稿の構成は以下の通りである。5.2 節では、先行研究を概観し、その問題点を指摘する。5.3 節、5.4 節では、具体的な現象の観察を行い、ダケは強決定詞的に、シカは弱決定詞的にふるまうことを指摘する。5.5 節では、ダケとシカに類似した対立が、否定極性表現である誰モと非否定極性表現「誰モガ」の対立にも見られることを指摘する。5.6 節は、まとめと課題を述べる。

## 5.2 先行研究

ダケとシカの違いは、とりたてて詞の分析の中でも特に蓄積の多い分野である。しかし、先行研究の分析は、ダケとシカの意味の違いを個別の現象として記述的に捉えているのみで、より一般的な概念で両者の違いを捉えるには至っておらず、(2)(3)の定性効果の違いを説明できる概念は提示されていない。

ダケとシカの違いとして、多くの指摘があるのは、久野 (1999) に代表される「視点の制約」である (森田 1980、寺村 1991、久野 1999、Yoshimura 2007、沼田 2009 他)。久野の指摘は、(4)のようにまとめられる。

- (4) a. 「X ダケ」構文は、その肯定的陳述を主陳述とし、否定的陳述を第二陳述とする。  
 b. 「X シカ」構文は、その否定的陳述を主陳述とし、肯定的陳述を第二陳述とする。

具体的な例で見えていくと、(5ab)はいずれも「太郎が生き残った」という肯定的陳述と「太郎以外は生き残らなかった」という否定的陳述の両方を表している点では共通している。

- (5) a. 太郎ダケが 生き残った。  
 b. 太郎シカ 生き残らなかった。

しかし、久野 (1999) は、ダケは「太郎が生き残った」という肯定的陳述を主陳述としている一方、シカは「太郎以外は生き残らなかった」という「太郎以外」の人物についての否定的陳述が主陳述であるとする。「視点の制約」やそれに基づく分析は、ダケとシカが、主陳述と第二陳述が逆転する以外は等価であることを示している。主陳述と第二陳述とは、より一般的な意味論の概念として、どのようなものに対応するのかは明らかでないが (cf. Kato 1985、Yoshimura 2007)、ダケとシカで主陳述と第二陳述が逆転するだけなのであれば、(2)(3)に示したような環境での文法性の違いがなぜあるのかを捉えることはできない。

より一般的な概念で形式的にダケとシカの意味を捉えようとする先行研究としては、Kato (1985)、衣畑 (2007)、Kinuhata (2010) 等があげられる。これらの先行研究は、ダケとシカで全く同じ意味を表すと仮定している。Kato (1985) を例に挙げると、ダケにもシカにも全く同じ(6)の意味を仮定している。

- (6) Presupposition:  $\alpha \in \lambda xf(x)$   
 Assertion:  $\neg \exists_{x \neq \alpha} x \in \lambda xf(x)$  (Kato 1985: 96)

しかし、ダケとシカの意味論的な等価性を指摘するだけでは、視点の制約と同じで(2)(3)の文法性の違いを捉えることはできない。

管見の限り、先行研究で(2)(3)のような文の文法性の違いに言及したものはない。(2)(3)のような構文は、所有文や絶対存在文と呼ばれる文で、「定性効果」が現れることが指摘されている。定性効果とは、英語の there 構文の内項位置に代表されるような、

定名詞が現れない環境のことを指す。

(7) There is {a book / \*the book} on the table.

数量詞には、many、some、no 等の弱決定詞と、the、all、both 等の強決定詞がある。前者は、前提となる母集合がなくても用いることができるが、後者は、前提となる母集合がなくては用いることができない比率的な意味を表すものである。Milsark (1974) は、英語の there 構文には、弱決定詞的な数量詞は現れるが、強決定詞的な数量詞は現れない、つまり、定性効果が現れることを指摘している。

(8) a. \*There are {all dogs / both dogs} in the room. (Milsark 1974: 195)  
b. There are {some dogs / many dogs} in the room.

日本語の所有文や絶対存在文も、英語の there 構文と類似した現象を見せる。これらの構文のガ格には、「ほとんど」「すべて」などの前提となる母集合が必要な数量詞は現れることができない (飯田 2002、岸本 2005、西山 2013 他)。

(9) a. \*ジョンには、(その){ほとんどの / すべての} 兄弟がいる。  
b. ジョンには、{たくさんの / 何人かの / 三人の} 兄弟がいる。  
(岸本 2005: 177)

ここから推察するに、(2)(3)の文法性の違いを捉えるためには、ダケとシカを用いるために前提となる母集合の有無を論じる必要がある。先行研究では、ダケやシカは、「ある前提のもとに形成される集合 (以下、前提集合) の中から当該の要素を選び出し、同時に、他の要素を非該当要素として否定する」(安部 1999: 34) ことによって限定を表すと考えられてきた<sup>1</sup>。つまり、先行研究は、ダケやシカにおける限定には前提集合があ

---

<sup>1</sup> 本稿でも、先行研究にならい、限定を行う前提となる母集合のことを「前提集合」を呼ぶことにする。ここで用いる前提集合とは、Kato (1985) が指摘するダケやシカが用いられた文の“presupposition-assertion”のpresupposition (前提) とは別のものである。Kato 等の用いるpresupposition とは、ある文が用いられた際の旧情報のことである。一方、本稿が扱う「前提集合」とは、限定を行う対象となる要素の集合のことを指しており、本稿では、これを区別するために、文レベルの旧情報については、presupposition と表記することとする。ダケ、シカの

るという仮定のもとに議論しており、前提集合の有無について特段注意が払われてこなかったと言える。しかし、本稿では、ダケやシカは、そもそも限定を表すための前提集合を持つか否かに違いがあり、それが(2)(3)の文法性の違いを生んでいるものとする。

加えて、先行研究のアプローチはいずれもダケとシカが否定極性表現と非否定極性表現の対立であることには無関心なままにダケとシカの比較を試みているという問題点がある。一方で、本稿の前提集合の有無が異なるという提案は、否定極性表現と非否定極性表現に一般的に見られる違いである。このことについては、5.5 節で触れることにする。次節では、具体的な現象観察を通して、ダケやシカの前提集合の有無について見ていく。

### 5.3 ダケとシカの前提集合

前節で指摘したように、先行研究は、「ダケやシカは、前提集合から当該要素を選び出すことで限定を表す」という仮定のもとに成り立っていた。しかし、次の現象から分かるように、ダケについては前提集合の存在が必須であるが、シカについては必ずしも前提集合を仮定する必要がない。

(10) 散歩先の公園のベンチに、なんとなく座っていた。

3 時間座っていたところ…

- a. 太郎シカ 来なかった。
- b. \*太郎ダケが {来た／来なかった}。

(11) いつもの公園で、太郎と次郎と三郎を待っていた。

3 時間待っていたところ…

- a. 太郎シカ 来なかった。
- b. 太郎ダケが {来た／来なかった}。

(10)は、「なんとなく座っていた」という文脈からも分かるように、「公園に来る人」の前提集合を持たない文脈である。そのような文脈においては、(10a)のシカは許容されるが、(10b)のダケは許容できない。一方、(11)は、「太郎と次郎と三郎」という「公園に来

---

presupposition の詳しい議論については、Kato (1985)、Yoshimura (2007)、片岡 (2008) を参照。

る人」の具体的な前提集合を持つ文脈である。その場合、ダケもシカも問題なく許容される。つまり、ダケは「談話によって導入された前提集合のうち、当該の要素を選び出し、他の要素を否定する」ことによって限定を表しているが、シカは、「単に当該の要素以外の要素が存在しないことを示す」ことで限定を表しており、前提集合は必要ではないと言える。

#### 5.4 定性効果とダケ・シカ

5.3 節の観察を受け、(2)(3) ((12)(13)として再掲) の文法性について、より詳しく見ていきたい。

(12) 日本の平均的な家族構成では、

a. 1人の子どもに、1人の兄弟シカ いない。

b. \*1人の子どもに、1人の兄弟ダケが いる。 (再掲)

(13) a. 人間とチンパンジーの間には、僅かな遺伝子の違いシカ ない。

b. \*人間とチンパンジーの間には、僅かな遺伝子の違いダケが ある。 (再掲)

(12)(13)は、飯田 (2002)、西山 (2003, 2013)、岸本 (2005) 等が絶対存在文や所有文と呼ぶ構文と同じ形式をしている。以下では、これらの構文のガ格名詞句に現れる「定性効果」と呼ばれる特徴を確認し、ここでのダケとシカのふるまいの違いも、前提集合の有無によって捉え得ることを示す。

##### 5.4.1 所有文、絶対存在文のガ格名詞句の特徴

飯田 (2002)、岸本 (2005)、西山 (2013) 他は、所有文、絶対存在文と呼ばれる構文のガ格名詞句には定性効果が現れることを指摘している。岸本 (2005) は、所有文や所有関係の発生を表す非対格自動詞 (ある、いる、生まれる等) は、所有者をニ格名詞句にとり、所有物をガ格名詞句にとることを指摘している。そして、所有文のガ格名詞句には、「ほとんど」「すべて」などの、前提となる母集合を必要とする強決定詞的な数量詞

が現れないとする<sup>2</sup>。

(14) 所有文

- a. \*ジョンには、(その){ほとんどの/すべての} 兄弟がいる。
- b. ジョンには、{たかさんの/何人かの/三人の} 兄弟がいる。

(岸本 2005: 177、再掲)

(15) 所有関係の発生を表す非対格自動詞文

- a. \*ジョンには、(この){すべての/両方の} 子供が生まれた。
- b. ジョンには、{二人の/たかさんの} 子供が生まれた。 (岸本 2005: 247)

本稿の目的からすれば、これらの構文の特徴を確認できれば十分であり、所有文の統語的構造に深く立ち入る必要はないが、岸本 (2005) では、Belletti (1988) にならい、there 構文や所有文の内項に定性効果が現れるのは、部分格 (partitive case) が与えられるためであるとしている。

また、西山 (2013) は、絶対存在文のガ格名詞句にも所有文と同様の現象があることを指摘している。絶対存在文とは、場所存在文と構文的に類似したものであるが、西山 (2003)は両者を次の(16)のように定義づけて区別する。

- (16) a. 場所存在文「L に、A がある/いる」は、名詞句 A によって指示された対象について、場所 L における存在・非存在を問題にする。
- b. 絶対存在文「A がある/いる」は、名詞句 A が変項名詞句であり、その変項を埋める値の存在・非存在を問題にする。 (西山 2003: 404)
- (17) 机の上に 本が ある。 (場所存在文、西山 2003: 395)
- (18) 君たちのなかに 陽子を殺した人が いる。 (絶対存在文、西山 2003: 402)

(17)のニ格は、「机の上」という具体的な場所空間を表している一方、(18)のニ格名詞句である「君たちのなか」は、場所空間ではなく、「陽子を殺した人」という変項名詞句

---

<sup>2</sup> ただし、「個体の数」ではなく、「属性 (種類)」を指定する場合の強決定詞は、「偽の定表現 (false definiteness)」 (Ward and Birner 1995) と呼ばれ、これらの構文中に現れ得る。

- (i) ジョンには両方のタイプの親戚がいる。 (岸本 2005: 177)
- (ii) There are all sorts of other false definites. (Ward and Birner 1995: 739)

の値が走る領域を示しているという点で異なる。また、絶対存在文のみが、非存在文に言い換えることができる。例えば(18)は、「君たちのなかの誰かが陽子を殺した」と言い換えることができる。そして、両者のうち、絶対存在文のガ格名詞句にのみ定性効果が見られ、強決定詞的な数量詞が現れないという。

- (19) a. 今のジョークで笑った {多くの/3人の/幾人かの} 学生がいる。  
(絶対存在文、西山 2013: 265 改変)
- b. \*今のジョークで笑った {すべての/大部分の} 学生がいる。  
(絶対存在文、西山 2013: 268 改変)

(19a)は、「多くの/3人の/幾人かの 学生が、今のジョークで笑った」と言い換えることができるが、(19b)は、「すべての/大部分の 学生が今のジョークで笑った」という意味では解釈できない。一方、同様に「(…に) ~がある/いる」の形をしていても、場所存在文にはこのような制約は見られない。

- (20) a. テーブルの上には、(その){ほとんどの/すべての} 本がある。
- b. テーブルの上には、{たくさんの/いくらかの/三冊の本} がある。

西山は、このような違いが現れるのは、「絶対存在文は、変項名詞句の値の有無多少を問題にするものであるため、数え上げるタイプの弱決定詞は現れうるが、比率的な強決定詞は現れ得ない」ことが理由だとしている。西山は、構造的な理由づけはしておらず、前述の所有文と絶対存在文との構造的な関連性は明らかでないが、繰り返すように、本稿の議論の範囲内ではこれらの構文の定性に関する特徴が分かれば十分であるため、これ以上は両構文の詳しい分析に立ち入らない。

以上のように、(12)や(13)のガ格名詞句は、強決定詞的な量化詞が現れない環境であることが分かった。次節では、さらに具体的な現象観察を通してこのような環境におけるダケとシカの分布を見ていく。

#### 5.4.2 現象の観察

ダケとシカの現象の観察に入る前に、所有文、絶対存在文のリスト解釈について触れておく必要がある。リスト解釈とは、物の存在を提示するのではなく、特定の集合の中か

ら、命題を満たす該当者を列挙して提示する性格を持ち、談話に導入済みの定的な要素であっても、その要素が特定の集合の中から「選び出す」という意味で新情報を担っている場合の解釈のことを指す<sup>3</sup>。定性効果が現れる環境であっても、リスト解釈の場合は定名詞が現れることが指摘されており、日本語の所有文、絶対存在文にも同様の現象が見られることが指摘されている (Rando and Napoli 1978、西山 2003, 2013、岸本 2005 他)。

- (21) a. 太郎：東京で見るべきものなどないだろう。  
b. 花子：そんなことないわよ。浅草、歌舞伎町、お台場、それにスカイツリーがあるじゃない。 (西山 2013: 300)
- (22) a. Q : Who is at the party?  
b. A : Well, there's Mary, Susan, and John. (岸本 2005: 224)

つまり、リスト解釈が許されるような文脈は、所有文や絶対存在文であっても、定性効果が現れない。以下の現象観察では、このようなリスト解釈が不可能な文脈を用いることにする。具体的には、個体の同定が行われないうように名詞句を弱決定詞的な量化詞 (2つ、僅か等) によって量化し、一般的な事柄を論じる文脈を用いることで、特定の集合を想起できない例文を用いる (cf. 岸本 2005)。

まず、所有文と所有関係の発生を表す非対格自動詞の例について見ていく。

#### ・所有文

- (23) 日本の平均的な家族構成では、  
a. 1人の子どもに、1人の兄弟シカ いない。  
b. \*1人の子どもに、1人の兄弟ダケが いる。 (再掲)
- (24) a. 2次方程式には、2つ以下の解シカ ない。  
b. \*2次方程式には、2つ以下の解ダケが ある。

---

<sup>3</sup> Rando and Napoli (1978) や岸本 (2005) が指摘しているように、「列挙」するといっても、その該当者が1人 (1つ) であっても構わない。

- (i) a. Q: Who is at the party?  
b. A: Well, there's Mary. (岸本 2005: 224)



- (25) a. この寮には、5人の学生に1つのシャワーシカ ありません。  
 b. \*この寮には、5人の学生に1つのシャワーダケが あります。

・所有関係の発生を表す非対格自動詞文

- (26) a. クジラは、1度の出産で、1匹の子どもシカ 生まれません。  
 b. \*クジラは、1度の出産で、1匹の子どもダケが 生まれる。

いずれも、「AにはBがある／ない」という形をとった所有文の例であるが、シカが問題なく許容される一方、ダケは許容されない。上記のようなダケの分布は、所有文に強決定詞が現れないことと並行している。

- (27) \*日本の平均的な家族構成では、1人の子どもに、{ほとんどの／すべての}兄弟がいる。  
 (28) \*二次方程式には、{ほとんどの／両方の}解がある。  
 (29) \*この寮には、5人の学生に{ほとんどの／すべての}シャワーがある。  
 (30) \*クジラは、一度の出産で、{ほとんどの／すべての}子どもが生まれる。

絶対存在文の場合も同様で、シカは問題なく現れることができるが、ダケは現れることができない。

- (31) a. 人間とチンパンジーの間には、僅かな遺伝子の違いシカ ない。  
 b. \*人間とチンパンジーの間には、僅かな遺伝子の違いダケが ある。 (再掲)  
 cf. \*人間とチンパンジーの間には、{ほとんどの／すべての} 遺伝子の違いがある。  
 (32) a. この路線の利用者には、大学会館前のバス停で降りる人シカ いない。  
 b. \*この路線の利用者には、大学会館前のバス停で降りる人ダケが いる。  
 cf. \*この路線の利用者には、{ほとんどの／すべての} 大学会館前のバス停で降りる人がある。

(31)(32)の、「人間とチンパンジーの間」や「この路線の利用者」は、具体的な場所空間を示しているのではなく、「遺伝子の違い」や「大学会館前のバス停で降りる人」の有無多少を調べる領域を示しており、絶対存在文の例である。これまでと同様、(31a)(32a)

のシカは問題なく許容されるが、(31b)(32b)のダケは許容されない<sup>4</sup>。これらの観察から、ダケは定性効果のある環境には現れ得ず、その分布は強決定詞と同じであることが分かる。

さて、今まで見てきた所有文、絶対存在文の文脈は、量化詞で量化しているため、特定の集合の中から「兄弟」「解」「シャワー」「子ども」を選び出す解釈ではなかった。例えば、(23)は、兄弟関係の集合(兄、姉、弟、妹)から、特に兄弟を選び出している文ではなく、1人の子どもの兄弟の有無多少について述べているだけである。一方、もしダケが前提集合を必要とする要素なのであれば、リスト解釈のように特定の集合の中から要素を選び出す場合は、所有文や絶対存在文であっても問題なく用いることができるはずである。そこで、具体的な前提集合を導入し、そこからある要素を選び出すような前文脈を設定した所有文や絶対存在文の例を作り、そこにダケを当てはめてみる。

#### ・所有文

- (33) 弟、妹、姉、兄のうち、太郎には、弟ダケが いる。
- (34) 人間には様々な消化器官があるが、クラゲには口と腸ダケが ある。
- (35) 地位、財産、美貌のうち、花子には、美貌ダケが ある。
- (36) 田中さんの家には、男の子と女の子のうち、男の子ダケが 産まれた。

#### ・絶対存在文

- (37) 魚と人間の間には、様々な違いがあるが、チンパンジーと人間の間には、主に、言語を獲得したかどうかという違いダケが ある。

前文脈で前提集合を導入した(33)-(37)は、下線で示した集合の中から、要素を選び出している。例えば(34)は、人間が持つ「様々な消化器官(口、胃、腸、肝臓…)」からクラゲが持つ消化器官として「口と腸」を選び出している。他の例も、(23)-(26)や(31)(32)の例とは異なり、具体的な前提集合の中から要素を選び出している。このような具体的な前提集合が示された文脈においては、ダケが問題なく許容されることが分かる。

---

<sup>4</sup> ただし、数量詞に直接ダケが後接した場合はダケも所有文に出現可能である。

(i) 日本の平均的な家族構成では、1人の子どもに、兄弟が 1人ダケ いる。

しかし、沼田(2009)は、とりたて詞が数量詞に後接した場合、概数量を表す形式名詞として用いられる場合があることを指摘している。本稿でも、この場合の数量詞に後接したダケは、とりたて詞のダケとは異なる要素と考えここでは考察の対象としない。

さらに、場所存在文は、絶対存在文と異なり、定性効果がないのであった。このような環境では、ダケが問題なく現れる。

(38) この教室の中には、教員ダケが いる。

(cf. この教室の中には、{すべての／ほとんどの} 教員がいる。)

(39) 机の上には、いつも読む本ダケが ある。

(cf. 机の上には、{すべての／ほとんどの} いつも読む本がある。)

(38)(39)の二格は、「この教室の中」「机の上」という、具体的な場所空間を表しており、強決定詞が現れる場所存在文の例である。その場合は、ダケも問題なく現れることが分かる。

この節での観察をまとめると、ダケは定性効果のある環境に現れることができず、シカは問題なく現れることができるということに集約される。逆に、前提集合を導入した場合や、定性効果のない場所存在文の場合にはこの違いは見られない。このふるまいは、ダケは前提集合を持つ強決定詞と、シカは前提集合を持たない弱決定詞とふるまいを同じくすると言い換えることができる。この帰結は、5.3節の(10)(11)の観察の結果と並行する。つまり、ダケは談話上、前提集合を導入する必要がある一方、シカはその必要がないという対立である。

#### 5.4.3 否定すべき他の要素が存在しない文脈

ここまで、ダケは「談話によって導入された前提集合のうち、当該の要素を選び出し、他の要素を否定する」ことによって限定を表しているが、シカは「単に当該の要素以外の要素が存在しないことを示す」ことで限定を表しているということを論じてきた。この記述は、他の現象によっても裏付けることができる。

ダケは、前提集合から当該の要素を選び出し、他の要素を否定するため、「当該の要素以外の要素が存在しない文脈」では許容されないということが予測される。一方、シカは、単に当該の要素以外の要素が存在しないことを示すだけであるため、否定される「他の要素」が存在するかどうかは関係がない。これは、次のような例から確かめられる。

- (40) a. 大学には、私立大学と公立大学シカ ない。  
 b. \*大学には、私立大学と公立大学ダケが ある。
- (41) a. 生物学上、血液型には、A、B、AB、Oシカ ない。  
 b. \*生物学上、血液型には、A、B、AB、Oダケが ある。
- (42) a. 実数には、有理数と無理数シカ ない。  
 b. \*実数には、有理数と無理数ダケが ある。

大学には、私立大学と公立大学以外の大学はそもそも存在しない。血液型や実数も同じで、「A、B、AB、O」以外の血液型や、「有理数か無理数」以外の実数は、定義上存在しない。つまり、「否定される他の要素」がそもそも存在しない文脈である。このとき、ダケは不自然になるがシカは問題なく許容できることから、やはり「ダケは、談話によって導入された前提集合のうち、当該の要素を選び出し、他の要素を否定する」ことによって限定を表しているが、「シカは、単に当該の要素以外の要素が存在しないことを示すことで限定を表している」という記述の妥当性が示される。

## 5.5 他にとりたて詞表現への拡張

最後に、他の否定極性表現と非否定極性表現の対立を持つとりたて詞にもこれまでの観察と同様の対立が見られることを示す。

とりたて詞モが後接した「誰モ」は、シカと共に日本語の否定極性表現の一種であり、全否定を表す表現である。一方、「誰モガ」のように、格助詞が後接した場合は、否定と呼応する必要がないが、これも全称を表す表現の一種である。

- (43) a. 学校には、誰モ {来なかった/\*来た}。  
 b. 学校には、誰モガ {来なかった/来た}。

否定文の例で見ていくと、(43ab)は、いずれも「学校に来た人がいない(全員が学校に来なかった)」という全否定を表し、素朴には同じ状況を指している。しかし、前提集合の有無に目を向けると、これらの表現の違いが明白になる。

まずは、文脈で前提集合が導入されているか否かによる文法性の違いをしてみる。

(44) 散歩先の公園のベンチに、なんとなく座っていた。

3時間座っていたが…

- a. 誰モ 来なかった。
- b. \*誰モガ 来なかった。

(45) いつもの公園で、クラスのみんなを待っていた。

3時間待っていたが…

- a. 誰モ 来なかった。
- b. 誰モガ 来なかった。

(44)は、(10)と同じ文脈で、「公園に来る人」の前提集合を持たない文脈である。その場合、誰モは問題なく許容されるが、誰モガの場合は不自然である。一方、(45)は(11)と同じ文脈で、「公園に来る人」の前提集合（「クラスのみんな」）を持つ。その場合、誰モも誰モガも問題なく許容される。つまり、誰モは前提集合を必要としない表現である一方、誰モガは前提集合を必須とする表現であることが分かる。

絶対存在文のガ格においてもダケとシカの対立と並行した現象が見られる。以下の(46)は、具体的な場所空間が存在しない絶対存在文の例であるが、誰モは問題なく現れる一方誰モガは許容されない。それに対して、(47)のような定性効果のない場所存在文であれば、いずれも許容可能である。

(46) a. 助けてくれる人は、この世には、誰モ いない。

b. \*助けてくれる人は、この世には、誰モガ いない。 (絶対存在文)

(47) a. 教室には、クラスメートは、誰モ いなかった。

b. 教室には、クラスメートは、誰モガ いなかった。 (場所存在文)

つまり、誰モは前提集合を必要とせず弱決定詞的なふるまいを見せるが、誰モガは前提集合を必須とし強決定詞的なふるまいを見せるということである。以上、前提集合の有無を区別すべきという本稿の提案は、他の (非) 否定極性表現の対立の分析にも有効であることを示した。

## 5.6 第5章のまとめと課題

本稿では、いずれも限定を表す否定極性表現シカと非否定極性表現ダケの違いについ

て、前提集合の有無という観点から考察した。その結果、ダケは、「談話によって導入された前提集合のうち、当該の要素を選び出し他の要素を否定する」ことによって限定を表しているが、シカは「単に当該の要素以外の要素が存在しないことを示す」ことで限定を表しており、前提集合は必要ではないということを示した。また、前提集合の有無という観点から、ダケは強決定詞的に、シカは弱決定詞的にふるまうことを指摘した。また、この対立は、他の (非) 否定極性表現の対立にも適応可能な一般的な現象であることを示した。

最後に、本研究の更なる発展の可能性について触れておきたい。Kato (1985) が指摘するダケ、シカの “assertion-presupposition” の記述は、両者で全く同じものであった。Kato の指摘は、これらの概念ではダケとシカの違いが捉えないことを示している。他にも、久野 (1999) は、ダケとシカの意味の違いを捉えるために、「主陳述」「第二陳述」という独自の用語を用いている (5.2 節参照)。しかし、久野の独自の用語は一般的な意味論におけるどの概念に対応しているものなのかも分かっていない。つまり、先行研究の指摘では、未だダケとシカの違いを一般的に捉えるには至っていないと言える。

ダケやシカは限定を、誰モや誰モガは全称を表し、いずれも素朴には現実世界との指示関係において同じ状況を指示している。しかし、両者は前提集合の有無によって使い分けられ、統語的にも否定極性の有無が異なっている。このことは、統語構造を構築するうえでは、現実世界との指示関係では捉えることができない意味が必要になっていることを示唆している。本章では (非) 否定極性表現の対立を通して、前提集合の有無や定性といった概念が統語構造を構築するうえで重要になる意味の一つであることを示した。これらの概念を踏まえて、統語構造と意味とのインターフェイスを精緻にすることが今後の課題となる。

## 第6章 否定極性表現の2種

### —シカと wh-モの比較を中心に—

第6章では、序章(5b)の ii であげた目的に応じ、否定極性表現の統語的な多様性を見ていく。第2章から第4章では、否定極性を持つとりたて詞が「ハの後接・編入」という操作を共通して持っていることをナド、マデ、ダケ、シカの現象を通して指摘した。すべてのとりたて詞としての性質を持つすべての否定極性表現がこの操作を介しているとは限らない。第6章では、第4章で「ハの後接・編入」を介した否定極性表現シカと、wh-モを比較することを試みる。wh-モはその形態から明らかなように、「モの後接」を経た否定極性表現である。本章の結論を先に述べておくと、本章ではシカと wh-モは文中での働きと統語的ふるまいが大きく異なることを主張する。本章では、特にホスト名詞句と否定極性表現との関わり方に注目し、前者はホスト名詞句の存在量化子を制限する働きを持ち、ホストとなる名詞句に依存した位置に生起する一方、後者は否定極性表現自体が存在量化のオペレータとなり、ホスト名詞句とは独立して文中に生起することを指摘する。

本章ではさらに、シカと同じふるまいを見せるタイプとして、マデ B (マデハ) や 2-トハ (二つトハ、二人トハ等) が、wh-モと同じふるまいを見せるタイプとして 1-モ (一人モ、一つモ等) があることを指摘する。これらはいずれも、前者は「ハの後接・編入」を介しているタイプであり、後者はその形態から明らかなように、モを後接させた否定極性表現である。つまり本稿は、日本語には少なくとも二つの否定極性タイプ(「ハ後接タイプ」と「モ後接タイプ」)を仮定しなければならないことを主張する。

#### 6.1 はじめに

シカや wh-モは否定極性表現であり、いずれも否定辞と共起する必要がある。

- (1) 公園には、太郎シカ {来なかった/\*来た}。

(2) 公園には、誰モ {来なかった/\*来た}。

また、これらの否定極性表現は、ホストとなる名詞句を顕在化できることが指摘されている (Aoyagi & Ishii 1994、江口 2000、宮地 2007、Kuno 2007 他)<sup>1</sup>。(3)(4)の「太郎」は、それぞれ「職員」「学生」の一人であると解釈されるし、(3)(4)の「誰モ辞めなかった/来なかった」は、「職員が全員辞めなかったこと」「学生が全員来なかったこと」を指している。

(3) 職員は、{太郎シカ/誰モ} 辞めなかった。

(4) 公園には、学生が、{太郎シカ/誰モ} 来なかった。

しかし、両者が常に否定極性表現として同じふるまいを見せるわけではない。次に見るように、否定極性表現が否定辞と同一節内にあっても、シカだけが容認されない構文がある。

(5) a. \*不祥事を暴くまで、職員は、[太郎シカ 辞めない] 覚悟だ。

b. 不祥事を暴くまで、職員は、[誰モ 辞めない] 覚悟だ。

(5)は、同一節内にシカ・wh-モと否定辞が現れているため、いずれも許容可能になることを予測するが、実際に容認されるのは、wh-モの場合だけである。述語の「覚悟だ」は、コントロール構造をとる述語であり、埋め込み節には「職員」と同一指示になるが音型を持たない主語が立つ (cf. 竹沢 2016)。(5)の現象は、シカはそのような埋め込み節の主語をホスト名詞句にできない一方、wh-モはそれが可能であるという非対称性を示している。本稿では、このようなホスト名詞句との関係を中心に、シカとwh-モの違いを見ていく。そして、次のような違いがあることを提示する。

---

<sup>1</sup> 江口 (2000) では、シカやホカにおける次の例に見るような「除外解釈」について、否定される範囲を表している名詞句を「ホスト名詞句」と呼んでいる。本稿でも江口 (2000) に従ってこれらの名詞句をホスト名詞句と呼ぶことにする。

(i) a. 太郎は 焼酎のホカ 飲み物を 飲まなかった。 (江口 2000: 292)

b. 太郎は 焼酎シカ 飲み物を 飲まなかった。 (江口 2000: 295)



- (6) a. wh-モは、存在量化の顕在的なオペレータであり、文の副詞的位置に生起する。  
 b. シカは、ホストとなる名詞句の存在量化に依存して、ホストとなる名詞句が参照可能な位置に生起する。

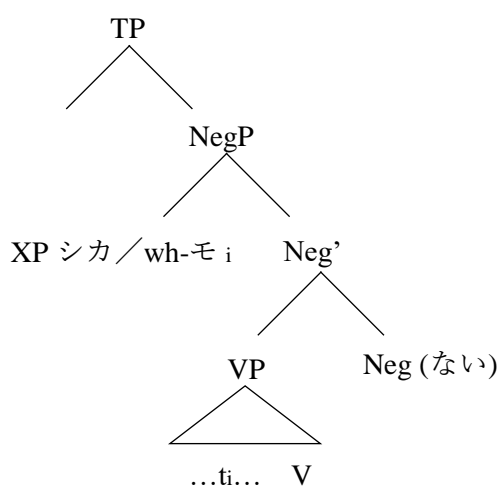
さらに本章では、この記述的一般化が他の否定極性表現の対立にも適応可能なことを指摘する。具体的には、「最小単位+モ」（一つモ等）と「二つトハ」、マデB（マデハ）にも同じような分布の違いが見られることを指摘する。

## 6.2 先行研究

### 6.2.1 シカと誰モの統語構造

シカや wh-モの統語的位置や認可条件を扱う先行研究は複数見られる (Kato 1985、許斐 1989、Aoyagi & Ishii 1994、久野 1999、片岡 2006、西岡 2007 他)。その中でも、シカや wh-モの具体的な統語的位置に言及しているものには、Aoyagi & Ishii (1994)、片岡 (2006)、西岡 (2007) 等がある。これらの先行研究は、技術的な違いや理論的なバックグラウンドの違いはいくらかあるが、シカや wh-モが否定辞と同一節内に現れ、弱交差効果等の移動を伴う現象を見せることから、wh-モもシカも VP 内に基底生成した後、否定辞の Spec 位置に移動すると仮定する点はおおむね共通している<sup>2</sup> (第1章1.2節参照)。

#### (7) シカ文・wh-モ文の構造



<sup>2</sup> ただし、西岡 (2007) は、wh-モに関する指摘のみである。

これだけ見ると、シカと wh-モは否定極性表現として全く同じステータスを持っているように思われる。しかし、wh-モとシカは分布にいくつかの違いがあることが指摘されている。Kato (1985) は、シカは一つの否定辞に対して一つしか現れないが、wh-モは複数現れることを指摘している。Kato は、このように一つの否定辞につき、一つの要素しか現れない否定極性表現を Strong NPI、複数現れる否定極性表現を Weak NPI と呼び、それぞれシカは前者に、wh-モは後者に該当する。

(8) 誰モ 何モ 食べなかった (Kato1985: 154)

(9) \*太郎シカ リンゴシカ 食べなかった。 (Kato1985: 155)

このような多重生起の可否の問題に対して、先行研究は複数の提案をしている。Aoyagi & Ishii (1994) では、このような違いを、シカは否定辞との Spec-Head 関係における 1 対 1 関係による認可である一方、wh-モは否定辞の Spec 位置に移動後、否定辞のオペレータによって認可されるため多重生起が許されるとすることで説明している。他にも、西岡 (2007) は wh-モに多重指定部を仮定し、次節で詳しく見るが、Watanabe (2004) や渡辺 (2005) では 否定辞との多重一致を仮定するなど、多重生起について複数の提案がなされている。しかし、いずれの分析もどのような否定極性表現はそれが可能であって、どのような否定極性表現はそれが不可能なのかについて論拠を示しているものはなく、記述的に対応する構造を提案するにとどまっている。

一方、Nishioka (2000) では、シカと wh-モの違いは、[+Foc]素性の有無であるとする。Nishioka は、シカは[+Neg, +Foc]の素性を持ち、否定辞句の Spec 位置に移動後、フォーカス句の Spec 位置に移動しなければならないと仮定する。[+Foc]素性を持つ要素が一文に複数現れた場合、同じ[+Foc]素性を有する要素がシカ句とシカ句の痕跡位置に介在することになり、シカ句の再構築が阻害されてしまうため、シカは多重生起が許されないと説明する。一方、wh-モは[+Foc]素性を持たないため、多重生起が可能になり、シカのような制約は見られないと説明する。しかし、やはりシカと wh-モの個別の指摘にとどまり、他のどのような否定極性表現が[+Foc]素性を持ち、どのような否定極性表現がそのような素性指定を持たないのかについては明らかではない。

## 6.2.2 NPI と NCI

必要最低限の道具立てによって統語構造を構築する近年のミニマリスト・プログラムのアプローチでは、一致現象は素性照合による解釈不可能素性の消去によって説明される。このミニマリスト・プログラムのアプローチを背景として、wh-モを否定極性表現 (Negative Polarity Item; NPI) ではなく、否定一致表現 (Negative Concord Item; NCI) として分析する先行研究がある。NCI とは、それ自体が否定辞の意味を内包するもので、否定辞との一致を要求しつつも、二重否定にはならないものを指す (Heageman & Zanuttini 1991, 1996, Heageman 1995 他)。(10)にフランス語の例を挙げる。(10)は文否定辞が現れており、rien、personne 等の否定の意味を含む要素と共に用いられているが、二重否定の意味にはならない。

- (10) Je n'ai jamais rien dit à personne.  
I NEG have never nothing said to nobody.  
私は決して 誰にも何も 言わなかった。 (Heageman & Zanuttini 1995: 234)

Watanabe (2004)、渡辺 (2005) や西岡 (2007) は、wh-モもまた NCI であり、wh-モ自体に否定の意味が内在していると分析する。それは、wh-モが次に見るように応答表現において省略可能であるというデータに基づく<sup>3</sup>。

- (11) Q: 何を買ってきたの?  
A: 何も買~~って~~こ~~な~~か~~っ~~た。 (渡辺 2005: 113)

しかし、NCI 分析は、そのままシカの分析に応用することはできない。Nishioka (2000) はシカを NCI として扱うが、片岡 (2006) や朴 (2007, 2009) では、シカは wh-モと異なり、応答表現で省略不可能であり多重生起も不可能であるという点から、シカを NCI と

---

<sup>3</sup> 渡辺の説明によると、(11)で否定述部が省略可能なのは、素性の照合とコピーの結果、述部が肯定述部と等価になるためであるとしている。つまり、wh-モが持つ[+Neg]素性が否定辞が持つ[+Neg]素性にコピーされ二つの[+Neg]素性を持った否定述部は肯定述部と等価になると説明される。ただし、本稿では、シカと wh-モの分布の違いと文中での働きの違いを記述することに重きを置くため、これ以上技術的な問題には立ち入らない。

して扱うべきではないとしている。

(12) Q: 何を買ってきたの?

A: \*本シカ買ってこなかった。

そもそも、NCI 分析が用いられる否定極性表現としては、上記のフランス語の例以外にスペイン語の *nadie* 等、ロマンス諸語にいくつか例があるが、いずれも全否定を表す表現である。対して、シカは限定を表している点で文中での機能が異なる。つまり、NCI か否かという観点からは、少なくとも *wh*-モとシカの否定極性表現としてのステータスを測る基準としては十分に機能していないのである。

### 6.2.3 問題の所在

以上、6.2.1 節では、シカと誰モの統語構造についてはおおむね同じ *Spec-Head* の構造が提案されている一方、多重生起の可否についての理論的説明は複数のものが個別に提案されていることを見た。さらに、6.2.2 節では、*wh*-モを否定極性表現ではなく NCI として扱う分析を見たが、この分類もシカと *wh*-モの違いを捉えているわけではないことを見た。このように、先行研究ではシカと *wh*-モの否定極性としてのステータスの違いを適切に捉えるまでには至っていない。

シカと *wh*-モの違いという観点から(5)を見てみると、そもそもシカと *wh*-モでは生起できる条件が異なっていることが分かる。(5)のコントロール構文は、否定辞を含む埋め込み節の主語が音型を持たない点が特徴的である。そして、*wh*-モはそのような主語をホスト名詞句にすることができるが、シカはそれが不可能である。このことは、シカと *wh*-モは、ホスト名詞句との関わり方が異なることを示している。本章では、ホスト名詞句と否定極性表現の関係という観点から、シカと *wh*-モの生起条件の違いと文中での働きの違いを指摘し、両者の否定極性表現としてのステータスの違いを記述する。

## 6.3 現象の観察

ここでは、否定極性表現とホスト名詞句との関連という観点から具体的な統語現象を見ていくが、まずはコントロール構文の埋め込み節の現象を見ていく。「～する魂胆だ」「～するよう努めた」「～する覚悟だ」等の述語は、埋め込み節を補部にとり、埋め込

み節の音型を持たない主語は、通常主節主語と同一のものになる (竹沢 2016)。

- (13) [CP 太郎が [CP  $\phi_i$  出かける] つもりだ] (竹沢 2016: 73)

ここでの音型を持たない空の主語は、Chomsky (1981) に従い代名詞的照応形 PRO<sup>4</sup>を仮定しておく。シカと wh-モについて具体的に現象を見てみると、シカは PRO をホスト名詞句に取ることができないが、wh-モはホスト名詞句が PRO であっても問題なく埋め込み節中に現れることが分かる<sup>5</sup>。

- (14) a. \*不祥事を暴くまで、職員<sub>i</sub>は、[PRO<sub>i</sub> 太郎シカ 辞めない] 覚悟だ。  
b. 不祥事を暴くまで、職員<sub>i</sub>は、[PRO<sub>i</sub> 誰モ 辞めない] 覚悟だ。 (再掲)  
cf. 太郎を除いて、不祥事を暴くまで、職員は誰も辞めない覚悟だ。
- (15) a. \*学生<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 太郎シカ 遅刻しないよう] 努めた。  
b. 学生<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 誰モ 遅刻しないよう] 努めた。  
cf. 太郎を除いて、学生が 遅刻しないよう努めた。
- (16) a. \*優勝選手のドーピング疑惑について、協会幹部<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 田中シカ 追及しない] 魂胆だ。  
b. 優勝選手のドーピング疑惑について、協会幹部<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 誰モ 追及しない] 魂胆だ。  
cf. 田中を除いて、優勝選手のドーピング疑惑について、協会幹部は誰も追及しない魂胆だ。

---

<sup>4</sup> PRO は、[+anaphoric][+pronominal]という矛盾した特徴を持つため、統率されない不定詞節や動名詞節の主語の位置に生じるとされる (PRO の定理、Chomsky 1981)。

<sup>5</sup> 「～するつもりだ」「～する気だ」等もコントロール述語の例であるが、これらの場合は(14)-(16)に比べ、許容度が上がる話者がいるようである。以下に例文を挙げるが、判定はあえて表記していない。

- (i) a. パーティには、学生は [太郎シカ 参加しない] つもりだった。  
b. 新成人は、[太郎シカ 選挙に 行かない] 気だ。

これらの例文の許容度が上がる理由としては、話者によっては、「～つもりだ」や「～気だ」が、(14)-(16)の述語に比べ文法化が進んでおり、補文構造をなしていない、つまり、PRO を持たない構造になっているためであることが考えられる。

ホスト名詞句と否定極性表現の関わり方という観点から見ると、コントロール構文以外にも、wh-モとシカの分布が一致しない環境が存在する。それが個体レベル述語 (Individual-Level Predicate; ILP) の主語をホスト名詞句とする環境である。Carlson (1977)、Diesing (1992) 等の先行研究は、述語のタイプとして二つのものを指摘している。一つは、動作や一時的な状態を意味する場面レベル述語 (Stage-Level Predicate; SLP)、もう一つは、恒常的な属性を表す個体レベル述語 (ILP) である。前者には、「走る」「食べる」のような動作動詞や「元気だ」「病気だ」のような一時的な状態を表すものが該当し、後者には、「優しい」「背が高い」のような恒常的な属性を表すものが該当する。述語タイプの観点から見ると、誰モは述語を選ばず主語に付加することができるが、シカは ILP を述語とする文の主語をホスト名詞句として現れることができない。

- (17) a. 学生は、誰モ まじめでない。  
b.??学生は、太郎シカ まじめでない。  
cf. 太郎を除いて、学生はまじめでない。
- (18) a. 子どもは、誰モ 嘘をつかない。  
b.??子どもは、太郎シカ 嘘をつかない。  
cf. 太郎を除いて、子どもは嘘をつかない。

なお、(17)(18)のシカの許容度の低さは、SLP の場合や述語を過去形にした場合と比較すると分かり易い。

- (19) 学生は 太郎シカ 元気がない。  
(20) 子どもは 太郎シカ 嘘をつかなかった。

Carlson 等の先行研究は、SLP の主語の裸名詞句は存在解釈も総称解釈も可能である一方、ILP の主語の裸名詞句は総称解釈しか許さないことを指摘している。また、(17)-(20) の対立は、wh-モは主語が総称解釈／存在解釈いずれの名詞句であっても問題なく用いることができ、シカは存在解釈の場合のみ用いることができるということを示している。つまり、ここでも wh-モはホスト名詞句の解釈に関係なく用いることができるが、シカはホスト名詞句の解釈によっては用いることができないという一般化を得ることができる。

本節での観察は、(21)のようにまとめられる。

- (21) a. wh-モは、ホストとなる名詞句とは独立して生起する。  
 b. シカは、ホストとなる名詞句の解釈に依存して生起する。

## 6.4 提案

ここでは、シカと wh-モの違いを、ホスト名詞句との関係という観点から考える。そして、シカと wh-モは文中での働きが異なることを指摘する。

Kuno (2007)、久野 (2010) は、NCI である wh-モが持つ素性の配列を [Foc+Neg+Wh(One)] と仮定し、この配列は解釈不可能であるとする。ミニマリスト・プログラムの枠組みでは、解釈不可能な素性は統語的な素性照合の操作によってすべて消去しなくてはならない。久野は、NCI の解釈不可能な素性の配列を、否定辞の [Neg] 素性によって照合し、解釈不可能な配列から [Neg] 素性を消去することで、[Foc+Wh(One)] という解釈可能な配列を得るというシステムを仮定している。さらに、Kuno (2007) は、シカもまた [Neg] 素性を持つとする。Kuno (2007) は、シカの意味を (22) のように仮定し、シカは否定辞 $\sim$ と  $x \neq \text{John}$  の  $\neq$  の部分にマッピングされる要素であると考え。この場合、存在量化詞はシカそのものによって導入されるのではなく、ホスト名詞句の存在閉包 (existential closure)<sup>6</sup> によって導入される。

$$(22) \sim \exists x[x \neq \text{John} \wedge \text{came}(x)] \quad (\text{Kuno 2007: 141})$$

久野の興味を中心は、否定極性表現の認可における否定素性の位置と素性照合のメカニズムを統一的に説明することだが、久野によるこの一連の指摘は、wh-モはそれ自体が存在量化詞を内包した要素である一方、シカはシカ自体には量化の意味がなく、量化される要素  $x$  を制限する要素であることを示している。つまり、同じ否定辞によって認可される要素であっても、シカと wh-モは文中で果たしている役割が異なっているのである。

ここで、シカと wh-モの文中での働きの違いについてももう少し考える。Hasegawa (1993)

---

<sup>6</sup> Heim (1982) や Diesing (1992) 等の先行研究では、不定名詞句の存在解釈について、不定名詞句はそれ自体には量化の力がなく、非顕在的な存在量化子で束縛されることで不定解釈を得るとする。これを存在閉包と呼ぶ。

は、裸名詞句の存在解釈は、(非) 顕在的な遊離数量詞によって行われると仮定し、wh-モもまたそのような顕在的な存在量化のオペレータの一つであるとしている。本稿でも、この分析と同様、wh-モは顕在的な存在量化のオペレータであると仮定する。wh-モのような顕在的なオペレータがない場合であっても、非顕在的な存在量化のオペレータが導入されることになる。結果として、wh-モが文中に現れていても現れていなくても、存在量化子が導入されることになるので文意に違いはない。このことは、wh-モは、他の「述語否定を強調、補足する陳述の副詞」(工藤 2000: 105) と同じく、補足的な要素であって、省略しても命題の真偽値に変化は与えないことから分かる。一方、シカは省略すると文意が大きく変わってしまう。

(23) 学生が 来なかった。

≡学生が 全然／ちっとも／これっぽっちも／誰モ 来なかった。

(24) 学生が 来なかった。

≠学生が 太郎シカ 来なかった。

よって、シカは顕在的な量化子のオペレータとは考えられない。シカは、久野の指摘からも分かるように、存在量化されたホスト名詞句を制限する要素である。このことは、次に示すように、wh-モは「ほとんど」によって修飾可能だが、シカは不可能であることから分かる。wh-モは、それ自身が量化子を含む要素であるが、シカは量化子を制限する要素であって量化子そのものではないため、「ほとんど」による修飾を許さないのである。

(25) ジョンは ほとんど何モ 食べなかった。

(Watanabe 2004: 564)

(26) \*学生が ほとんど太郎シカ 来なかった。<sup>7</sup>

この「ほとんど」を付加するテストは、否定極性表現か NCI かを区別するテストの一つ

---

<sup>7</sup> ただし、量化子を個体によって制限するか集合によって制限するかでふるまいが異なるようである。本稿では、シカ句はすべて固有名詞に付加させているが、「ほとんど男シカ来なかった」のように、一般名詞にシカが付加した場合は許容される。また、一般名詞にシカが付加した場合については、コントロール構文の埋め込み節の主語にも生起し得る。

(i) 学生<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 新入生シカ パーティに参加しない] 気だ。



である (Valluduví 1994、Watanabe 2004)。(25)(26)の対立は、シカは量子子を制限する働きを持つ要素であるため、そもそも当該要素が否定量子子を構成しているか否かという NCI を抽出するテストには適応しないと解釈することができる<sup>8</sup>。ここまでの指摘をまとめると、次の(27)のようになる。

- (27) a. wh-モは、存在量化の顕在的なオペレータであり、文の副詞的位置に生起する。  
 b. シカは、ホストとなる名詞句の存在量化に依存して、ホストとなる名詞句が参照可能な位置に生起する。

この結論は、シカと類似した限定を表す否定極性表現ヨリホカが、ホスト名詞句を直接制限修飾できることから自然な帰結であると言える。ヨリホカは、シカのようにホスト名詞句に対して遊離した位置にも現れ得るが、ホスト名詞句を「の」によって直接制限修飾することも可能である (cf. 江口 2000、宮地 2007, 2010)。

- (28) 手術するヨリホカ {の/φ} 手段は {ない/\*ある}。

## 6.5 1-モ vs. 2-トハ・マデ B (マデハ)

ここまでは、シカと wh-モはそれぞれ、ホスト名詞句に依存して量子子を制限するものと、量子子のオペレータとなり、ホスト名詞句とは独立して生起するものがあり性質が異なることを見た。日本語の否定極性表現はシカや wh-モ以外にも多く存在するが、この類別は、他の否定極性表現にも見られるものである。まず、「1-モ (一つモ、一人モ等)」と「2-トハ (二つトハ、二人トハ等)」について見ていく。そうすると、前者は wh-モと、後者はシカと同様にふるまうことが分かる。

---

<sup>8</sup> ただし、付加詞にシカがついた場合については、項位置にシカが付加した場合とは異なるふるまいを見せる (朴 2007, 2009)。朴 (2007) は、付加詞位置のシカが項位置のシカと異なり、応答文で述部の省略や多重生起が可能であるという現象を挙げ、項位置のシカは NPI だが、付加詞位置のシカは NCI であるとしている。本稿では、項位置のシカに現象を絞って議論しており、項位置のシカと付加詞位置のシカの違いについては、今後の課題としておく。

- (i) a. 質問：ヴァレンタインデーでみんなからチョコレートもらったの？  
 b. ?(いや) 花子からしか。 (朴 2007: 163)  
 (ii) それは紙でしか 誰も 持っていません。 (朴 2007: 159)

次に見るように、1-モ、2-トハはいずれも肯定文で用いることはできず、否定極性表現である (Kato 1985、工藤 2000)。さらに、これらの否定極性表現もまた、ホスト名詞句 (「客」) を表示することができる。

- (29) a. 客が 一人モ {来なかった/\*来た}。  
b. 客が 二人トハ {来なかった/\*来た}。

また、1-モの場合は省略しても真偽値に変化はないが、2-トハの場合は省略すると真偽値が変わってしまう。(29)は、「開店初日に一人だけ客が来たが、その後それ以上の客が来ることはなかった (開店初日にやって来た一人を除く客は来なかった)」というような意味であるが、省略してしまうと「客が (一人も) 来なかった」という意味になる。つまり、1-モの場合は、誰モと同じく顕在的な存在量化のオペレータと考えられるが、2-トハの場合は、「客」の存在量子を制限している要素であると考えられる。

- (30) 客が 一人モ 来なかった。  
≡客が 来なかった。  
(31) 客が 二人とハ 来なかった。  
≠客が 来なかった。

実際に他の現象も観察してみると、2-トハと1-モは、シカとwh-モと同様のふるまいの違いを持つ。6.3節ではコントロール構文の埋め込み節のPROとILPの主語をホスト名詞句として付加した場合について観察した。ここでも1-モと2-トハで同様の対立を見ていく。

先にコントロール構文の埋め込み節のPROをホスト名詞句とした場合について見る。すると、2-トハはPROをホスト名詞句にできないが、1-モはそれが可能であることが分かる。

- (32) a. \*不祥事を暴くまで、職員<sub>i</sub>は、[PRO<sub>i</sub> 二人トハ辞めない] 覚悟だ。  
b. 不祥事を暴くまで、職員<sub>i</sub>は、[PRO<sub>i</sub> 一人モ 辞めない] 覚悟だ。  
(33) a. \*学生<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 二人トハ 遅刻しないよう] 努めた。  
b. 学生<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 一人モ 遅刻しないよう] 努めた。  
(34) a. \*優勝選手のドーピング疑惑について、協会幹部<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 二人トハ 追

及しない] 魂胆だ。

- b. 優勝選手のドーピング疑惑について、協会幹部<sub>i</sub>は [PRO<sub>i</sub> 一人モ 追及  
しない] 魂胆だ。

ILPの主語をホスト名詞句にした場合も同様である。ILPの主語をホスト名詞句とした場合、2-トハは許容されないが、1-モは問題なく用いることができる。

- (35) a. 学生は、一人モ まじめでない。  
b. \*学生は、二人トハ まじめでない。
- (36) a. 子どもは、一人モ 嘘をつかない。  
b. \*子どもは、二人トハ 嘘をつかない。

このように、本稿の提案はシカと wh-モの対立を説明するだけでなく、他の否定極性表現の対立を捉えることを見た。

他にもシカと並行した現象を見せる否定極性表現がある。それが、第3章で論じたマデである。第3章で、とりたて詞マデは否定極性を持つ A 用法と持たない B 用法に分けて論じるべきことを指摘した。そして、B 用法にのみ対比のハを後接できることを指摘した。

- (37) a. 信じられないことに子どもの喧嘩ごときで、警察マデ (\*ハ) やって来た。  
(マデ A)
- b. 当然子どもの喧嘩ごときでは、警察マデ (ハ) やって来なかった。(マデ B)
- (38) 当然、警察マデハ { \*やって来た / やって来なかった }。

シカや wh-モに比べて少し座りは悪くなるが、マデもホスト名詞句を表示することが可能である。

- (39) (?)当然、子どもの喧嘩では、学校関係者は 校長マデ (ハ) やって来なかった。

マデ B は、ホスト名詞句との共起関係について、シカや 2-トハと同じようにふるまう。まず、コントロール構文の補文の主語位置に現れた場合について見てみる。すると、マデ B は PRO をホスト名詞句としてコントロール構文の補文に現れることができないこ

とが分かる<sup>9</sup>。

- (40) \*親族<sub>i</sub>は、[PRO<sub>i</sub> 父親の太郎マデ (ハ) 花子のことを見捨てない] 覚悟だ。  
(41) \*この学校の生徒は遅刻が多い。でも、生徒会の学生<sub>i</sub>は、いくら何でも  
[PRO<sub>i</sub> 生徒会長マデ (ハ) 遅刻しないよう] 努めた。  
(42) \*部活動の壮行会に、関係者<sub>i</sub>は、[PRO<sub>i</sub> 保護者マデ(ハ) 参加しない] 気だ。

また、ILPの主語をホスト名詞句として現れることもできない。

- (43) \*学生は、太郎マデ (ハ) まじめでない。  
(44) \*子どもは、太郎マデ (ハ) 嘘をつかない。

このように、マデ B (マデハ) もまた、シカや 2-トハと同じようにふるまうことが分かる。

意味についても、マデ B (マデハ) はシカや 2-トハと並行的な特徴を持つ。(37b)を例にマデ B の意味を解釈すると、「子どもの喧嘩ごときでは、保護者や教員は駆け付けたが、それに加えて警察が来ることはなかった (保護者や教員以上の人物は来なかった)」ということの意味している。これは、シカが「公園に太郎はやって来たが、それ以上の人物はやって来なかった (太郎を除く人物は来なかった)」、2-トハが「開店初日に一人だけ客が来たが、その後それ以上の客が来ることはなかった (開店初日にやって来た一人を除く客は来なかった)」ということを表しているのと並行して、「駆け付ける人物」を制限していると言えるため、マデ B がこれらと同様にふるまうのはごく自然の帰結であるといえる。

以上、本節では、シカと wh-モに見られた対立が、1-モと 2-トハ、マデ B (マデハ) の対立にも同様に見られることを指摘した。

---

<sup>9</sup> 第2章では、同じく「ハが後接・編入」したタイプの否定極性表現としてナドもあることを見た。しかし、ナドは次の例文を見ても分かるように、厳密には否定辞を要求せず、述部に「話者の否定的な評価」があれば許容されるため、ここでは考察の対象外とした。第2章注1も参照。

- (i) 煙草ナド 今すぐ止めてしまえ／止めるべきだ。

## 6.6 第6章のまとめと課題

これまでの本章での観察をまとめると、次の表1のようになる。

	シカ、2-トハ、 マデB (マデハ)	wh-モ、1-モ
量子子との関係	量子子を制限する	量子子を構成する
ホスト名詞句との関係	ホスト名詞句の存在量化に依 存して生起する	ホスト名詞句とは独立して生 起する

表1：ホスト名詞句と否定極性表現との関係

シカは、通時的には「シキ+ハ」から構成されたとする節がある (松下 1928、宮地 2007, 2010)。また、マデハ、二人トハという形態を見ても分かるように、量子子を制限するタイプの否定極性表現はいずれもハを後接 (編入) させたタイプである。一方、wh-モ、1-モという否定極性表現はその形態から、モを後接させたタイプであることが分かる。つまり、本稿の主張は、日本語の否定極性表現には少なくとも2種類あるということに集約される。一つがハを後接させた否定極性表現で、もう一つがモを後接させた否定極性表現であり、両者は性質も分布も異なる。先行研究においては、シカとwh-モに関する個別の議論は充実していたが、本稿の指摘のように、否定極性表現を分解し、ハとモという特徴を抽出することはなされてこなかった<sup>10</sup>。シカとwh-モの多重生起に関しても、なぜシカは多重生起が不可能で、wh-モは多重生起が可能なのかについては、それぞれの現象に対して、それぞれ構造を与える記述的な提案しかなされてこなかった。しかし、本稿のアプローチに従えば、量子子を制限するタイプのハ後接タイプは多重生起が不可能で、量子子を構成するモ後接タイプは多重生起が可能であるという一般化を捉えることができる。

<sup>10</sup> 工藤 (2000) では、数量表現と否定が共起した場合に、①モが後接して完全否定を表すタイプ (一度モ、つゆほどモ等) ②トやモが後接して不完全否定を表すタイプ (半年ト、半年モ等) ③ハが後接して不完全否定を表すタイプ (全員ハ、ずっと等) の3つがあることが指摘されている。ただし、①～③の現象の中にも、ハやモの後接が任意である場合やハでもモでもいい場合など様々なパターンがあり、網羅的に現象を列挙するにとどまっている。本稿が観察した否定極性表現の分類と、数量表現におけるハ・モの選択との関わりについては今後の課題とする。

「ハ後接・編入」タイプ

- (45) a. \*太郎シカ リンゴシカ 食べなかった。  
b. ??当然、花子は、初対面の太郎にマデ 義理チョコシカ 渡さなかった<sup>11</sup>。  
c. \*学生は、二人トハ 寿司を 二つハ 食べなかった。

「モ後接」タイプ

- (46) a. 誰モ リンゴを 一つモ 食べなかった。  
b. 一人モ 何モ 言わなかった。

今後、これらのデータをもとに具体的な統語構造、意味解釈規則を与えていく必要がある。この点については、今後の課題である。

---

<sup>11</sup> マデ B とシカの共起については、第3章3.2節も参照。

## 終章 まとめと展望

本稿は、日本語の否定極性表現の体系性を明らかにする試みの一環として、否定極性表現をとりたて詞の統語と意味から分析した。本稿は、序章にて(1)のような目的を設定した(序章 0.1 節(5)を再掲)。

- (1) a. 日本語の否定極性表現の体系性を明らかにする試みの一環として
  - i. とりたて詞における否定極性の有無を整理する。
  - ii. 否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞を比較し、否定極性表現の特徴を明らかにする。
- b. (1a)で明らかになった否定極性表現の特徴を前提として
  - i. 否定極性表現の意味的な特徴を明らかにする。
  - ii. 否定極性表現の統語的な多様性を明らかにする。

本稿は、おおむね第2章から第4章までが(1a)に、第5章から第6章までが(1b)に対応する緩やかな2部構成をとった。ここでは、各章で明らかにしたことをもう一度整理する。

第2章、第3章では、(1a)のiに対応して、否定的特立を表すとりたて詞ナドと意外を表すとりたて詞マデにおける極性の有無を整理した。野田(1995)では「肯否の階層」に位置するとりたて詞として複数のものを挙げており、ナドやマデもその一つであったが、野田の言う「肯否の階層」には否定極性を持つもの以外にも様々な統語的性質を持ったとりたて詞が混在している状態であった。そこで本稿ではまず、とりたて詞における極性の有無の整理を行った。そして、格助詞やコピュラの後接の可否、焦点の広狭、疑問文化の可否などの観察から、ナド、マデは、形態は一つであっても、統語的性質としては否定極性を持たないもの(ナドA、マデA)と持つもの(ナドB、マデB)の二つに分ける必要があることを明らかにした。また、A用法・B用法は、それぞれ山田(1936)や青柳(2006, 2008)が指摘する副助詞と係助詞の違いと一致するものであることを示

した。

第4章では、(1a)の ii に対応して、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞の比較を行い、否定極性を持つとりたて詞と持たないとりたて詞は、とりたて詞というカテゴリの中に無関係に散在しているのではなく、「ハの後接・編入」という統語的操作を介して対応関係を持ちつつ存在していることを明らかにした。また、第2章から第4章で論じたとりたて詞における副助詞的な A 用法と否定極性を持つ係助詞的な B 用法の対立および、両者の「ハの後接・編入」による対応関係は、ナンカ、トカ、ナンゾ(ナンザ)にも適用可能な一般的な指摘であることを示した。以上の指摘は、とりたて詞には、シカのような代表的な例以外にも多数の否定極性を仮定すべきものがあることを意味している。

第5章、第6章では、第4章までの議論を発展させ、否定極性を持つとりたて詞とそうでないとりたて詞を意味的、統語的に分析することを試みた。第5章では、(1b)の i に対応して、否定極性の有無によるとりたて詞の意味の違いを分析した。具体的には、ダケとシカの意味的な比較を行った。定性効果がある所有文や絶対存在文のガ格名詞句の位置に、ダケは現れないが、シカは問題なく現れることを指摘し、ダケは前提集合を持つ強決定詞と、シカは前提集合を持たない弱決定詞としてふるまうことを示した。

第6章では、(1b)の ii に対応して、否定極性表現の統語的分析を行った。特に、「ハの後接・編入」を経たとりたて詞はどのような統語的特徴があるのかを見るために、シカと wh-モとの比較を行った。wh-モは、その形態から明らかのように、「モの後接」を経た否定極性表現である。その結果、ハが後接するタイプは量化子を制限するものである一方、wh-モが後接するタイプは存在量化のオペレータとして働くことを明らかにし、統語的な分布が異なることを示した。さらに、この対立はシカと wh-モに見られる局所な現象なのではなく、他の「ハ後接タイプ」の否定極性表現(マデハや2-トハ等)と「モ後接タイプ」の否定極性表現(1-モ等)にも見られる一般的な対立であることを示した。

以上が本研究の目的と分析結果の概要である。最後に、本稿の貢献と今後の展開として、以下の4つの点について述べておきたい。

### ① 対比のハやモが否定極性を持つことに対する原理的説明

本稿では、否定極性を持つとりたて詞が共通して「ハの後接」という操作を経ていることを明らかにした。しかし、そもそも対比のハは、単独では統語的に否定辞を要求する性質を持たない。



- (2) 太郎は 花子ハ {殴った／殴らなかった}。

否定極性を持たないものが、一定の環境下で否定極性を持つようになるのは、対比のハに限った話ではない。第6章で見たように、否定極性表現の中には「モの後接」という操作を経たものがあるが、モも単独では否定極性を持たない要素である。

- (3) 太郎は デザートモ {食べた／食べなかった}。

しかし、モも、wh-モ (何モ、誰モ) や1-モ (一つモ、一人モ) のように特定の要素に後接した場合は否定極性を持つようになる。このように、否定辞との一致を要求しない対比のハやモが前接要素によって否定極性を持つようになることがある。今後は、そのメカニズムはどうなっているのか、またどのように異なっているのかについて原理的説明を与えることで、否定極性表現に新たな知見がもたらされることが期待される。

ハやモが極性と密接な関わりを持つことは先行研究でも指摘されている (Kato 1985、長谷川 1994、Hasegawa 1994, 2005、小林 2009 他)。例えば、小林 (2009) は、ハとモが肯定文と否定文で非対称性があり、ハは肯定文で、モは否定文で VP 内に収まらないことを指摘している。

- (4) a. ??花子は [VP 箸で ケーキは 食べ] た。  
b. 花子は ケーキは 箸で 食べた。 (小林 2009: 124)
- (5) a. ??花子は [VP 箸で ケーキも 食べ] なかった。  
b. 花子は ケーキも 箸で 食べなかった。 (小林 2009: 124)

小林はこの現象を、ミニマリスト・プログラムのアプローチに基づき、ハとモが持つ統語的な極性の違いによって説明を与えている。小林の説明では、ハは否定極性を持つため肯定文で VP 内に収まることができず、モは肯定極性を持つため否定文で VP 内に収まることができないという<sup>1</sup>。小林の指摘するハとモの極性は、簡略化して言うならば

---

<sup>1</sup> より具体的には、とりたて詞は文が持つ解釈不可能なフォーカス素性[uF]と一致することができるという仮定のもと、ハには否定極性があり、肯定述部はハの[uF]との一致を阻害するため、肯定文ではハは VP 内に収まれないと説明している。モの場合も同様で、モは[uF]と一致す

「肯定／否定述部を嫌う」というタイプの極性であり、今まで見てきたような「否定辞を要求する」というタイプの極性ではない。しかし、ある環境で「肯定／否定述部を嫌う」タイプの極性を持っていたハやモが、一定の要素に後接することで「否定辞を要求する」タイプの否定極性表現へと性格を変えるメカニズムはとても興味深い。今後、本稿の指摘をより一般的なメカニズムで捉え直し、原理的説明を与えることで、日本語の否定極性表現の体系性の新しい側面が明らかになることが期待される。

対比のハやモが否定極性化するメカニズムについては、統語的な観点からだけでなく、意味的な観点からも整理する必要がある。小林以前の先行研究では、対比のハは、意味的には否定のスコープの中に入ると分析されてきた。

(6) 今日のパーティに 全員ハ 来なかった。

(6)は、「全員が来ることはなかった」の意味で解釈され、これは「否定>全員」のスコープ関係であると分析される。しかし、本稿の分析によれば、副助詞にハが後接したタイプの否定極性表現ナドハ (ナド B)、マデハ (マデ B) は、むしろ統語的に高い位置に現れているのであり、否定辞のスコープに入るような統語的に低い位置に現れているのではない。このようなスコープ関係と統語的位置は、一見矛盾しているように感じられる。

小林 (2009) は、否定文での対比のハは、統語的に否定辞より高い位置にあると指摘している。小林は、一見否定より狭いスコープをとっているように見えても、対比のハは常に最大スコープをとる (否定より広いスコープをとる) と分析する。小林は、一見ハが否定より狭いスコープをとっているように見えるのは、対比のハが前提に否定を含むためであると指摘する。これは、対比のハの意味を整理することで、統語的位置とスコープ関係の矛盾を解決しようとする試みである。小林の指摘は、「意味的に否定のスコープの中に入っていること」と「統語的に否定辞より低い位置に現れること」は直接には関連づけられないことを示している。よって、否定とのスコープを論じる際は、スコープ関係をそのまま統語的位置に写像するような構造を仮定するのではなく、独立した統語テストを実施しつつ、とりたて詞の意味の整理を行わなくてはならない。本稿では、B用法のナドやマデの統語的位置が否定辞より高いことを示したが、今後は、否定

---

ることができるが、肯定極性を持つため、否定文では否定述語に[uF]との一致を阻害されてしまい、VP内に収まることができないと説明される。

辞を導く意味的なメカニズムについても整理していく必要がある。

## ② 否定極性を持つとりたて詞の意味の再整理

野田 (1995) などの先行研究は、とりたて詞が統語的に均質ではなく、様々な階層と一致関係にあることを指摘している。しかし、野田 (1995) の「肯否の階層」に様々な性質を持つとりたて詞が混在している状態であることから分かるように、とりたて詞の体系性を捉えきるには至っていない (第 1 章 1.3.2 節参照)。それに対して本稿は、とりたて詞の体系性を捉える新たな切り口として、肯否の対立というものの重要性を示した。本稿のアプローチは、とりたて詞の体系性を論じるにあたって、一つにつき一つの階層や認可子を与えるのではなく、大きく極性を持つか否かで区別した後、個別の特徴を論じるべきとするものである。

しかし、本稿では、副助詞的な A 用法と否定極性を持つ係助詞的な B 用法を統語的に区別すべきことは明らかにしたものの、それらが意味的にどのように区別されるのかについては論じることができなかった。例えば、沼田 (1986) は、ナドやマデの A 用法の意味を、「主張」と「含み」の二つの命題の関わりから記述している。このようなことから考えると、B 用法の意味はどのように記述されるのか。前項①とも共通するが、今後、A 用法と B 用法の意味的な関係性を捉えつつ、統語的な違いを反映できる意味と統語のシステムを構築することで、より体系的な否定極性表現の分析が可能になるものと思われる。

## ③ 係助詞・副助詞という区別の限界

とりたて詞を極性の有無という観点から再整理する場合、係助詞・副助詞という分類の限界について触れておく必要がある。係助詞・副助詞の分類を採用する先行研究が最も重視している両者の違いは、格助詞の承接順や助詞同士の承接順である。しかし、第 4 章 (4.6.2 節) で論じたが、副助詞だけを取り出してみても、助詞の承接順はそれぞれ大きく性質が異なる。古典語のように、副助詞・係助詞で助詞の承接順が明確に分かれているわけではないのである (cf. 近藤 1995 他)。

第 2 章～第 4 章では便宜上、係助詞・副助詞の分類に基づき、否定極性表現と非否定極性表現の違いを観察した。しかし、極性の有無と係助詞・副助詞の分類は、必ずしも常に並行的な関係にあるわけではない。例えば、山田 (1936) や青柳 (2006, 2008) は、

ハやモを係助詞として分類している。本稿では、マデに否定極性を持たない副助詞的な A 用法と否定極性を持つ係助詞的な B 用法があることを指摘した。マデにおけるハとモの後接について観察すると、マデは A 用法のとき、モは後接できるがハは後接できない。また、B 用法のとき、ハは後接できるがモは後接できないという非対称性がある(第 3 章 3.3.3 節参照)。

- (7) a. 信じられないことに、子どもの喧嘩ごときで、警察マデ {\*/ハ/モ} やって来た。  
b. 当然、子どもの喧嘩ごときでは、警察マデ {ハ/\*モ} やって来なかった。

つまり、モは係助詞として分類される要素であるが、マデモは副助詞的な A 用法としてふるまうのである。本稿では、限られた範囲において、係助詞・副助詞と極性の有無を並行的に扱って分析したが、より広範な現象に目を向け、以上のような係助詞・副助詞の分類の問題点を踏まえると、今後は係助詞・副助詞というカテゴリから抜け出て極性という概念を扱っていく必要がある。そうすることで、とりたて詞の体系性についても新たな観点からの発展が期待できるものと思われる。

#### ④ 否定極性を持つとりたて詞とフォーカス

最後に、否定極性と文のフォーカス<sup>2</sup>との関わりについて触れておきたい。とりたて詞が文のフォーカスを担うとする仮定に則った先行研究は多く存在する。しかし、その多くが、Rooth (1985, 1997) の分析に則り、フォーカスを担う要素は代替集合を形成し、その中から一部を取り出し叙述することを仮定している。

本稿では、第 5 章でダケ・シカおよび誰モ・「誰モ+格助詞」はそれぞれ極性の有無だけでなく、前提集合の有無が異なり、否定極性のあるシカや wh-モは前提集合を持たないことを指摘した。すると、上記のような仮定のもとでは、そもそも集合を持たないシカや wh-モが担うフォーカスは論じることができない。本稿は、否定極性を持つとりたて詞の意味を分析したことで、否定極性とフォーカスについても興味深い課題を掘り起

---

<sup>2</sup> ここでいう文のフォーカスとは、文の最新情報を担う要素であり、沼田 (2009) の言う「とりたてのフォーカス」とは異なる。

こしたと言える。

先行研究は、一口に文のフォーカスといっても、複数の性質を持つものが混在していることを指摘している (Kiss 1998、Vallduví & Vilkuna 1998、井島 1998 等)。井島 (1998) は、フォーカスのタイプとして、「実質的新情報」と「選択的新情報」の二つがあることを指摘している。前者は「談話の中で最初に聞き手に与えられる情報」(井島 1998: 8) であり、後者は「それ自体はすでに旧情報として登録されているが、複数の可能性のうち特定のものに限定するという点で新しい情報価値を持つもの」(井島 1998: 9) である。井島の指摘に従って本稿で扱ったとりたて詞を分析するならば、前提集合を持たないシカは前者のフォーカスを担い、前提集合を持つダケは後者のフォーカスを担っていることになる。

ダケとフォーカスの関係については、さらに複雑な問題を考えなくてはならない。それは、とりたて詞の中にはそもそも文のフォーカスを担わないものも存在するためである。例えば、小林 (2009) は、フォーカスは必ず否定より広いスコープをとると仮定しているが、ダケは否定より広いスコープも狭いスコープもとることができる。このことは、ダケが必ずしも文のフォーカスを担わないことを意味している<sup>3</sup>。

多くの先行研究がとりたて詞はフォーカスを担うという仮定のもとで分析している。しかし、否定極性を持つとりたて詞とそうでないとりたて詞を比較することで、そのような一元的な見方ではとりたて詞とフォーカスとの関わりは捉えきれないことが明らかになった。ここで指摘しただけでも、とりたて詞と文のフォーカスとの関わり方には、「ある集合の中から当該の要素を取り出すフォーカスを担う」「前提集合をもたないフォーカスを担う」「文のフォーカスとは直接関わらない」の3パターンがある。①②の問題点とも関連するが、とりたて詞の統語的性質 (極性の有無) を整理することで、フォーカスとの関わりについても更なる新たな発見がなされることが期待される。

以上、4つの点について展望を述べた。以上の4つの点は、どれも「ハヤモが統語的に否定極性化することに対する原理的説明」「とりたて詞や否定極性表現の意味の再整理」「フォーカスとの関わり」といったことが関連している。つまり、これらの4つの課題は、否定極性表現における「統語—意味—談話」の3者のインターフェイスの整理に関わる問題と言い換えることができる。このように、あらゆる方面に広がりを見せる

---

<sup>3</sup> この点については、井戸 (2015) で詳しく論じた。

課題を掘り起こすことができたのは、とりたて詞が顕著に発達している日本語において否定極性表現を分析した成果であると考えられる。残された課題は多いものの、本稿では、従来、個別の語の分析に偏りがちだった否定極性表現に新たな視座を提供し、日本語の中にどのように位置づけられるかに関して、興味深い事実を掘り出すことができた。本稿が扱った現象は未だ一部分にとどまるが、その指摘は、「統語—意味—談話」のいずれにも展開が期待できる広い射程を持った重要な観察であると考えられる。

## 参考文献

- 青柳宏 (2006) 『日本語の助詞と機能範疇 南山大学学術叢書』 ひつじ書房.
- 青柳宏 (2008) 「とりたて詞の形態的、統語的、意味的ふるまいについて一係助詞、副助詞という分類の有意性を中心に一」『日本語文法』 8 (2), pp.37-53, 日本語文法学会.
- 安部朋世 (1999) 「ダケの位置と限定のあり方一名詞句ダケ文とダケダ文一」『日本語科学』 6, pp.32-46, 国立国語研究所.
- 安部朋世 (2003) 「「とりたて」のナド」『鶴見大学紀要第 1 部国語国文学編』 40, pp.7-19, 鶴見大学.
- 飯田隆 (2002) 「言語と存在一存在文の意味論」中山純男 (編) 『西洋精神史における言語観の諸相』 pp.5-30, 慶応義塾大学出版会.
- 井島正博 (1998) 「名詞叙述文の多層的分析」『成蹊大学文学部紀要』 33, pp.1-53, 成蹊大学文学部学会.
- 井戸美里 (2015) 「とりたて詞ダケにおけるとりたてのフォーカスと談話のフォーカス」、『言語学論叢』 オンライン版 12, (通巻 34 号), pp.71-83, 筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻一般言語学研究室・応用言語学研究室.
- 江口正 (2000) 「「ほか」の 2 用法について」『紀要 言語・文学編』 32, pp.291-310, 愛知県立大学外国語学部.
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館.
- 奥津敬一郎 (1986) 「序章」奥津敬一郎、沼田善子、杉本武 (共著) 『いわゆる日本語助詞の研究』 pp.1-104, 凡人社.
- 片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造：かき混ぜ文と否定呼応表現』 くろしお出版.
- 片岡喜代子 (2008) 「否定極性表現と前提」『日本言語学会第 136 回予稿集』 pp. 372-377.
- 加藤康彦 (2010) 「否定と統語論」加藤泰彦、吉村あき子、今仁生美 (編) 『否定と言語理論』 pp.2-26, 開拓社.
- 岸本秀樹 (2005) 『統語構造と文法関係』 くろしお出版.
- 岸本秀樹 (2010) 「否定辞移動と否定の作用域」加藤泰彦、吉村あき子、今仁生美 (編) 『否定と言語理論』 pp.27-50, 開拓社.
- 衣畑智秀 (2007) 「歴史的観点からみた否定の作用域」『日本言語学会第 135 回大会予稿集』 pp.356-361.
- 金水敏 (2002) 「日本の構文論」飛田良文、佐藤武義 (編) 『現代日本語講座 5 文法』

- pp.55-78, 明治書院.
- 工藤真由美 (2000) 「2 否定の表現」金水敏、沼田善子、工藤真由美 (共著) 『日本語の文法 2 時・否定ととりたて』 pp.93-150, 岩波書店.
- 久野暲 (1983) 「第 8 章 否定辞と疑問助詞のスコープ」久野暲 (編) 『新日本文法研究』 pp.117-146, 大修館書店.
- 久野暲 (1999) 「「ダケ・シカ」構文の意味と構造」アラム佐々木幸子 (編) 『言語学と日本語教育 実用的言語理論の構築を目指して』 pp.291-319, くろしお出版.
- 久野暲・モネーン多津子 (1983) 「第 10 章「ダケ・ノミ・バカリ・クライ」と格助詞の語順」久野暲 (編) 『新日本文法研究』 pp.157-173, 大修館書店.
- 久野正和 (2010) 「否定一致表現の構成要素と認可の方略」加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美 (編) 『否定と言語理論』 pp.79-117, 開拓社.
- 許斐慧二 (1989) 「「しか～ない」構文の構造」大江三郎先生追悼論文集編集委員会 (編) 『英語学の視点』 pp.369-392, 九州大学出版.
- 小林亜希子 (2009) 「とりたて詞の極性とフォーカス解釈」『言語研究』 136, pp.121-151, 日本言語学会.
- 近藤泰弘 (1995) 「中古語の副助詞の階層性について—現代語と比較して—」益岡隆志、野田尚史、沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』 pp.261-275, くろしお出版.
- 佐野まさき (2001) 「日本語のとりたて詞の素性移動分析と Minimality 効果」『日本英語学会第 18 回大会研究発表論文集 (JELS18)』 pp.181-190, 日本英語学会.
- 佐野まさき (2007) 「とりたて詞の認可と最小性条件—カラ節と主節との関係を中心に」長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象—統語構造とモダリティ』 pp.73-111, ひつじ書房.
- 佐野まさき (2009) 「とりたて詞と語彙範疇—述部焦点化構文からの事例研究—」湯本由子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 pp.349-372, くろしお出版.
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』 くろしお出版.
- 竹沢幸一 (2016) 「日本語モーダル述語構文の統語構造と時制辞の統語的役割」藤田耕司、西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ 生成文法・認知言語学と日本語学』 pp.55-76, 開拓社.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版.
- 中西久美子 (1995) 「ナド・ナンカとクライ・グライ—低評価を表すとりたて助詞—」宮島達夫、仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上)』 pp.328-334, くろしお出版.



- 西岡宣明 (2007) 『英語否定文の統語論研究』くろしお出版.
- 西岡宣明 (2010) 「文否定と否定素性移動」加藤泰彦、吉村あき子、今仁生美 (編) 『否定と言語理論』 pp.51-73, 開拓社.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』ひつじ書房.
- 西山佑司 (2013) 「第 11 章 名詞句の意味機能から見た存在文の多様性」西山佑司 (編) 『名詞句の世界』 pp.251-329, ひつじ書房.
- 沼田善子 (1986) 「第 2 章 とりたて詞」奥津敬一郎、沼田善子、杉本武 (共著) 『いわゆる日本語助詞の研究』 pp.105-255, 凡人社.
- 沼田善子 (1989) 「とりたて詞とムード」仁田義雄、益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ』 pp.159-192, くろしお出版.
- 沼田善子 (2000) 「3 とりたて」金水敏、工藤真由美、沼田善子 (共著) 『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』 pp.151-216, 岩波書店.
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志、野田尚史、沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』 pp.1-35, くろしお出版.
- 朴江訓 (2007) 「「しか…ない」の「多重 NPI」現象について」『日本語文法』 7 (2), pp. 154-170, 日本語文法学会.
- 朴江訓 (2009) 「日本語における否定一致現象に関する研究：韓国語との対照の観点から」筑波大学博士論文.
- 長谷川信子 (1994) 「「も」と否定辞と論理形式」『言語』 23 (2), pp.116-119, 大修館書店.
- 長谷川信子 (2007) 「日本語の主文現象から見た統語論：文の語用機能との接点を探る」長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』 pp.1-21, ひつじ書房.
- 廣瀬幸生 (2005) 「話者指示の領域と視点階層」『文藝言語研究 言語篇』 47, pp.45-67, 筑波大学大学院人文社会科学研究所文芸・言語専攻.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版.
- 松井晴子 (2009) 「日本語における一致現象の諸相：主格目的語と否定極性項目を中心に」筑波大学博士論文.
- 松下大三郎 (1928) 『改選標準日本文法』(徳田正信 (編) 『改選標準日本文法』勉誠社.)
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』(徳田正信 (編) 『増補校訂標準日本口語法』勉誠社.)

- 宮地朝子 (2007) 『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究—文法史構築の一試論』  
ひつじ書房.
- 宮地朝子 (2010) 「日本語否定文と文法化—シカ類の変化と変異を中心に」加藤泰彦、  
吉村あき子、今仁生美 (編) 『否定と言語理論』 pp.170-192, 開拓社.
- 茂木俊伸 (1999) 「とりたて詞「まで」「さえ」について—否定との関わりから—」『日  
本語と日本文学』 28, pp.27-36, 筑波大学日本語日本文学会.
- 茂木俊伸 (2001) 「とりたて詞の区分をめぐる」『言語学論叢』 20, pp.61-83, 筑波大学  
人文社会科学研究所文芸・言語専攻一般言語学研究室・応用言語学研究室.
- 茂木俊伸 (2004) 「とりたて詞文の解釈と構造」筑波大学博士論文.
- 茂木俊伸 (2006) 「「しか」の語順現象」『鳴門教育大学研究紀要』 21, pp.234-242, 鳴門  
教育大学.
- 森田良行 (1972) 「「だけ・ばかり」の用法」『紀要』 10, 早稲田大学語学教育研究所.(森  
田良行 (1994) 『動詞の意味論的文法研究』 pp.375-404, 明治書院 に採録)
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』角川書店.
- 山田敏弘 (1995) 「ナドとナンカとナンテ—話し手の評価を表すとりたて助詞—」宮島  
達夫、仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上)』 pp.335-344, くろしお出版.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』宝文館出版.
- 渡辺明 (2005) 『ミニマリストプログラム序説 生成文法のあらたな挑戦』大修館書店.
- Aoyagi, Hiroshi & Toru, Ishii (1994) On NPI Licensing in Japanese. In Noriko Akatsuka (ed.),  
*Japanese/ Korean Linguistic*, 4, pp.295-311, University of Chicago Press.
- Belletti, Adriana (1988) The Case of Unaccusative. *Linguistic Inquiry*, 19, pp.1-34.
- Carlson, Greg N. (1977) Reference to Kinds in English. University of Massachusetts, Ph.D.  
dissertation.
- Chomsky, Noam (1970) Remarks on Nominalization. In Roderick Jacobs and Peter S. Rosenbaum  
(eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, pp.184-221, Ginn.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Foris.
- Chomsky, Noam (1991) Some Notes on Economy of Derivation and Representation. In Robert  
Freidin (ed.), *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, pp.417-454, MIT Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. MIT Press.
- Fukui, Naoki (1995) The Principles and Parameters Approach: A Comparative Syntax of English  
and Japanese. In Masayoshi Shibatani and Theodora Bynon (eds.), *Approaches to Language  
Typology*, pp.327-372, Clarendon Press.

- Hasegawa, Nobuko (1993) Floating Quantifiers and Bare NP Expressions. In Nobuko Hasegawa (ed.), *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, pp.115-145, Kurosio Publishers.
- Hasegawa, Nobuko (1994) Economy of Derivation and A'-movement in Japanese. In Masaru Nakamura (ed.), *Current Topics in English and Japanese*, pp.1-25, Hituzi Syobo.
- Hasegawa, Nobuko (2005) EPP Materialized First, Agree Later: Wh-Questions, Subjects and MO-phrases. *Scientific Approaches to Language*, 4, pp.33-80.
- Heageman, Liliane & Raffaella Zanuttini (1991) Negative Heads and the Neg Criterion. *The Linguistic Review*, 8, pp.233-251.
- Heageman, Liliane & Raffaella Zanuttini (1996) Negative Concord in West Flemish. In Adriana Belletti and Luigi Rizzi (eds.), *Parameters and Functional Heads*, pp.117-179, Oxford University Press.
- Heageman, Liliane (1995) *The Syntax of Negation*. Cambridge University Press.
- Heim, Irene R. (1982) The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrase. University of Massachusetts, Ph.D. dissertation.
- Higginbotham, James (1980) Pronouns and Bound Variables. *Linguistic Inquiry*, 11, pp.679-708.
- Hoji, Hajime (1985) Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese, University of Washington, Ph.D. dissertation.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. The MIT Press.
- Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*, *Sophia Linguistica Monograph 19*, Sophia University.
- Kato, Yasuhiko (1994) Negative Polarity and Movement, In Hiroyuki Ura and Masatoshi Koizumi (eds.), *Formal Approaches to Japanese Linguistics*, 1, (*MIT Working Papers in Linguistics*, 24), pp.101-120.
- Kato, Yasuhiko (2002) Negation in English and Japanese: Some (A)symmetries and Their Theoretical Implications. *Proceedings of the Sophia Symposium on Negation*, pp.1-21, Sophia University.
- Kawashima, Ritsuko & Hisatsugu Kitahara (1992) Licensing of Negative Polarity Items and Checking Theory: A Comparative Study of English and Japanese. *Proceedings of the Formal Linguistic Society of Mid-America*, 3, pp.139-154.
- Kinuhata, Tomohide (2010) The Scope of Pronounced and Unpronounced Negation: A Case of Japanese Shika-nai and Its Correlates. *Proceedings of the Seventh International Workshop of Logic and Engineering of Natural Language Semantics*, pp.171-184.
- Kiss, Katalin É. (1998) Identificational Focus Versus Information Focus. *Language*, 74, pp.245-

273.

- Klima, Edwards S. (1964) Negation in English. *The Structure of Language*, In Jerry A. Fodor and Jerrold J. Katz (eds.), pp. 246-323, Prentice-Hall.
- Konomi, Keiji (2000) On Licensing of SHIKA-NPIs in Japanese. In Kenichi Takami, Akio Kamio, and John Whitman (eds.), *Syntactic and Functional Explorations: In Honor of Susumu Kuno*, pp.51-82, Kurosio Publishers.
- Kotani, Sachie (2009) Focus Particles and Their Effects in the Japanese Language. University of Delaware, Ph.D. dissertation.
- Kuno, Masakazu (2007) Focusing on Negative Concord and Negative Polarity: Variations and Relations. Harvard University, Ph.D. dissertation.
- Kuno, Susumu (1980) The Scope of the Question and Negation in Some Verb-final Languages, In Jody Kreiman and Almerindo E. Ojeda (eds.), *Papers From the Sixteenth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*, pp.155-169, University of Chicago.
- Kuroda, S-Y (1965) A Generative-grammatical Studies of the Japanese Language. MIT, Ph.D. dissertation.
- Ladusaw William A. (1979) Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relation. University of Texas, Ph.D. dissertation.
- Ladusaw, William A. (1980) *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relation*. Garland Publishing.
- Milsark, Gary L. (1974) Existential Sentences in English. MIT, Ph.D. dissertation.
- Muraki, Masatake (1978) The Shika Nai Construction and Predicate Restructuring, In John Hinds and Irwin Howard (eds.), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, pp.155-177, Kaitakusya.
- Nishioka, Nobuaki (2000) Japanese Negative Polarity Items Wh-MO and XP-Shika Phrases: Another Overt Movement Analysis in Terms of Feature Checking. In Kenichi Takami, Akio Kamio, and John Whitman (eds.), *Syntactic and Functional Explorations: In Honor of Susumu Kuno*, pp.159-184, Kurosio Publishers.
- Pollock, Jean-Yves (1989) Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP. *Linguistic Inquiry*, 20 (3), pp.365-424.
- Postal, Paul (1971) *Cross-Over Phenomena*. Holt, Reinhart and Winston.
- Rando, Emily & Donna Jo Napoli (1978) Definites in There-sentences. *Language*, 54, pp.300-313.
- Rizzi, Luigi (1997) The Fine Structure of Left Periphery. In Liliane Haegeman (ed.), *Elements of*

*Grammar*, Kluwer. (長谷部郁子訳「節の left periphery (左端部) 構造の精緻化に向けて」長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究：命題を超えて』 pp.333-369, 開拓社.)

Rooth, Mats (1985) *Association with Focus*. University of Massachusetts, Ph.D. dissertation.

Rooth, Mats (1997) 10. Focus. In Lappin Shalom and Chris Fox (eds.), *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, Blackwell Reference Online.

Takahashi, Daiko (1990) Negative Polarity, Phrase Structure, and the ECP. *English Linguistics*, 7, pp.129-146.

Takubo Yukinori (1985) On the Scope of Negation and Question in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics*, 10, pp.87-115.

Vallduví, Enric (1994) Polarity Items, N-words and Minimizers in Catalan and Spanish. *Probus*, 6, pp.263-294.

Vallduví, Enric & Maria Vilkkuna (1998) On Rheme and Kontrast. In Peter Culicover and Louise McNally (eds.), *The Limit of Syntax (Syntax and Semantics, 29)*, pp.79-108, Academic Press.

Ward, Gregory & Betty Birner (1995) Definiteness and the English Existential. *Language*, 71, pp.772-742.

Wasow, Thomas (1972) *Anaphoric Relations in English*. MIT, Ph.D. dissertation.

Watanabe, Akira (2004) The Genesis of Negative Concord: Syntax and Morphology of Negative Doubling. *Linguistic Inquiry*, 35, pp.559-612.

Yoshimura, Keiko (2007) What Does ONLY Assert and Entail? *Lodz Paper in Pragmatics*, 3, pp.97-117.

## 辞典類

小学館 (2002) 『日本国語大辞典』 (第2版)

## 既発表論文、口頭発表との関係

### 序章

新規執筆

### 第1章

新規執筆

### 第2章

井戸美里 (2013) 「否定的な評価を表す二種類のとりたて詞ナド」『日本語文法』13 (1), pp.68-83, 日本語文法学会.

井戸美里 (2014) 「否定的評価を表すとりたて詞ナドの統語的位置と構造」筑波大学博士課程人文社会科学研究科中間評価論文.

井戸美里 (2014) 「単一／複合判断の表出と否定的評価を表すナドの2種」『筑波応用言語学研究』 (23) pp.96-109, 筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学研究室.

### 第3章

井戸美里 (2013) 「意外を表すとりたて詞マデの統語的位置についての考察—否定的評価を表すナドとの比較を通して—」第128回関東日本語談話会、於学習院女子大学.

### 第4章

新規執筆

### 第5章

井戸美里 (2015) 「とりたて詞ダケ、シカの定性制約と集合の量化タイプ」日本語文法学会第16回大会、於学習院女子大学.

井戸美里 (2016) 「いわゆる定性効果から見たとりたて詞ダケ、シカの前提集合」『日本語文法』16 (2) pp.111-127, 日本語文法学会.

### 第6章

井戸美里 (2016) 「否定極性表現シカ・誰モの統語的位置」関西言語学会第41回大会、於龍谷大学深草キャンパス.

### 終章 (一部)

井戸美里 (2015) 「とりたて詞ダケにおけるとりたてのフォーカスと談話のフォーカス」『言語学論叢』オンライン版 12, (通巻34号), pp.71-83, 筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻一般言語学研究室・応用言語学研究室.